

329  
38  
188



始





327-186  
陸軍歩兵中尉 原田政右衛門 著

遺恨  
十年 白露 未来戦

發行所 武俠世界社

10.27



此書を

奉天戦捷記念碑下に捧けて過去戦役に戦死  
病歿せる忠勇無比なる戦士の英靈を慰す

69



必道可保法  
 故能為符賜  
 之波



見  
 者

本書を草するに當り、余の貧弱なる筆力に不尠  
 のエネルギーを與へ給ひし諸彦、及執筆の企圖  
 を斷念せしめむと忠告し給ひし諸君、孰れに對  
 しても余は深厚なる感謝を捧ぐ

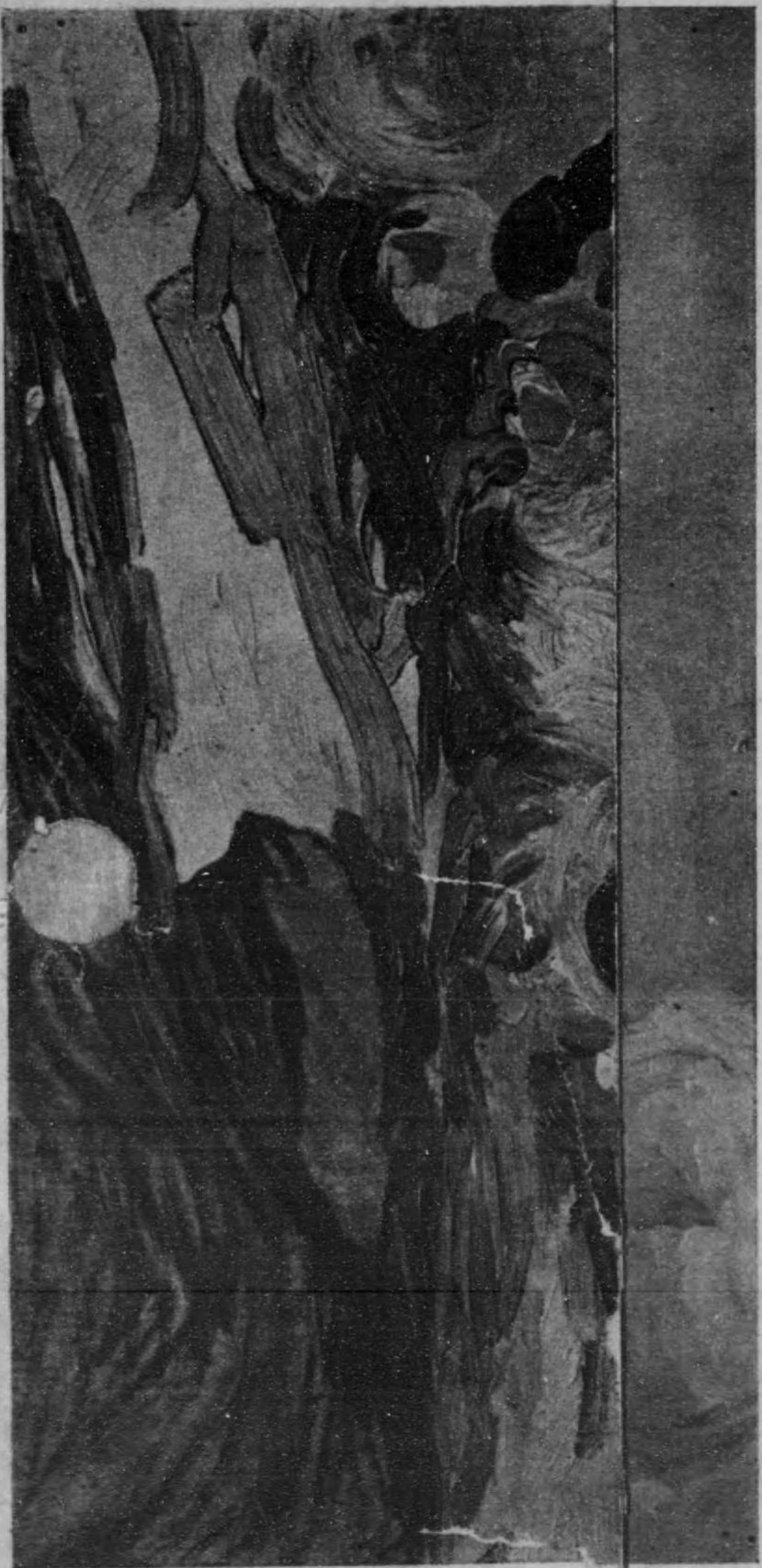
大正二年五月十日

稿了に際して

著者



襲逆のザラスるな猛獐



倉田白羊画伯畫



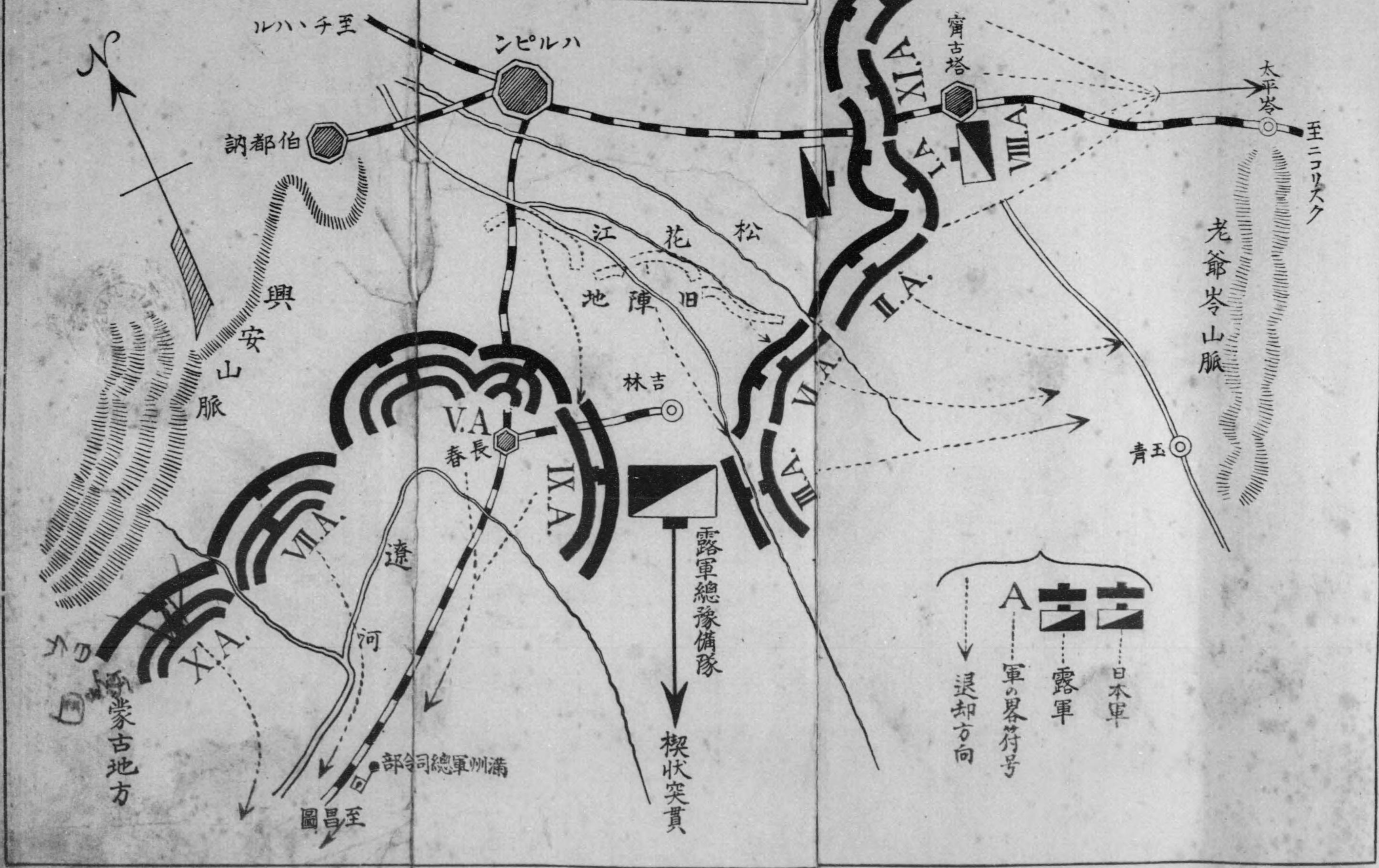
襲逆のガラスるな猛獳



倉田白羊画伯畫



ハルビン附近會戰略圖  
 (二月八日午後之狀況)





序

原田中尉は年齢経験俱に未だ其域に達しあらず、兵を談じ世道人心を評する所固より予の首肯し能はざるもの尠からずと雖、其胸奥に渦巻く献身殉國の炎は化して潑瀾の士氣となり、累卵一刻も忽にすべからざる憂國の至誠は予をして中尉の誤解を問ふを要せざらしめ、懦弱に趨らんとする現代青年の頭上に必ずや一大痛棒を下すべきを信じ快哉を禁ずる能はざるものあらしめたり。

中尉は今未來戦を公にせんとす。其着想其着眼必ずしも予の同ずる所にあらずと雖、陛下の爲皇國の爲何事をか貢獻せんとする熱烈なる努力は、予も亦多大なる期待を抱き且つ其範圍に於て此舉に同意を表するに躊躇せず。

數ふれば既に八年の昔、曠古の大捷を以て其局を結べる日露戦争も今



や一睡の夢の歴史に葬り去られんとす。されど、歴史とは人間對人間の争鬭事蹟にして治亂興亡何れか其裏面に鮮血の滴りなきものあらんや。爛々たる劍戟の裏面に慘烈なる敗亡者の骸骨を現出する事古今東西皆其れ然矣。武装的平和、吾人は其反面に横はる刀劍兇器の閃めき及び敗亡の悲惨を常に目前に展開しあらざるべからず。中尉が此點に注目したるは予の多とする所なり。

中尉の手に成れる數百枚の原稿を讀了せし一刹那、予の頭腦に湧き出でし感想の一片を綴りて之れを中尉に與ふるものなり。

大正二年五月十五日

陸軍少將 伊崎良熙

日露未來戰自序

若しも私が參謀官であつたならば、此の様な著述は夢にも思ひ立たなかつたであらう。何となれば軍機の秘密に顔出しをするやうな身分の男子が、未來の戦争を綴ると云ふ事は、假令其の説く所全然架空であるにもせよ、尠くも軍事界を聳動し平和の國際を呪ふやうな嫌ひを起さぬとも謂へぬからである。軍政の如何なるものか——政治外交の如何なるものであるかは、私は全然没交渉——無智の門外漢である。其故未來戰を綴るとしても其處に一片の責任も一塊の借越も生ぜぬものと信じてゐる。随つて軍機を漏洩するの虞は絶対に無い。

偶然にも軍機上其筋の豫期する或物と合一する箇所があつたにしても、其れは思ひも掛けぬ場所と思ひも掛けぬ人に出會したやうなもので、無數の石を投げる裡には、偶思ひも掛けぬ體に命中するやうな種類と同一のものである。下級不識の青年士官が堂々百萬の大軍を動かしたからとて、其れが實際に當つて何程の意味を有たう?! 私はさうした氣樂な境遇に在るのを喜びもし且つ好機として筆を握つたのである。

然しながら假令私が無責任であるとは云へ、意味の無い書物は綴らぬ心算である。武装の平和其裏面に閃く残酷な鮮血を動もすると武装を要せぬ平和其裏面には何等の暗流も無いかの



如く誤解して居る生靈に向つて赤誠の絶叫をなさんが爲め——低級の常識に甘んじて戦勝に酔ふた墮落せる時代青年を覺醒奮起せしむべく——かた／＼未來の戦争が過去戦争に比して如何に戦慄の程度を高めてゐるかを報らせんと——私個人が現在感じつゝある心理状態を七千萬の同胞に訴へて正否を判決すべく——常に武俠を抱きつゝも脾肉の嘆に堪へ得ざる健純なる日本男兒を慰むべく——過去の犠牲を將に忘れんとする健忘患者に注射を施すべく——さうした多くの願を私の全身全神に漲らして書いたものである。けれど私は一介の武辨だ、文筆を以て世に見えんとする身で無いから果して其等の希望を達し得るか得ないかは固より未知數である。と共に私の常に遺憾とする所である。

果して未來の敵國が露西亞であるか露西亞で無いか其處は私の關知する所て無い。曠古の大勝を以て其局を結んだ明治三十七八年役も既に遠く去つて仕舞つた。世界の強國として我も許し他人も許してゐる露國が、斯の戦敗を唯一つの戦敗として永久に甘んずるであらうか？私はいさうした事を考へて見ると露國のあの巨大な腕の影が極東大陸上に映るやうに思へるのだ。其處は曾て私も踏み歩いた事のある經驗上戦渦を描寫するに最も容易な平野として敢て未來戦の舞臺と背景とに採用したのみで何等他に深い意味の存する譯では無い。軍機其れに抵觸するの虞を抱いた度に私は其等を絶對に避くるが爲め當然有り得べき事體を

も敘述しない所がある。随つて陸海軍の戦時編制など専門家の眼目に觸れたら噴飯に價するものゝある事を知つてはゐるが、此處に私の煩悶懊惱の血を宿した事を汲んで欲しい！

『戦敗國となる勿れ』『日本は累卵よりも猶危き姿勢にあり』——此二つは私が公々然と絶叫する最上の要素である。私が此の様な不祥不吉な言論を吐露したが爲めに邦家の秩序が紊亂するであらうか？我等の邦家は其れ程に内省の能力を消耗してゐるであらうか？私は私の信仰と信念とが内省の力を失つた人々に由つて傷つけられるならば、私は此世に活て陛下の忠良なる臣民とならんよりも死んで忠良なる犠牲となる事を歡ぶものである。其處に私の一命を剪裁すべき組がある、私は今其組上に横はるべく決心してゐる。

本書を公にするに際し、三浦觀樹將軍閣下 陸軍少將伊崎良照閣下の題辭及び序文を辱ふしたるは不肖の光榮とし、且つ感謝に堪へざる所である。又起稿以來容易ならぬ情誼を垂れ給へる法學士小島七郎君 武俠世界主筆押川春浪漁史 冒險世界主筆阿武天風漁史 武俠世界編輯主任藤井白雲子の四足下に對し深厚なる感謝を表す。

大正二年五月二十七日 日本海大海戦第九週年紀念の日

帝都の一隅にて 著者 識



目次

第一章 悪魔の搖籃……………(一—四)

- (一) 世界一の腐敗國……………一
- (二) 悲しい哉強國の末路……………六
- (三) 兵は兇器にあらず……………三
- (四) 亡國の閃き……………一六
- (五) 戦敗の要素……………二〇

第二章 國交の斷絶……………(二五—五〇)

- (一) 世界王——王の王……………二五
- (二) 日英同盟の破壊……………二九
- (三) 陸軍の勢力海軍の勢力……………三四
- (四) 海上の極威……………四一



(五) 世界戦の端緒……………四六

第二章 動員と出兵……………(五—八二)

(一) 第一發——悲憤……………五二

(二) 戦闘序列——兵力の膨脹……………五六

(三) 第一期作戦目標……………六六

(四) 陸海軍の首將……………七三

(五) 黄色人種の代表國……………七七

第四章 悲報頻々……………(八—一〇八)

(一) 冒頭の陸戦……………八二

(二) 大輸送——戦機發展……………八七

(三) 日本海上の悲劇……………九二

(四) 大海戦勝敗決せず……………九六

(五) 第二戦——嗚呼……………一〇二

第五章 榴風沐雨……………(一〇九—一四九)

(一) 鐵嶺附近の會戦……………一〇九

(二) 平面戦の極致……………一一七

(三) 第二次動員……………一二七

(四) 第一軍の捷戦……………一三三

(五) 義勇軍のカムチャツカ上陸……………一三七

(六) 極北の快報……………一四三

(七) 嗚呼！七月三十日！！……………一四八

第六章 天空の妖魔……………(一五〇—一七三)

(一) 腐敗の象徴……………一五〇

(二) 航空十年皆是れ血……………一五五

(三) 妖魔の大血戦……………一五九

(四) 嗚呼陸上の生靈……………一六五



(五) 平面戦と立體戦……………一六

第七章 戦線五百里……………(一七—一九)

(一) 蒙古に於ける惡戦苦闘……………一七

(二) 苦しき防禦戦……………一七

(三) 本能の發揮……………一八

(四) 七十萬の大軍と戦線……………一九

(五) 總司令官の身の上……………一九

第八章 長春附近の大會戦……………(一九—三四)

(一) 獻身殉國の大節……………一九

(二) 勝利の第一歩……………二〇

(三) 俘虜降参人の處置……………二〇

(四) 戦勝のたゞもの……………二二

(五) 第二期作戦の旋回運動……………二二

第九章 極北と極南……………(二五—三五)

(一) 日本の膨脹……………二五

(二) 極南の惡魔——唯一撃……………二六

(三) 底の藻屑……………二七

(四) 世界の地圖……………二八

(五) 怒濤上の壯觀……………二九

第十章 攻圍軍の苦慘……………(三一—三六)

(一) 彼我の戦鬪力……………三一

(二) 第一回の總攻撃……………三二

(三) 血性反應……………三三

(四) 日本刀の切味……………三三

(五) 腹背の勁敵……………三三

第十一章 嚴寒の大陸……………(三七—四〇)



(一) 松花江畔……………二七

(二) 一勝一敗鮮血雪を染む……………二八

(三) 彼我の戦士六百萬……………二八

(四) 浦鹽斯德要塞の陥落……………二九

(五) 形勢不穩……………二九

第十二章 嗚呼此憤淚……………(三〇一—三一一)

(一) 日本魂とスラヴ魂……………三〇一

(二) 四面楚歌の聲……………三〇六

(三) 氷上の阿鼻叫喚……………三〇〇

(四) 楔状突貫……………三二七

(五) 嗚呼！此退軍！！……………三三三

(六) 烙印を奈何せん……………三三七

第十三章 暗澹たる運命……………(三三三—三五四)

(一) 戦勝の勇者と戦敗の怯者……………三三二

(二) 遂に防禦の姿勢……………三三六

(三) 臺灣海峡の大海戦……………三三〇

(四) 海上權の放棄……………三四六

(五) 我等の背後……………三五〇

第十四章 南柯の夢……………(三五五—三七七)

(一) 三千年の歴史……………三五五

(二) 水の恨み……………三九九

(三) 朝鮮の運命……………三六四

(四) 北海の同胞……………三六八

(五) 臺灣の奇禍……………三七三

第十五章 戦争と平和……………(三七八—四〇〇)

(一) 虐殺……………三七八



(一) 灰燼……………三六四

(二) 人權……………三六九

(三) 我等の同胞……………三九三

(四) 飢餓切迫……………三九六

第十六章 斷末魔……………(四〇一—四一八)

(一) 壓縮せられたる國……………四〇一

(二) 黒船の影……………四〇五

(三) 黄人の衰亡……………四〇八

(四) 著者の心裡……………四二二

(五) 解決は如何に?……………四二七

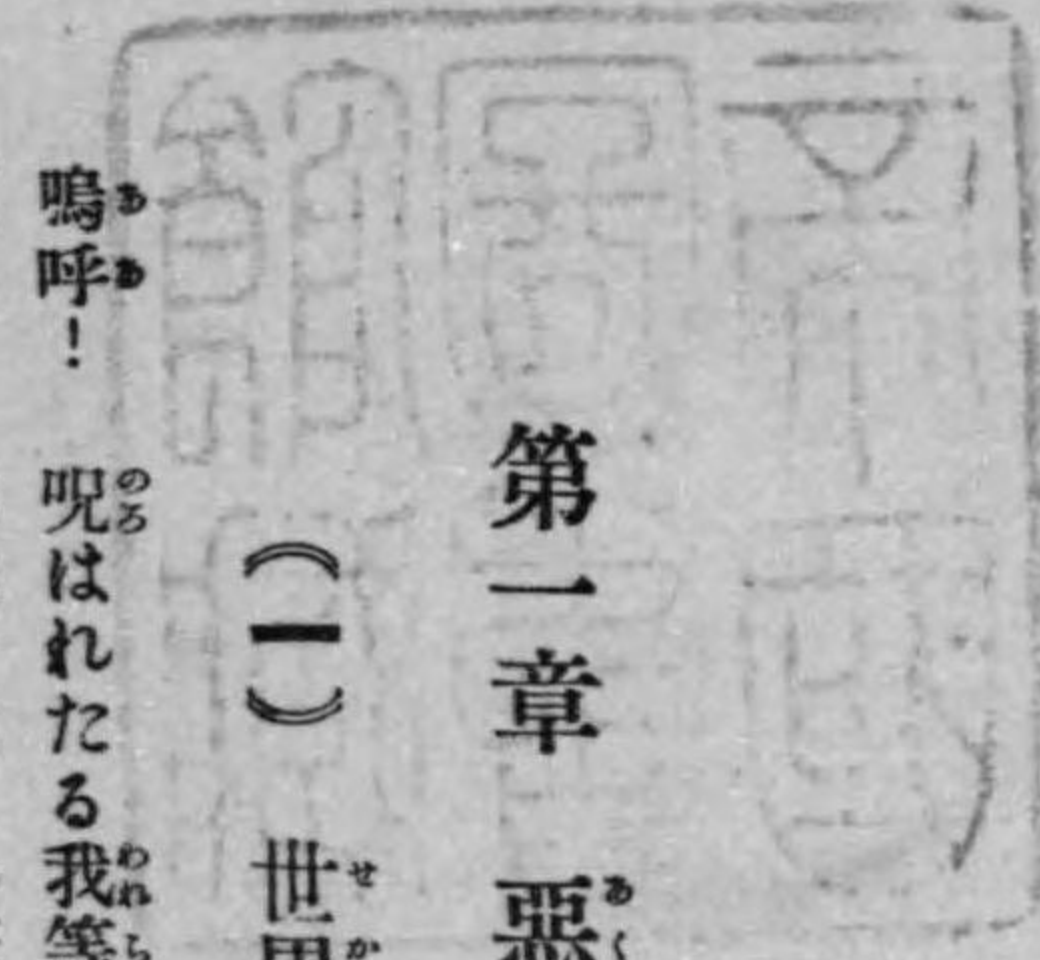
目次終

十年恨日露未來戰

原田歩兵中尉著

第一章 惡魔の搖籃

(一) 世界一の腐敗國



嗚呼！ 呪はれたる我等の祖國よ！！

建國三千年未だ曾て夷狄の爲めに汚されざりし神聖なる大日本帝國は、遂に妖魔の毒煙に包まれて此尊き社稷、此尊き墳墓の國土を南柯一睡の夢に葬らんとはする也。

吾人は過去の日露戦争が敗北に終らざりしを千載の痛嘆事とするものである。大日本帝國は戦勝を獲たるを此上なき大不幸とするものである。

惡魔の神は祖國に戦勝の魔睡薬を投じて、隨喜の泉畔にアダム——イヴの歡樂に憧れて全身是れ毒血の充滿する所とならしめた。戦勝に心酔し小提に囚はれたる國民は、身神共に腐敗し



て手足の機能を失ひ、肉動かざるに眼見えざるに、今猶口にのみ戦勝を誇張して、猛烈なる毒劑の襲ふが儘に、徒らに時日を推移しつゝ、今日を迎へる事となつた。腐蝕と壓縮とに痛く衰弱せる彼等の肺臓には、最早新鮮なる空気を吸収するの力さへも消耗して仕舞つた。斯様な状態にありながら彼等は戦へば必ず勝つものだと思つてゐた。其れは努力も覺醒も必要とせず、我等の祖國は常に天佑を惠まれあるものと御幣を擔つた。列強の武備緊張を觀つゝ、感じつゝ、自國の武裝に對しては、將に切開せんとする腫物に觸るがやうな嫌惡と戦きとを覺ゆるのであつた。甚しき臆病、甚しき懦弱、甚しき不決斷——其等の亡國風が到る處に吹き寄つて、内にも外にも屈辱てふ忌しき現象が一個の國是と成らんとするやうな有様が見えだしたのである。

此十年間、其れは惡魔に取つては眞の一瞬時……其短き星霜は、七千萬餘の同胞が戦勝に酔つた儂ない夢の迹とは成り終つたのである。夢！夢！！萬事皆是れ曉の夢に過ぎぬ。覺めたる國民は現實の世に於て戦敗の悲惨を嘗めねばならぬ。暴虐なる運命の前に、何の猶豫も何の條件も無く、折跪づかざるゝ事となつた。

戦ひの敗るゝは敗るゝの日に敗るゝのでは無い。歡樂の野邊に逍遙した此十年間に、吾人は遂に敗明の基因を自己の手によりて造上げたのであつた。知らずに——知つても努力せずに：

……一舉手一投足悉く戦敗の原因とならぬ物は無かつた。過去戦役後の日本は一瞥腐敗の舞臺、再瞥惡魔の搖籃であつた。

赤い太陽は殘酷なる眼を睜つて地上の生物を宥めずには措かぬ、一滴の甘水だに惠まずに彼の同情の無い地獄の底へ導かずには措かぬ。生靈を死に誘ふ旋風は砂塵を捲揚げつゝ巷から巷に吹き荒びて、殺人、強盜、放火、墮胎、姦通、避妊——さうした有らゆる罪惡の反映は開闢三千年この方未だ曾て例なき悲惨の極を作り出した。富強は貧弱を食ひ、上長は下級を蔑んだ。碧空に燦々たる日輪を仰ぐたつきもなく、蒼生は菜色を帯びて世を呪詛するやうになつた。道徳、義務其等は既に過去の一事蹟と顧みる者も無かつた。

危険慘烈は日を経るに隨つて其度を増し、壓迫は時と共に瀕多となつた。さうした光景を内に湛えた日本は、世界に對する進退の自由をも痛く滅殺されて、今や世界は世界地圖から極東の島國を塗抹せんとしてゐた。甚しきに至つては勤王の節を無視し、共和の意を含んだる言動を弄して自己の存在を世に認められんとするやうな卑劣極まる惡魔が居つた。彼は、幸にも志士の揮上げたる日本刀の鏽と化した。

戦敗を未然に防がん爲め健全なる活躍に盡瘁せる誠忠の人々は、平和を攪亂し國富を亂る波瀾兒と見做されて多くは遠ざけられた。水面の靜穩を知るも水底の動搖に思及ばざる偽政治家



は永久なる世界的平和を見得るものとして軍備の縮少を唱へた。彼等は平和の裏面に閃く剣戟の光を想ふだに戦慄するのであつた。幾千年の歴史が悉く殺戮のページならざる無きを見つ

つても、未來は永久に平和平潮のページを作り得るものだと誤解してゐた。美しき人は影を没し志士は空しく田園に歸つて邦家の前途を嘆きつゝ、本意なき時日を過ぐすのであつた。心に憂國を解する人は少くは無かつたが、目前に迫る妻子の榮華を棄て、また悪魔の矢面に奮進せうとする程の勇者は甚だ尠かつた、多くは物質の憧憬に征服せられて男子の節を屈し滔々として附和雷同の潮流に帆を捲いた。

時々來る毛唐の偽學者を款待し彼等が迂遠的捏造をなせる平和論などに耳打傾けて神より尊き女神だと崇め奉つた。彼等は國交の破裂が一の腐儒の口論に依つて未發に防ぎ得るものだと思つたのみならず、先輩の鮮血に由て贖はれたる滿洲、臺灣、朝鮮を露國や民國に讓與するの得策たることを喋々する者さへ出て來た。其間敏活なる露國は彼の巨腕を擡げて蒙古を抱いた。民國亦陰に陽に露國と握手して滿洲遼東に於ける日本人を壓迫するのであつた。飽くまで腐敗せる國民は、其等の騷擾は畢竟日本の領土なるが故なるを叫んで、還附讓與の舉に出で、禍根を絶たんだなど、消極も亦甚しき屈辱の悲鳴を擧げた。

嗚呼！ 我大日本帝國は斯くして妖魔のヴェールに包まれて仕舞つたのである。

吾人は何故に過去の戦役が勝利に終つたかを怨まずにはゐられない。若しもあれが敗戦であつたならば、今時の日本は世界中第一等の健全を示し銳氣を發揮するであらうに……吾人は戦勝を喜ばぬのではない、けれど、敗戦の悲惨が如何なる種類のものなるかを思ひ浮ぶる時は、折角喜んだ彼の戦勝も一向嬉しくは無い。彼の戦勝あるが爲めに未來の戦敗を招かねばならぬものなら、其れも欲しくは無かつた。確に日本は不幸な國である、戦ひ勝つたが爲めに國が腐敗したとすれば其れこそ一大不幸の極ではないか。吾人は此意味に於て過去の戦勝を呪ふものである、嘆くものである。

吾人は更に頭腦を冷靜にして、過去戦役に癡癡となりたる癡兵を思はねばならぬ。彼等は糊口の壓迫から藥を賣つて歩いた、杖をついて……哀歌を唄つて……癡兵救護を癡兵自身が訴へねばならなかつた。藥も賣行きが悪く彼等の哀唱を耳にする貴族富豪は戸を鎖して煩がつた。さうした調子で年が経つに隨つて癡兵は自己の肉體と共に世から棄てられた。戦争に勇ましい働きをして不具となつても、結局は自己の損だといふ感じが健全なる次國民の頭に漲つた。其結果が幾程の悪感化を青年に及ぼしたかは豫想外となつた。兵隊の志氣も著しく墮落して昔の武士道は今將に跡を絶たんとしてゐた、恰度スバルタ武士道が歐洲の歴史のやうに……少し日本人は偉大な筈、少し尙武的な筈、少し伶俐な筈であつた。ところが此自信と



判斷とは物の見事に齟齬して仕舞つた。戦敗の悲惨！ 其れを考へてみるのが不治の患者が醫師から愈其れと病名を附せらるゝことを怖るゝがやうに卑怯な國民となつた。或人は日本を評して『世界一の腐敗國』と言つた。が、其れに憤慨するやうな元氣は至つて乏しかつた。多くの人は、漫りに平地に風波を起す馬鹿者だと言つた。平和の力で活て居りながら平和を呪ふのは生んで貰つた親に悪體を吐くのと同じ事である。其平和を作つて呉れた吾輩共に楯をつくら食はずに怒濤の上を泳いでみるが宜い。泳ぐか？ 降参するか？ 恚んな反撃と迫害とを受けて共に俱に土中に生理となるのであつた。腐敗群の風靡する勢力は今や其最高度に達し憂國の志士は目を瞑つて邊陲の地に蝨んだ。僅か十幾年間に凄じい變遷を受けた日本國土は、緑も紫も姿を消して一面毒煙が立單めて仕舞つた。嗚呼!!!

(二) 悲しい哉強國の末路

嗚呼！ 我等の祖國は遂に戦敗悲惨の渦中に投げ込まれたのである!! 英雄の末路、強國の斷末魔——唯其語句の中に如何に深刻な如何に悲痛な閃きがあるか。さうした歴史のページを捲くる度に吾人は譬へ方なき哀傷の極を感ずるのであつた。全歐羅巴を蕪捲した彼の大奈翁が、百萬の巨軍を物の見事に莫斯科に沮つたことを考へると、悲痛と恐怖

が交々押寄せて来て、決して他人事とも思へなかつた。皇帝は戦敗の原因が過去に於ける連戦連勝の悪結果だと覺醒して、時機既に遅れたりしを悔んで次の如き悲鳴を擧げた——『嗚呼！ 可憐ナル我佛蘭西ノ民ヨ、戦争ガ常ニ勝利ニ終リシガ故ニ、唯……其レハ唯一回ノ敗戦ガ斯クモ汝等ノ志氣ヲ沮喪セシメタル也。朕ハ過去ニ於テ敗戦ヲ教フルコトヲ忘レタル也。朕ハ今ニ至ツテ深クノ悔ニル也。嗚呼！ ボナバルトノ罪深キヲ奈何セン!!』 彼は有繫に偉い！けれど彼は唯一の其れは一生に唯一回の露都敗戦が、皇帝の榮冠を切つて落す程の大波動を來さうとは豫想しなかつた。否彼は再舉を企てつゝ、單騎巴里に歸つた。彼は『戦ひの敗るゝは敗るゝの日に敗るゝに非ざる事』を矢庭に胸に描きつゝ……然しながら戦勝の悪魔は此風雲兒を猶も呪ひ續けた、弄び續けた。彼はエルバの磯邊に千鳥の啼く音を友とせねばならなかつた。可憐なる佛蘭西は列國の前に其肉體を投げ出して、生殺與奪唯是れ其剪裁に委せねばならなかつた。

然しながら其れは遠き昔の他國の出來事である一笑にも附せぬとあらば致方なし。さらば吾人は今一步踏み込んで戦敗國の悲惨を語らう——。さる國の王妃は此風雲兒に辱められた物語もある。一天萬乗の君の妃が敵の首魁に身を汚さるゝとあらば、濱の真砂に等しき其國民は、如何なる無殘なる暴虐な目に遭ふたかは大凡常識を備へた生靈の判斷に委すが、より以上



の効果であらう。されど彼ナポレオンも妖魔の呪ひを看破することは能きなかつた。自覺は常に遅いものである。彼と彼の國が連戦連勝を博する真最中「若しも佛蘭西が敗れたら……。」と絶叫した人があつたならば、忽ち不祥の言を弄して邦家を呪詛する者として斷頭臺に登されたであらう、屹度さうなつたに相違ない。

されど、佛國はあの如うな運命となつた。幾百回の戦勝によつて獲得した強大なる屬領地も唯一戦——ウオーターラーの敗戦に總てが土崩瓦解となつて仕舞つた。佛國の其後の國土は大奈翁以前の國土よりも狭縮となつた。國は疲憊其極に達し荒涼壞滅……一瞥戦慄の光景となつたのである。

『若しも日本が敗れたら。』日本は數度の戦勝に、臺灣、滿洲、朝鮮、樺太を獲たが、唯一敗戦を交ゆる事に由つて此等の總てを失ふことは大奈翁と其轍を同する姿勢にあるものである。

否九州も四國も……。

勿論、『若しも……』と云ふ以上は全く假定的である。が、此假定は Potential (可能的)であつて Subjunctive (不可能的)で無いことは明瞭である。何となれば既に佛國の例證が何よりも適確なるが故である。  
決して戦敗國となるもので無い!

人權、道徳、保護、廉耻——夫れが敗戦の前に何等の權威を持たう?! 吾人を生んで呉れた此の山紫水明の祖國は、未來永劫に戦敗を蒙ることは無きか! 否々!! 靜かに瞑目して湧き上る様々の感想を自然に任せよ、其處に一大墙壁が雲上に聳えて居る。戦士と非戦士との間に判然たる隔墻があつて、戦役を遠ざかるに従ひ愈益高く厚く築き上げらるゝては無いか?! 即ち戦勝ならば後の甘汁を戦士と共に俱に吸ひたい、戦敗ならば總ての罪責を戦士に科したい——斯うした思想が非戦士の頭腦に漲つて居る。

イスラエルの民の罪障を背負ふて沙漠に棄てらるゝ、牲の小羊——思ふだけでも厭だ!

戦士と非戦士の思想が斯く反對の方角に向つて進むに従ひ、世は戦争を嫌ひ優柔不斷に酔つて是れを平和平潮の好事と見做すのである。強國の最後も亦悲しい哉!!

佛蘭西が王朝の虐政を嫌惡して、大奈翁の出現を歓迎した間は戦士も非戦士も思想を同一の方角に進めたが、戦争の數を増加し多くの骨肉を失ふの悲劇が積り積つて見れば、漸く戦争を忌嫌ひ戦士を厭ふべきものと見做すに至つた。彼が百萬の生靈を露都に向はしむる頃は、戦士と非戦士の頭腦は全く反對の方向へ進みつゝあつた。吾人は日本の現代と對照して坐に慄然たるものがある。

日本の人種は決して眞の勇者で無い。勇者としての眞物は之を日本人に求めずして須らく露



國人中に求むべしである。吾人は戦勝に於ける百の勇者を得んよりも敗軍に際する一の勇者を尙ぶものである。況んや未來の戦争が動もするとさうした勇者を必要とする場合が多いからである。實戦に臨んだ人は恐らく是れを感じた事であらう、——追撃の際に於ける勇敢なる將卒も、いざ不利の状態に陥つたとき、掌を覆へすが如く怯者と變ずるを……吾人は日本軍人は戦勝に於ける勇者であることを知ると共に敗戦に於ける怯者たることを覺悟しなければならぬ。

何とかして日本人に敗戦の感想をせしめたいものだと言ふ心ある人は努めた。連戦連勝に心酔し其れをのみ誇張する人民に向つて敗戦なる苦い味を嘗めさせてみたら、大に覺醒する所があるであらうと思つて粉骨碎身の勞を取つたが其等も今は百計盡きた。吾人は最早四分五裂して復挽回することの能きなや破目に陥つたとき、日本人の眞價を其處に發揮し得るか得ざるかを實地に試験するより他は無ないのである。

彼我百萬の大軍が大陸の野に對峙するの秋は来た。若しも日本が敗れたら如何なる結果を呈するであらうか？ 勇敢なる（？）——骨肉戰士は渤海灣——日本海に蹴落されて恨深き異國の鬼と化し痛ましき底の藻屑となり、千古の青史を塗抹して祖先の鮮血に成れる領地を失ひ且つは陛下の御稜威を失墜し、太平洋上の一孤島に相擁して奴隸の悲運を嘆たねばならぬ。

唯一戦！ 唯一戦！！ 唯一敗戦が皇國の運命を定めて再び起つこと能はざるの悲運に陥るは日本の姿勢である。吾人は祖國の形狀と姿勢とがさうした悲境に陥り易きことを覺悟して居つた。今日の如く戰士と非戰士との心裡が異なる方角に進んで行くだけ夫れだけ、運命の手が祖國の末路をさう云ふ逆境に導くことを覺悟して居つた。さうして遂に何事も休矣となつた。妖雲は皇國の空に天引いて惡魔は到る處に蔓つた。黒い黒い毒血のやうな雲が西の空に渦捲いた。

『富國強兵』是れを熱心に説いた偽君子は『貧國強兵』の決して無意義でない事を考へなかつた。そして衣食足つて見る／＼中に邦家の破滅を招いて仕舞つた。自覺は遂に遅い！！ 貧乏なればこそ奮闘もする也。衣食足つて禮節を知る頃には正しく墮落の閃めきを見るは日本人種の常性ではないか？！ 延いて日本帝國は遂に墮落の淵に陥つて再び地上に浮ぶ機運もなく無つた其頭上から……淵の中目蒐けて彼の恐ろしき露國が石の礫を投げ付け出した。嗚呼！！

悲しい哉！ 強國の末路よ！！ 我等の祖國は東洋唯一の強國なりき。夫程花々しき國是を謳歌した山紫水明の國土は、今や世界の地圖から除去されんとして居るではないか？！ 最早自覺も遅し、奮起も遅れたる也。雄飛せんが爲めに我等の祖先が血を以て作り呉れし屬領は白人の有に歸した。翼を殺がれた其上に我等の本體の肉は、鋭利なる刃と恐ろしき石の俎の上に擬



せられて絶命の關所は刻々迫つて來つゝある。

(三) 兵は兇器にあらず

吾人は健全なる純日本人種を確立擁護する爲め、不健全——危険思想に傾きつゝある多數の日本人を斬つて棄つるも決して厭はざる也。眼を有する人は刮目して七千萬の生靈を觀よ！其過半数は日本人の本性を失したる賣國奴ではないか？！夷狄に勝たんとするなら先づ此等の蟲族を撲滅せねばならぬ。撲滅の爲めには日本刀の威力に訴ふるの他は無いのである。一國の滅亡するに際し、多くは此の如き現象を呈するものである。皇室をお粗末にし酷しきに至つては天皇は人……云々を白晝而かも議政壇上に呼號して帝國の國體を無視するが如きは斷じて許さざる所也。例令戰爭ならずとも異人種ならずとも、吾人は吾人の祖國の爲めにドシ／＼斬つて棄てざるべからず。彼等は日本に籍を借る所の敵の間諜である、祖國の面目を一新せんと欲せば、策を海外に求むるに先んじて内に彼等の撲滅を必要とする也。陛下の知遇を忝なうして官職にある間は、優柔不斷——無能の極を發揮したる彼等が、一朝にして職を退くや、兩後の筭の如くポツ／＼頭を上げて陋劣なる心事の迷りから無責任の言動を弄し、現在の國是を誤るのみならず將來邦家の骨子たるべき無垢の青年を邪道に誘ひ、三千年の特性を消

滅して邦家の腐敗を未來永劫に續かしめんとするのである。正當なる國民が之を默過するのは餘りに意氣地が無き過ぎる。吾人は斷じて耐へ能はないのである。

此の十年間、斯の如き賣國奴が漸次に殖えた。そして彼等は比較的完全に愚民の衆望を得て得々満々として居た。賣國奴は阿片を蒼生に投じて巧みに昏睡に陥らしめた。健全な人士が何を言つても覺醒すべき神經の働きは最早失はれてあつた。秩序正しき秦平の御代であるならば、日本刀を藉りて邪賊を掃滅するの必要は無し……此時こそ兵は兇器也漫りに用ふべからざるもの也。

然れども事態今日の如きに至つては兵は常に用ゐられざるべからず、決して兇器にあらずる也。

邪惡紛亂——其れを一瞬間に秩序整然に導くものは、言論にもあらず學問にもあらず道徳にもあらず倫理にもあらず、言論、學智、道徳、倫理の結晶たる兵器の威力唯夫れのみである。其處に純粹なる日本民族の本性がある。兵は決して兇器にはあらずる也。更に之を廣義に解釋すれば日本を除く外の國々は、『兵の兇器』たるを認めては居ないのである。兵の兇器は既に、業に遠き過渡時代の謳歌であつた。現實の世には兵是れ總ての必要具である、一事一物を爲さんとすれば先づ兵が準備せられざるべからず。邪惡毒霧の立置めた中を、見事に切開いて進み



得るは兵を除いて他には無いのである。兵の吉器たるを知らざる者は今日の如き蟠根錯節の世を直進する事は絶対に不可能である。

兵を尊重せざる者は兵に斃さるゝ事を覺悟せねばならぬ。

兵！ 兵！！ 兵の士出てよ！！ 滔々たる墮落の毒氣を一掃すべく、忌しさの極みを盡せる現代の醜態を斬つて棄つべく！ 兵、兵、兵を尊ばぬ者は日本人種にはあらざる也。兵を忘れたる國は悉く滅亡せる也

嗚呼！ 吾人は幾百回兵の兇器にあらざるを繰り返し繰り返し絶叫したか知れぬ。其の赤誠は魔睡せる國民の神經へは何等の刺戟をも與ふる事は能きなかつた。彼等は聴くの能力を有しながらも是れを味ふて見ることの能力を缺いて居る事程左様に腐敗して仕舞つた。極東の大陸に強露の陰影が映る、巨斧の閃めきが眼を射る、幾十萬の戰鬥力が時々刻々殖えて行く、復讐の腥氣が吾人の頭上に漂ふて来る——さうした奇怪千萬な現象を見つゝも、白痴に等しき我等の同胞は何等の準備をも行ふのでは無かつた。心ある人の苦諫も徒に……何の理由もなく馬耳東風と聞き流されて、愛國の士を目指すに『國家の不祥兒』、『恐露病に襲はれたる卑怯者』など、貶されるのが關の山であつた。

そして事實は遂に劍戟の前に是非曲直を證明する事となつたのである。世の所謂恐露病者不

祥兒は直に奮起一番、國難に殉ぜんと日本刀を提げた。昨日まで平和の女神と崇め拜まれた偽君子は、今日は天下第一の億病者と成り下がつた。

豫てより今日あるを知れる志士は、時機の既に遅れたるに紅涙千行、嗚呼！ 大家の崩るゝ時一柱の克く支持し得べけんや！！ 武裝は未來の戦ひの爲めに爲すのである、戦ひ始まつて後武裝せんとするは三日見ぬ間の櫻を嘆こつと同じきなり。戦争といふ蘇生藥の服用により毒血を驅除し得る頃はひには、我等の祖國は連戦連敗の耻辱を蒙りつゝあるのだ。何事も遅かつた！ 萬事が手遅れであつた！！ 吾人は三千年の祖先に向つて何と申開かう？！

小なりと雖も日東帝國！ 其れは昔より夷狄に汚されざりし神の國であつた。武斷一逼築譽噴々として世界は名づくるに黃人の霸王として白人の勁敵と恐れ戦いた。神國の生靈は手々に劍戟を揮つて當るを幸に薙倒した。其神聖なる國土は此十餘年間妖魔のヴェールに包まれて兵を輕んじ武を蔑にした。而して強き露國の爲めに見事に槍玉に揚げられて、蜻蛉の形を成せる世界の公園は今や世界の地圖から塗抹されんとしてゐるのである。

昔幾度か夷狄を破つた我等の祖國！ 今や幽冥界を異にして轉た運命の呪詛の殘酷を嘆ぜずんばあらざるなり。過去には露國にも勝つたが、今は遂に敗れたのである。恨む勿れ！ 戦ひの敗るゝは敗るゝの日に敗るゝに非ず、兵を兇器と叫ぶ低能の國は常に敗るゝなり。



(四) 亡國の閃めき

世界が球形であらうが、平面であらうが其塵事は奈何でも宜い其塵事に係らつてゐるやうな吾人で無い。吾人の天職とする所は戦争團體の起原を持つ國體の保持に對して、飽くまで武斷的に飽くまで攻勢的に暴進するまでの事である。政務其れは戦争を意味するものゝみの集合を本則とし、世が開けると共に漸次其以外の分子を受容する事となつた。然しながら異分子の混入したる爲めに戦争を取除かうとする人類の齟齬は絶対に誤つてゐる、否絶対に不可能である。現代の一闪光を觀て直に古代の事實を無意味な箱の中に葬らうとするのは天下の偏狹である。吾人は過去の數千年が、國務なるものゝ全部が結局戦争の準備であつた事を否定する譯には行かぬ。此意味に於て吾人は萬國平和運動、戦争廢止運動なるものが、結局に於て遂に失敗に歸する事を豫言したい、否確かにさうなるであらう。

吾人は前節に於て貧國強兵なる事を賛した。我等の祖國は富國強兵なる實を擧ぐべく餘りに性格が許さぬ。富國の域に達する前に墮落の魔に襲はるゝ事を明かに豫言し得るのである。戦争其れに依つて作り得た國體が戦争を除いて後に存在し得るか否かは研究すべき一大問題であらう。人類の國家は戦争である、其戦争を取つて了へば人類の國家といふものは無くなる譯だ、

國家が無くなつて人類が生存し得るであらうか？

然しながら吾人は是れ固一介の武辨だ、政治が何であらうが外交が何であらうが其れは勿論關する處では無い。武辨が飽くまで武辨に甘んずるには自國の戦争を勝利に導くのが主條件である戦争の勝利は吾人の念頭に描かれある未來の敵國の強弱に絶へず注意を拂はねばならぬ。冷靜なる戦争的判斷から自國の運命が戦敗だと斷定するやうになつたならば、即ち吾人は祖國が亡國の兆候を萌したることを知るのである。武辨は武辨のみの勝手に亡國の閃きを知る時武辨以外の人士に向つて不祥な事をも絶叫せねばならぬやうになる。

武辨の絶叫——其れが遂に國民を刺戟せぬやうになつた時邦家は滅亡の第一歩に踏み入つてゐるのである。假令武辨以外に何等の色彩を有たぬものにもせよ、亡國に導く僞君子の惡辣なる言動を馬耳東風と聽き流す譯には行かぬ。武辨の迫害——其れは忍ぶ、能ふ限り忍ぶけれども、祖國の迫害は斷じて忍ぶ譯には行かないのである！吾人は佛蘭西革命前の時勢を研究する毎に他人事とも思ふべき筋が犇々と突進して來る。彼等は自己の野心、自己の權威擴張の爲めに群衆を煽動する事に努めた。新聞紙は群衆の輿論を代表したといつて得々としてゐた。何事を爲すにも群衆心理を利用して成功せんと企てた、そして其れに依つて多くの場合成功し得たのであつた。吾人は群衆心理を代表する處に新聞紙の本務があるか否かは知らぬ、否知らぬと



言つて置かう。唯節なき操なき新聞紙は群衆の驕心を買はんが爲めに群衆に阿る傾向のある事は佛蘭西革命以前と同一であらう。政争の酣なる時政敵の秘密を發き得たとして揣摩臆説を逞しうしてゐる。奈んぞ知らん——政界の當事者が眞實の秘密を新聞紙輩に發かれんや!!! 吾人は此群衆心理を利用せんとする國民の趨勢を不吉の事だと思つた。此心理の發現を見るに至つては最早智者敏腕家が象の糞程居らうとも、國運の隆盛を促す事は絶望となるのだと信じてゐた。斯かる紛糾せる性情を克く統一するものは都會の紳士にもあらず鄙の智者でも無い必ずや田紳にして頭腦の冷靜なる人の司配を受けねばならぬ。是れ明らかに亡國の閃めきである。何たる惡兆であらう?!

嗚呼時は既に過ぎた。我等の祖國は遂に不幸にも佛蘭西革命前のやうな紛糾を招くに到つたのである。之れは誰の罪であらう!!! 言はずもあれ數年前群衆を煽動せる野心家の殘せし惡結果なるを……吾人はあの當時殘念な事だと嘆じた、そして健全なる國民に向つて不吉の言葉まで敢て吐露して日本帝國の前途が累卵のやうな危機にある事を叫んだ。けれど、其れは遂に腐敗の人心に刺戟を與へ得なかつたのである。其後一事一物の起る毎に群衆の煽動は繰り返し捲き返し行はれた。其都度世道人心は思ひ／＼の方向に逸出して國體を無視する危険な思想のみが獨増長する事となつた。

吾人は何故彼の當時死を以て争はなかつたであらう? 何故犠牲となつて彼等を斬つて棄てなかつたであらう? 殘念な事をしたものだ! あの時自分の生命を棄て、亡國の禍根を斬り殺して置いたならば……今日の如き悲痛な場合には遭遇しなかつたらうに。あの當時吾人は禍根兒を見るに偽君子だ位のものであつた。然し、彼等の投じた毒藥は全國民を中毒して遂に祖國を滅亡の淵に導いて仕舞つた。戦争といふ覺醒劑を服する頃には總てが腐爛してゐた、挽回の望みは無かつた。露國は鋭き鷲の眼を睜つて日本の其等の推移を細大洩らさず注目しては會心の笑を湛へた。吾人は猛虎の前に彼等の慾を挑發せしむべく様々の醜を演じたまでの事であつた。露國は自己の爪牙が日本を一攫みに爲し得るまで努めて平和を裝ふた、他意なきを示した。日本は其れを眞實な平和——親交だと思つたのである。獨り一介の武辨のみ極東の大陸に渦捲く暗澹たる雲行を見い、戦争の意味を忘れなかつた。けれど、忘れなかつた武辨の下に馳せ集まる軍隊の各分子は優柔懦弱の淵に生育した蟲族ばかりであつた。

亡國に備はる要素の數々——其れが神聖なる大日本帝國の上に總て具備せられた一刹那、露國との國交が斷絶したのである。飽くまで戦勝に心酔したる國民は健氣にも攻勢を主張して白人を千里の外へ遠ざけて仕舞へと空威張をした。が、武辨は勝算なきが故に「今戦争したら屹度戰敗だ!」と信じた。奇々怪々な現象が其刹那に現れた。亡國? 嗚呼!!! 絶望の戦争其れ



は吾人の念頭に強く閃めいたのである。

(五) 戦敗の要素

戦争に敗れる……強國が如何に其れを歓迎しても到底出来ない所だ。戦敗は戦勝よりも獲難いものである事は何人も異議は無からう。何となれば必勝を期するに非ずんば最初から戦はぬからである。然らば戦勝とは如何なる場合を云ふか？——武力を以て敵を壓伏殲滅した場合はいふのである。戦敗とは？——敵から壓伏殲滅せられた場合をいふのである。戦勝の對照は戦敗か？ 否々必ずしも然らず。戦敗の對照は戦勝か？ 然り——戦勝が唯一の對照である。何故に戦敗の對照が戦勝にして戦勝の對照が戦敗ならざるか？ 戦敗と邦國の滅亡とは自ら立場を異にするが如く考ふる人々は多くは斯の如き無常識なる問ひを發するのである。戦敗を挽回して戦勝に導かんと努むる事を得るやうな状態にある國ならば、戦敗は眞の戦敗には非ざるなり。吾人は過去の日露戦役が此範圍に於ける戦敗に終りを告げたらんには如何ばかりか幸福であつたらうと言つた。過去の戦勝は眞個の戦勝にはあらずして我等の祖國を腐敗せしめた偽戦勝であつたとも叫んで置いた。我等の國は彼の戦役に於て敵を壓伏殲滅したのではなかつた。是れ眞正なる戦勝では無かつたのである。偽戦勝を以て眞戦勝と誤信する國民は戦敗も亦

さまで苦痛にあらざるものと鶴呑みをしてゐるのである？ 咄!! 此淺薄な思想こそ未來の戦敗を招く一大要素となつたのであつた。眞實の戦敗は壓伏殲滅なるを知らば祖國は滅亡に陥らねばならぬ事位は三尺の童子も亦考へてみる事が出来るては無いか!! 餘人はいざ知らず吾人は斯の露國が眞實の戦勝を得んが爲めに眞實の戦敗を解しあることが由々しき大事たるを叫ばねばならぬ。残念ながら島國根性の日本人は戦争の勝敗に關しては未だ眞面目の解釋はしてゐない、否其れ程冷静な頭腦を有つ人間は一人もゐないのである、勝利の榮冠が國民をして墮落せしむるならば、其れは眞實なる勝利にもあらず榮冠にもあらず。此空氣中に於て我大日本帝國は明らかに未來戦の第二の要素を有つてゐた。

吾人は戦勝の報酬として敵の銃砲彈藥を山の如く鹵獲し、償金の百億を獲得せんよりも國體の緊張を妨碍する内地分子を全滅し得ることが絶対に望まじき也。戦勝を得る度に國粹をいやが上に純潔に爲し得る時始めて眞の戦勝國也。吾人の祖國は常に此機會を逸したのである、同時に未來の戦争に疑はしき黒點を胚胎するに至つた。是れ戦敗の第三要素を織り出したのである。

自己の野心を満足せしめんが爲め國體と直接の關係ある軍隊に肉薄して軟弱なる次國民の肉體上の束縛に同情せんとせるが如き、立國の基礎は之れが爲めに漸次搖ぎ始めたのである。之



れ戦争と立國が離れ難き情交あるにも關らず彼等の毒手にかゝりて其戀は醒めんとした。結果は未來の戦争を敗北に導く第四の要素と化けて來たのであつた。

閩族打破を名として軍備の緊張を理由なく否認したるは第五の要素であつた。吾人は閩族を擁護保存する必要は勿論認め得ないけれど大日本帝國の陸海軍を健全にせんとする人士が閩族より多く出づるも出てざるも決して憂ふる所にはあらず。要は強國の實を維持増進するに於てのみ、閩族を打破せんが爲め軍備を怠りて邦家を累卵の上に置かんとするは誠に聞えぬ話ではないか?! 斯かる偏狭なる人士が如何に喚くも叫ぶも決して閩族は滅亡せざる也。奈んぞ知らん、閩族の頭腦は打破を口にする人士の頭腦よりも遙に公平にして冷靜であることを……。戦争を獲べく充分なる準備を爲し遂げた曉に於て、堂々と閩族を打破するならば其は吾人の雙手を擧げて赴かんとする所である。彼等の主張は根本から國家を無視したるものにあらずして何ぞや。閩族と戦ふは内訌にして軍備の緊張は外冠を意味するのである。邦家を背負ふて内を治むるならば大に可也、内を背負ふて外を忽にするは兩つながら無意味の業たるのみならず邦家を危うすること閩族擁護よりも甚しきものあるにあらずや?! 而も所謂閩族なるものが幾何の程度に邦家を害しつゝあるか吾人は彼等の口實を絶対に信ずる能はざる者也。之れ戦敗の原因を作出する最高度の要素也。

然ながら其處事は奈何でも可い! 彼等が高言する如く理想とする如く萬事が秩序正しく整頓した曉に正々堂々と戦争して萬全な勝利を獲能ふものならば此上も無い事と喜びもしよ、祝福するにも躊躇しない所であるが、其様な勝手は白人が許さる也。日本の秩序が整備する迄爪牙を出さないで待つて呉れるやうな白人は居ないのである。否白人は有ゆる智囊を搾つて我等の祖國を斯の如き状態に誘はんと努めてゐるのであつた。そして日本は旨々と其權謀術數に陥つたのである。

嗚呼國交は斷絶したり。未だ諸準備も完結せず理想の一部分だに發現せぬ裡に露國は漸次其爪牙を逞うして過去の復讐を爲し其國權を東洋に發揮せんとしよ〜手を出した。極東の霸王たる我等の祖國は、餘儀なく干戈を提げて赴かねばならぬ。今日の如き蟻根錯節せる日本が果して戦勝を獲ることの望を有たうか? 斯の如きに於て純然たる勝利を獲るものとすれば露國がよく〜弱きか或は非禮をも受けさせ給ふ神のましますのである。天佑? 言ふ勿れ! 非禮をも受けさせ給ふやうな神の佑は天佑には非ず、神は公平である戦勝を得べく當然の努力を爲したる國をして戦勝を獲せしめ給ふのである。其れ疑ひもなき純乎たる天佑也。此戦争こそ吾人に取りては明らかに憤恨の戦争である、憤死を希ふ戦争である。吾人は大陸の野に爲し能ふだけ爲して戦死するのみ、戦勝と戦敗とは戦士の擔ふべき責任にはあらず。戦士は絶



望の息を吐きつゝ、戦はねばならぬ。ベストは捧げやうが勝敗は擔はざる也、兵の敗るゝは敗るゝの日に敗るゝにあらざれば也。兵をして敗れしむるのは兵にはあらずして不健全なる國民なればなり、戦敗の責任は言はずして彼等の背負ふべきものなることを期しつゝ、百萬の戦士は極東の戦場に向はんとするのである。

## 第二章 國交の斷絶

### (一) 世界王——王の王

大正〇年六月二十日午後二時二十七分

日露の國交は再び斷絶して、極東の大陸は爰に黃白兩人種が血塵の修羅を演出すべき悲痛極まる石の俎板とは成つたのである。

往け！ 赴け！！ 満洲、西比利亞、蒙古の地は黄色白色の生靈が最後の運命を解決すべき場所ではないか？！ 大正の陛下を擁戴して世界王——王の王と仰ぎ奉るか 否んば我大日本帝國は世界の地圖から永劫に塗抹されて仕舞ふのみである！！

田園に隠れたる人出てよ！ 兵の人起て！！ 日頃悲憤慷慨に惱みし志士奮起一番せよ！！ 此遅かりし國交の斷絶は敵に有利にして我に不利であつた。けれど今は其れを嘆じて大事を誤るべき秋では無い。吾人は唯 陛下の爲め祖國の爲めに勇往邁進して一死是れ高恩に報いんのみである。

言はない事では無かつた！ 吾人は彼の恐ろしい梟露の巨斧が日に増し極東の野に殖えて行



くを……兵は兇器。平和に酔うた歌、軍備縮少、スバルタ的教育は壓制虐待——十年  
前の小勝に心酔して懦弱文弱驕奢華美に耽溺した人々のあの態を見るが可い！ 其等が今とな  
つて何等の意味を爲すかを思へ！！

眼を開いて西の空を見よ、黒い雲が渦捲いて血の雨がポツリ〜と降つてゐるではないか？！  
『日本の軍隊はスバルタ教育が施してあるから強いのだ。』毛唐人の阿諛を享けて隨喜の涙を零  
して嬉しがつた當の日本男兒が、いざ兵營に招かれて嚴格なる教養を受くるとき、『非常識だ：  
…壓制だ…野蠻的だ…魔宮殿だ。』と弱音を吐いたのは抑何故であつたか。毛唐  
に賞められて喜んだものが實際に當つて反對を叫ぶ…矛盾も甚しい！其こそ非常識の  
極だ！！

然しながら今は〜其塵悠暢な事を喋る場合では無い、大日本帝國を世界と爲すか——陛下  
を王の王と奉るか或は帝國を世界の地圖から除くか…今は百尺竿頭の一轉機に立つた  
る退避能きの非常極まる場合だ！  
往け！ 赴け！ 東大陸を立脚地として白人を遠く〜又遠く西歐から驅逐して太西洋の  
巨浪底に押沈めて、黃人の勝利を大喊し、ヒマラヤの主峰アルプスの絶頂アマゾンナイルの大  
流に千古不朽の覇旗を押樹て、然る後に吾々は太平を謳歌すべきである。

武器？ 材料？ 資力？ 言ふ勿れ、大日本帝國は武器で戦ふので無い、材料で戦ふでも無  
い、資力も要らぬ、糧は到る處の地にある、王の王、世界王の部下たらんと臍を固めた日本男  
子にさうした微々たる顧慮の要る事か。材料資力は世界にある其世界は吾等が奪ふのである。  
七千萬の同胞はよく百萬の肉弾を出し得るのだ！ 肉弾之れ武器之れ材料之れ資力では無い  
か。吾人は肉弾を以て戦ふものである。武器を持って戦ふのでは無い。

陛下の御前に馳せ参じたる宰相、大臣、元老、文武百官は懸て包み切れぬ微笑を湛えて退出  
した。彼等は英明勇武なる 陛下に誓ふて曰く、

『陛下は正に世界王、王の王たるの機運に向はせられたのであらせられます、臣等は地球を平  
定して 陛下を其上に奉戴するに非ずんば生きて再び龍顏に咫尺 仕り申ませぬ。』と、

上既に戰意鐵石の如く、まして七千萬の蒼生が何條疑懼すべき。宮城前の廣場には巨腕勇肌  
の日本男兒が詰めかけ〜立錐の餘地もなく群り集りて文武百官の退出を今や遅しと待構へて  
ゐる。中には感極まつて嬉し泣きに泣くものもあつた。

『萬歳〜〜!!!』呼ばじとするも咽喉を迸る歡喜は端なくも御橋の袂から起つた、と見れ  
ば過去戦役に總司令官の大任を遂げたる大山元帥、頭髮霜の如く八十の高齡を夏の熱風に吹か



せてニコ〜と、  
『諸君ッ、戦勝の第一歩だ！』

と唯一言を遺して群衆を押分け、車は進む、次ぎには山縣老公……元帥大將、大臣……  
皆々開戦の好吉日を祝ひ顔に……

天地も崩る、ばかり歡喜の喊聲は揚つた。有繫に廣き帝都も今や人の黒山に堰かれて進みも  
退きも出來ず。

大元帥陛下は、龍顏殊の外麗しく赤子の狂喜を櫛はして宮門近く進ませられた。

動員令は諸方に發せられて、都も脚も沸騰するが如く、

『宣戦の大詔』は直ちに下つた。……朕茲ニ露國ニ對シ戰ヲ宣ス……何んぞ雄大

なる勇爽なる……!!! 世界戦の幕は切つて落された。大日本帝國の本國も領國も租借地も

忽ちにして武装して仕舞つた。

號外……内閣の瓦解、暴動——そんな些々たる號外ではない。舉國一致の巨腕が國を舉

げて作り設けた大鈴を揮ふのである。壯なるかな!

壯なる哉今日や? 大正〇年六月二十日午後七時殺氣充溢せる帝都は轟々般々の動搖みを載

せたまゝ、夜のヴェールを垂れた。が、今宵の都の賑やかさよ!!

我等は爰に再戦の途に登るに際し百萬の大軍が異國の地に、如何に勇躍するか——如何に猛  
烈果敢を極むるかを思つてみるに血が沸き立つやうだ。此十年間表面には平和を装ふて裏面  
には殺戮の鋒を研いだ兩代表國が果して幾何の優劣を示すか? 再戦は單に戦勝のみを目的と  
せずして此機運に乗じて全世界を席捲するの雄圖を有つてゐるのである。吾人が懦弱なる國民  
の言に耳を傾けずして、極めて冷静に極めて直覺的に武をのみ研鑽したのは誠に今日あるを豫  
期したからである。

大正の日本人が若しも干戈を揮ふことがあつたならば、最早消極の意味に戦争を解釋しては  
ならぬ……とは此數年間健全なる頭腦を持つた紳士の叫んだ所である。積極の戦争……  
此意味こそ辭令の修飾を須たず『世界の日本』否、『日本の世界』である、鞏固なる基礎を作り  
給ひし先帝陛下の鴻恩に報い奉るには、大正陛下を世界王と仰奉る外には何等の綏光を  
も無いのである。

(二) 日英同盟の破壊

排日案の紛擾に就き優柔不斷其極みを發揮したる我大日本帝國の俱に採るに足らざるを看破  
したる英國は、外面に日本との同盟を一層密實に装ひつゝ、内面に於ては其温かき兩手が亞細亞



大陸の中央西藏及蒙古附近に於て露國の兩手と固く握り交されたのである。

『日本が對米政策に腐心して大陸政策を粗忽にする機會に乗じて、英國は西藏——伊犁を抱き貴國は蒙古を物色して日本に一泡吹かしのめんと思ふが貴國は如何に存ぜらるゝや？』  
これは英國が露國に向つて放つたる戀の細語であつた。

『露國も雙手を擧げて賛成するものなり、然らば早速其れに着手するこそよけれ！』  
これは露國が英國の手を握り返した甘い密語であつた。

其間日露の協商は一層深境に進みしと雖も内心夜叉なる露國は其名目の下に西比利亞復線鐵道の完成を急ぎ、賣買城——庫倫方面にも支線を延長して内蒙古の抱擁に其れとなく周到なる準備をした。

米露の握手は日本も亦以前より氣附かぬ處では無かつた。けれど排日案が日本を此方面に牽制して其間に英露をして中央亞細亞の攪亂に吸々たらしめん野心であつた事は日本の外交政治家の殆んど氣の附かなかつた所である。

英國は今猶現存する日英同盟の餘韻と露國の親交とに依り爰に後顧の患を見ずして、西藏政策と同時にアフガニスタン、波斯方面にも手を伸ばし始めた。

露國は蒙古全土の占領を確信し得る迄日露協商を續行して一途に日本を瞞着する事に努め

た。而して日本は焦眉の急たる北米問題に専念熱中した。

米國は英露の行動が成就すれば自己も亦必ず獲る所あるを確信し、求めて日本の感情を己れの方面に曳き付け大陸に全力を注ぐ能はざらしめんとした。排日案は其れが爲め幾年も繼續して日米の間は正に干戈を交へんとまで立到つたが、此頃日本も亦亞細亞中部の形勢甚だ穩かならざるを知り、意を決して米國に戦ひを宣する事が出来ないのであつた。

斯くして我大日本帝國は腹背に容易ならざる暗雲を見るに到つたのである。嗚呼吾人は巴爾幹紛争の土耳其帝國の上を思はずにはゐられなくなつた。我祖國は今正しく身を巴爾幹の土耳其に置いてゐるのである。

吾人は斯く觀じ來れば日英同盟なるものが日本に取つて最早何等の利益をも呈せないことが了解されるのである。排日問題の勃發當初に於ける日本の態度は遂に名譽を失墜し英國をして同盟なるものゝ何等の頼むべからざるものたる事を自覺せしめた。同時に英國は露國と握手する事が遙に有利にして且つ刻下の急務なるを知り彼等の外交は遂に秘密の裡に斯の如き恐ろしさ條約を締結したのである。

日英同盟は此時破壊されたる也。  
英國は直に西藏政策の實行に着手した。露國も亦外蒙古の併呑に着手し中華民國の内訌を利



用しつゝ更に其歩を内蒙古に進めやうとした。民國は蒙古全體を露國に讓與し、其餘力を以て日本人を滿洲から驅逐して在し昔の支那に復せんと奇怪なる態度に出た。日本と雖も今日の狀況が發現するに相違ない位は豫想してゐたのであるが、奈何せん！對米問題に吸々として一步遅れたる間に大陸の推移は豫想外に早かつたのを驚くの他は無かつた。

内蒙古に其爪牙を伸ばしたる露國に對し日本政府は直に抗議を申込んだ。此事件こそ實に日露の國交が悲觀状態に陥る第一着であつて實に大正〇年十一月十八日である。爾來兩國の紛擾は繰り返し捲き返し重ねられたが露國は固く執つて動かさず。日本政府は戰意を示しつゝ、只管平和に局を結ばんことを勸告したが露國は其等の迂遠なる外交手段に恐るゝ程不用意な國勢ではなかつた。

兩國官憲は殆んど間斷なく交渉を重ねつゝあつたが——  
我が大正〇年六月二日露國は鐵道に依りて斷然内蒙古に向け有力なる陸軍を出兵した。萬事休矣！庫倫は實に露國の根據地となつたのである！！

嗚呼國交は遂に破れたる也!!!  
大日本帝國が滿洲確保の最要條件として當然抱擁し置くべき内蒙古は、祖國を呪詛する惡魔

の反對に遭ふて其抱擁を過てる也。而して遂に露國に依つて抱擁せられたのである。内蒙古にして露國の有に歸せんか、南北に延長する滿洲は全く無意味——左側背を曝露する危険界——日本の爲めには未來永劫の禍根と變ずる也。

武力を以て内蒙古を争はねばならぬ秋が來た。吾人は我國民の覺醒が今一刻速ならんか武力を要せずして我有と爲し得たのである事を千載の遺恨事とするものである。武裝の不完備は遂に戰爭を惹起せしめたよ！吾人は曾て絶叫した、「日英同盟の破壊は疑ひもなく日露の再戰を意味するのである」と、英國は斯くして同盟に反旗を翻して日露の交戦を作つた。英、露、米の三國が秘密に企劃せる術中に——日本は旨々と陥つた。

大正〇年六月二十日午後二時二十七分——兩國の代表者は席を蹴つて起つた。

日露の協商其れは今日まで必要ではあつたらう。けれど彼等のより以上の野心の爲めには何の未練も價値もなかつた。戰爭の前面には最早白人の同情を望む事其れは我等日本人が夢にも心算し能はざる場合となつた。英國、米國は直に局外中立を宣言し中華民國も其名のみ中立の態度に出でんと宣言した。諸種の意味諸種の狀況其等は一として日本帝國の爲めに有利な效力を呈するものは無かつた。日本は明かに巴爾幹半島の土耳其の再演を爲すべき危殆なる形勢を示してゐたのである。嗚呼!!!



(三) 陸軍の勢力海軍の勢力

此一刹那に於ける我帝國陸軍の勢力及び其配備は次に示すが如し。(但滿洲朝鮮駐劄軍の外總て平時編成也)

近衛軍團  
司令部(東京)

- ◎近衛第一師團(東京)
  - ◎近衛第二師團(東京)
  - 騎兵第一旅團(13 14聯隊)(習志野)
  - 野砲兵第一旅團(13 14聯隊)(鴻巣)
  - 交通兵第一旅團(千葉)
- (注意) 師團は歩兵二旅團(十二大隊)、騎兵一聯隊(四中隊)、野砲兵一聯隊(六中隊)、工兵一大隊(三中隊)、輜重兵一大隊から成る、以下同じ。◎は新設の符號なり以下同じ。

第一軍團  
司令部(東京)

- ◎第一師團(東京)
- ◎第二十四師團(静岡)
- 騎兵第二旅團(15 16)(習志野)
- 野砲兵第二旅團(15 16)(下志津)
- 重砲兵第一旅團(1 2)(横須賀)

第二軍團  
司令部(名古屋)

- ◎第三師團(名古屋)
  - ◎第十五師團(豊橋)
  - 騎兵第四旅團(25 26)(豊橋)
- 目下野砲兵旅團増設に着手せんとしてゐた。

第三軍團  
司令部(仙臺)

- ◎第二師團(仙臺)
- ◎第二十三師團(水戸)
- 野砲兵第三旅團(17 18)(下志津)
- 山砲兵第一聯隊(仙臺)(大正〇年大隊を聯隊に擴張せらる其編成は野砲兵聯隊に同じ)

第四軍團  
司令部(弘前)

- ◎第八師團(弘前)
- ◎第二十二師團(盛岡)
- 騎兵第三旅團(23 24)(盛岡)
- 山砲兵第三聯隊(弘前)

第五軍團  
司令部(札幌)

- ◎第七師團(旭川)
- ◎第二十一師團(札幌)
- ◎山砲兵第四聯隊(札幌)
- ◎重砲兵第六旅團(11 12)(函館)



第十三師團(高田)  
第十四師團(宇都宮)  
第六軍團 司令部(高田)  
騎兵第五旅團(2728)(宇都宮)  
野砲兵第五旅團(2728)(高田)

第九師團(金澤)  
第十六師團(京都)  
第七軍團 司令部(金澤)  
野砲兵第六旅團(2930)(金澤)  
交通兵第二旅團(大津)

第四師團(大阪)  
第十師團(姫路)  
第八軍團 司令部(大阪)  
騎兵第六旅團(2930)(大阪)  
重砲兵第三旅團(37)(由良)  
交通兵第三旅團(大阪)

第十一師團(善通寺)  
第十七師團(岡山)  
第九軍團 司令部(岡山)  
山砲兵第二聯隊(岡山)(大正〇年大隊を聯隊に擴張せらる)  
重砲兵第四旅團(48)(吳)

第五師團(廣島)  
第十二師團(小倉)  
第十軍團 司令部(廣島)  
野砲兵第四旅團(2526)(廣島)  
重砲兵第二旅團(56)(下關)

第六師團(熊本)  
第十八師團(久留米)  
第十一軍團 司令部(熊本)  
騎兵第七旅團(3132)(熊本)  
野砲兵第七旅團(3132)(久留米)  
重砲兵第五旅團(610)(佐世保)

第十九師團(京城)  
第二十師團(平壤)  
第十二軍團 司令部(京城)  
騎兵第八旅團(3334)(平壤)  
野砲兵第八旅團(3334)(平壤)  
重砲兵第七旅團(1314)(鎮海灣)  
山砲兵第五聯隊(京城)

總計  
步兵 一〇四個聯隊——三百十二大隊



騎兵 四二個聯隊——百六十八中隊  
 野砲兵 四二個聯隊——二百五十二中隊  
 山砲兵 五個聯隊——三十中隊  
 重砲兵 一四個聯隊——八十四中隊  
 工兵 二六個大隊——七十八中隊  
 輜重兵 二六個大隊——百〇四中隊  
 交通工兵 九個大隊——二十七中隊（飛行艇隊は此中に含まる）

右人員約二十三萬九千人（之れ平時編制の現役軍人總數なり）

右の中第二軍團（名古）及第八軍團（阪）は戰時人員を以て滿洲にあり（詳細は後）第六軍團（田）は北朝鮮に臨時派遣中にして之れも亦戰時人員である。此等は國交の風雲暗澹たりしを以て萬一の場合を慮り各所要の兵力を派遣したのであつた。大正初年頃、軍備縮少——増師反對の聲が囂しくて陸海軍當局者の苦辛は蓋し一方でなかつた。が、其苦辛の效果は現はれて大正〇年四月までに漸く右の如き勢力を作り上げたのである。今日！吾人は當局者の明——と其勞とに對し唯平身低頭して感謝する他はない。嗚呼世界の大戰争——恁んなことなら三十個師團にも四十個師團にもして置く所だつたのに……

此一刹那に於ける我海軍の勢力は次の如し、但六月二十日の現況を示す。

第一艦隊 大約四十萬噸、（旗艦安藝）（聯合艦隊旗艦若菜）  
 目下浦鹽斯德港外に於て示威的行動を爲しつゝあり

第二艦隊 大約三十五萬噸（旗艦薩摩）  
 目下鎮海灣に碇泊して待機の姿勢を保持す

第三艦隊 大約二十萬噸（旗艦金剛）  
 目下鎮海灣に碇泊して待機の姿勢を保持す

第四艦隊 大約四十萬噸（旗艦千早）  
 臺灣打狗港及南岬附近にありてフィリッピンにある米國東洋艦隊の動靜を覗いてゐる

總計百三十五萬噸の艦艇關艦の外に義勇艦隊の九隻ありて目下修繕を急ぎつゝある。其中の四隻は今や太平洋上に遊弋して合衆國の動靜を監視してゐる。  
 五日前に於ける露國の極東に於ける勢力は浦鹽斯德の要塞陸正面に西北利亞狙擊第四軍團（歩兵四十八大隊、騎兵七十中隊、砲兵四十中隊（二百四十門）工兵二十中隊）と、ハルピン以



北に約二軍團を駐屯せしめてゐたから、彼我の勢力に於ては差したる優劣は無いのであつた。露國が西比利亞複線鐵道に依つて大輸送を開始したのは六月十八日頃からである。日本も亦日本海黃海支那海の海上權確保によつて、全力を盡して大輸送を開始するまでの事である。一兵だも多く速に戰場に集中し得た方が直ちに攻勢を採るのである。眞に之れ危機一髮！ 次の瞬間は如何なる運命を吾人に齎すであらうか、吉か凶か？ 黃白兩人種の代表國が殺戮の手腕を比ぶべき第一歩は正しく此處である!!!

豫てから斯くなる事は解つてゐたので、常備諸團隊はいざ動員といふ場合を顧慮し準備おさおさ懈りはなかつた。

國の武裝？ 吾人は國交斷絶といふ意味を深くも淺くも取り得るのである。甲國が乙國に對して交戦を宣言するにはさまでの面倒も要らぬ、其面倒の要らぬやうに遺憾なく準備するのは所謂武裝の平和間にあるのだ。元來大和魂を備へた日本人が此十年間何の爲めに外交不作の屈辱を忍んだか？ 何の爲めに武斷的態度に出でなかつたか？ 言ふまでも無く外交の不作延いて軍事不振——軍備不整頓の結果であつた、其結果は論ずる迄もなく軍政に暗き、國防の知識なき僞君子僞儒僞紳士の跋扈の致す所今更憤慨するも最早時機が遅い。

多くの人は戦争に依つて平和を得る方法を知らなかつた。條件なき平和が永劫に得らるゝものと誤解してゐたのである。世界の強國が何事もさうした平靜的態度を以て日本に接するものだと思つてゐた。そして今や血渦の廻轉は速度を早めつゝある！

#### (四) 海上の極感

歩兵第十四聯隊(小倉)は戰團射撃の爲め昨日より城野の山地に野營の幕を張つた。六月十三日午後四時無事歸營して長途の疲れにホット息を吐く暇もなく、

『不時呼集。』  
の號音は營庭に響き渡つた。

第一装用の夏服に着更へて、練兵場に集合すると聯隊長は喜色を滿面に浮べて、『暫く不時呼集を行はなかつたので、聯隊の志氣は如何事だらうかと思つて呼集を行ふて試したが、案外速く手落ちもなかつた、軍人は何時もかうでなくてはならぬ。近き將來に於て動員令が下るやうな事があつた場合にも今の通りの狀況でなくてはならぬ。本職は汝等の用意周到なるを深く喜ぶのである。』  
かう訓戒して、



『今日は乗船の演習を爲やうと思つて……これから埠頭に出場する。』と附加へた。其言動には何等の變異をも見出すことは能きなかつた。隊伍肅々として港に出づれば三千餘噸の汽船は舷門を開いて待つてゐた。夕陽西に沈み關門の海面には金波銀波のチラ／＼と揺るぎ移つて、咽ぶばかりの絶景に夏の暑さも忘るゝ程であつた。聯隊全員は順序よく船に乗せられて、艦で乗船完結の聲は彼處の當直士官の口から起つた。東の山端から眠むさうな月が昇つて坐に近き未來の血河屍山を思はしめずには措かなかつた。

船は間もなく錨を抜いて船を沖に向けて、スクリウの音高く小波の上を蹴り進んだ。

『乗船演習、小距離の航海。』

これは聯隊長の口から出されたる練兵場の言葉であつた。

船は進み進んで玄海洋上近く速力を出した。此時遅く彼の時早く輸送指揮官たる聯隊長は、『何分の命令があるまで將校下士卒の甲板に出づることを禁ずる。』と命令を下した。運送船は船底深く二千の同胞を載せて一途に西へ／＼と進み行く。

『おい、一體吾々は何處まで連れて行かれるのぞらう？ 演習の爲めならかう沖まで出る必要も無い筈だ。』

『いかにもさうだ！ これ又遠方の港に上陸して又長い行軍をして歸營するのかな、弱つたなあ！』

船底の將卒は口々に恁んな談話を交へてゐた。

されど、青春の將士は疑ひのさして大問題にもあらざるに、いつしか涼しき夢路を辿つて仕舞つた。

目が醒めた。

六月十四日の朝日は船窓から洩れて波は次第に高く速力今や矢の如しであつた。

『甲板上に出づることを得。』

嬉しき命令は朝の食事と共に下つたのである。長く脾肉の嘆に堪へなかつた彼等は飛ぶがやうに甲板に出て四邊を眺めた。

眺めて驚いた。

彼等の乗れる運送船の前には五六百米突を距て、同型の汽船が七艘同じく……何を目的に走るのか……腫を凝らしてよく見ると最先方二三吉羅の海上には我軍艦もゐる横合遙に巡洋戦艦金剛が同じく走つてゐる。

水と天とは互に相接着して陸地も島も彼等の眸には最早入らなかつた。



正しく玄海洋上である。  
乗員一同は甲板に集められて上甲板に突つ立たる聯隊長から次の如き訓示を受けた。  
「諸君、吾々は陛下の爲め國の爲めに今戰場に急ぎつゝあるのだ。見るが可い、彼處に走つてゐる汽船は第十二師團の諸部隊だ、第十軍團は秘密の命令に依つて平時編成のまゝ満洲に行くのだ。」

驚いたのは二千の健兒であつた。  
今生の別れを述べんも既に遅い、故郷の骨肉は今も猶兵營に健在なりとばかり思つてゐるのであらう。事の餘りに意外なのに一同は一度驚天した。其驚きは慥て歡びに變じ中には感極まつて泣くものもあつた。船艦相衝んで西方に突進する第十軍團の優姿を一瞥したら、誰しも悲しむ所か歡喜極度に達して思はず、

『天皇陛下萬歲！ 日本帝國萬歲！』  
を叫んで東の空を伏し拜んだ。

このやうな秘密動員に由つて第十軍團は第三日の夜無事釜山に着き鐵道に由つて長驅滿洲の野に輸送された。  
軍團の平時人員が内地の港灣を出發するが否や正式の動員は暫く見合はせとなつて、附近の

人々も彼等が眞逆戰場に送られたものとは信じてはゐなかつたのである。軍團全部は六月十八日午前遼陽に到着して駐屯軍司令官の隷下に入つた。軍司令官は既在第二、第八軍團と相合併して翌十九日司令部を奉天に移した。其故此軍司令官の隷下に屬せし兵力は、歩兵も十二大隊（獨立守備を除く）、騎兵四十中隊、野砲兵二百八十八門、重砲百四十四門、工兵十八中隊にして、之を戰時編成に換算すれば歩兵七萬二千餘、騎兵五千餘騎、砲兵四千八百餘、工兵三千六百餘となる譯で合計八萬五千餘の人員を有す。

吾人は頭腦を冷靜にして、十年前の木越旅團を考へることが出来る、船に乗るまでは輸送指揮官其人でさへも軍機の秘密を知る事は能きなかつた。玄海灘はさうした詩的の喜悲を宿す日本内地の場末である。

あの海上に於ける吃驚から失望——其れから狂喜に推移する壯丁の面影は何の事はない一の詩であつた。泣く笑ふ叫ぶ……其れが一瞬間に演出されて海上は波の高きも船の動搖も物の數ではなかつた。生き別れの悲哀を袖に隠す訣別の一瞬間よりも思ひ切りがよくて却つて嬉しかつた。

釜山港に入る——西方鎮海灣に黒煙を吐きつゝ碇泊せる我第二、第三艦隊の英姿を見たとき甲板上の將卒は思はず萬歲を叫んだ、然しながら釜山市民は何の爲めに多數の兵士が上陸する



かは其眞意を知るものは殆んど無かつた。  
埠頭に上陸する時其傍に彼等の軍團長××××中將宮殿下はさも御満足の御微笑にて起  
立させられてあつた。

(五) 世界戦の端緒

露佛の同盟は痛く獨逸を恠々たらしめたのである、埃伊の共に頼むべからざるを看破した該  
國は、さしも永年暗闘を續けたる英國に和睦し遙に日本に向つて一種の同情を寄せた。之れは  
獨逸外交の成功として列強の一驚を喫した處である。抑々獨逸が日本の爲めに間接の援助を  
與ふるに至つた主なる原因は、佛獨間の暗闘を續ける上に於て恨も科もなき露國が直接間接に  
獨逸の背後をつゝいたから、其復讐であつた。獨逸は斯様な態度を以て露國をして佛國に厚  
誼を致すを得ざらしめ其隙に乗じて本來の勁敵たる佛國に對抗せん野心である。極東の大陸に  
於て日露兩國が専心交戦に従事する時斷然佛國に對して一騒動を挑まんとするのである。爰に  
於て英獨同盟は孤獨の佛國をして危地に陥らしむる譯となるのである。  
日露國交の紛争は世界の強國をして同時に危懼を發さしめ、歐羅巴全洲亦暗雲渦捲くに到つ  
た。

嗚呼世界の平和は將に破れんとしてゐる、世界戦の端緒は今將に開かれんとしてゐる、而し  
て日露の國交は遂に斷絶した。英領印度總督は日本皇帝陛下の宣戰布告と共に、十五萬の一軍  
を出兵して西藏——蒙古に向つて進發せしめた。其東洋艦隊は日本第四艦隊と相呼應して太平  
洋上に出でた。其等の目的は必ずしも日英同盟によつて日本に好意を表するものとは思へな  
かつた。

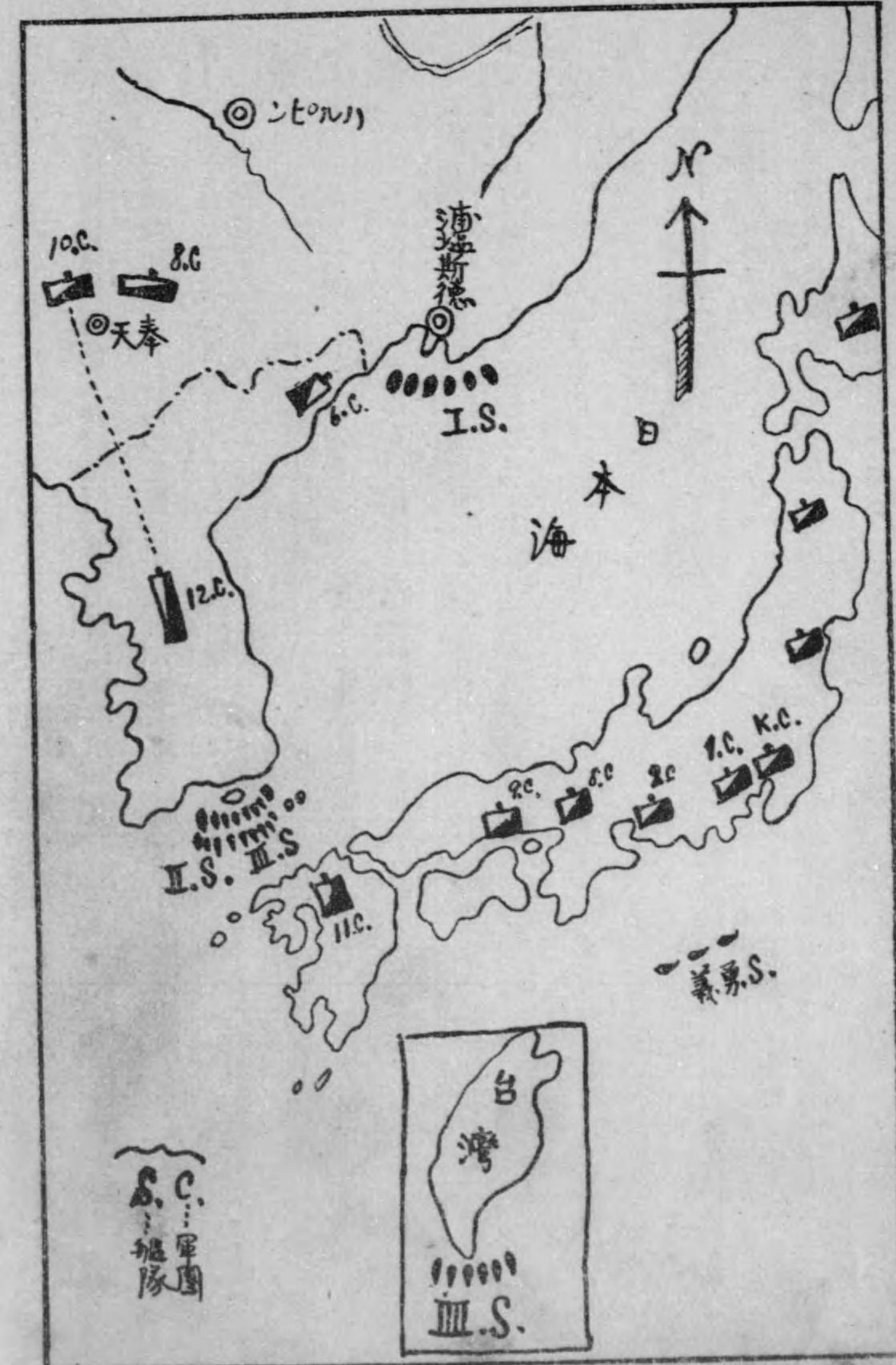
露國黒海艦隊はデブラルタルの要塞を突破して東洋に前進せんとし、バルチック艦隊も亦日  
を期して之に合せんとしてゐる。彼等は多分目的を達するであらう。

米國大西洋艦隊は露國から買收せられんと交渉中であつたが、英獨兩國の強抗なる反對に會  
ふて行惱みの體である。然しながら英國の眞意は果して那邊にあるであらうか？

『貴國ニシテ若シ露國ノ戰闘ヲ援助センカ、獨英モ亦日本ヲ援助シテ貴國ノ艦隊ニ對シ戰端ヲ  
開カントス。』

この宣言書は兩國皇帝陛下の名義を以て米國に送られた。米國は優勢なる英獨艦隊の來襲を恐  
れて、一時其交渉を取消すこととしたのである。此現象は實に奇々怪々のものであつた  
萬國平和會議、僞學者の愚説——其等が世界戦の面前に何の効果があらうか？ 一國內の喧嘩  
紛擾ならばこそ法律裁判の制裁によつて暴威暴舉を未然に防ぎ得るが、國と國との紛争は何物





が克く之を裁決するか、世界王の無き以上世界を平定せざる以上、國是を貫徹すべき國靈の意  
 氣を妨礙する勢力は無いのである、守るべき義務はあらう、が、服従すべき責任は更にない。  
 其故吾人は兵器に訴へて是非曲直を定めねばならぬ、是必ずしも勝利を獲るとは定まらない、  
 非必ずしも戦敗にあらず、之れ世界の空氣が常に矛盾のまゝ流通する所以ではないか。而して  
 日露は遂に干戈の裡に相見えざるべからず、延いて世界は戰雲を招き寄せて曠古未だ例なき地  
 球の沸騰を開始せんとするでは無いか、斯くして地球は爆發粉塵となるか或は世界王の立つあ  
 りて永久に平和の礎を作るのである。快？ 怖？ 吾人は暫く瞑目して懸て演出せらるゝ現  
 實の地獄を通過せざるべからず。  
 戦争が幾十年かゝらうが其塵事は奈何でも可い！ 白人を塵滅するか黄人が消失するか、之  
 れを小にしては日本人と露國人とが最後に一人でも残るまでやるのだ！ 之れからあの駭々廣  
 い西比利亞を横斷する爲めには、事なくとも半年はかゝる、況して強い露軍を前に控えるのだ  
 もの一年や二年で済むとは何人も思はぬ事であらう。彼の難關たる松花江を超越するまでには  
 豫想外のタイムを費すことに相違ない。日本が百萬の陸軍を出すなら敵も百萬以上の軍隊を出  
 すであらう。以前から言はれた如く日本人は常に劣勢な兵力を以て劣等な武器を以て勝を獲ね  
 ばならぬ——さうした覺悟を夢寢にも忘れてはならぬと。大正〇年今日となつても矢張さうだ、



武器も兵員も到底露國の物と同斷には出来ない、けれど日本人の特色はさうした状態に於て敵に勝つ自信がある、如何に強くても屹度勝のだ、これは武器の力に信頼せぬ美點である。まして世界を相手に一活動をやらうと思つてゐる以上は兵の頭数や武器の精否は何の患をも爲さぬのである。日本は如何に努力しても軍人以外の人民が不熱心だから敵に優れた材料を發明することは當分望みが無いのである。唯忠君愛國極みな戦士の赤誠が劣等な武器を精銳に變化せしめ、少數の頭数を多數に響かすのである、さうした所に大日本帝國の特色がある。嗚呼世界戰の端緒！吾人は今度異域に輸送されるれば爾後故國の山紫水明を拜むことあるまい、戰爭の根が世界から絶ゆるまで、世界が平面となるまで……

動員は案外に早く完結してドシ／＼輸送さるゝことゝなつた。別離——喜悲——さうした空氣は内地に充滿してゐた。關門海峡、日本海沿岸の諸港には運送船の帆檣林立し、異國に通ずる海面上には船影引きも切らず。

### 第三章 動員と出兵

#### (一) 第一發——悲憤

大正〇年六月十九日午前六時十七分

朝霧未だ霽れやらす、日本海上を吹き管むる涼風が浦鹽斯德港外にある我聯合艦隊の甲板を掠むるとき——

敵の戦艦セオドリーの右舷から十六時の巨砲彈が飛來して、我旗艦安藝の舷側を貫いて下甲板の床上に霹靂第一聲を揚げて爆發した。其れを合圖に敵艦六十餘隻の砲門から連べ撃ちに射出した爆裂破甲彈は見る／＼裡に我艦隊を血煙の中に包んで仕舞つた。

未だ國交の斷絶も聽かず、宣戰の詔勅にも接しては居らなかつた。

恐ろしき凄じき其の第一發こそ。日東帝國が昔から大の／＼大好物とした機先の血祭であつた。何たる不覺であらう!!! 何たる悲憤であらう!!! 我艦隊は遂に其機先の血祭を敵に奪はれて昔からの大好物は敵に與へて仕舞つた!!! 腐敗せる國民の表 現 は有らゆる意味を以て發生した。我艦隊百餘隻は直ちに應射して凡そ一時間の砲戰に霧は煙と立替はつた。實力に於



て稍々劣勢なる露國艦隊は諸砲臺の掩護砲撃に由つて悠々と港内へ引揚げた。霧煙霽るれば敵艦は隻影だも残さず。偶然の不覺に痛く周章の色浮べたる我艦隊の列が甚だしく亂れてゐるばかり。更に一瞬を凝らして海面を見渡せば、其處に我一等戰艦筑波は憫れマストのみ僅かに水面に露出して氣持快げに海底に坐つてゐた。我長加農の破甲弾は負惜しみにも射程を延伸して附近の諸砲臺を砲撃したが、今日の不覺を憤ふには何等の報酬をも獲る事は能きなかつた。海底に沈める筑波は數百の生靈と大切なる武器とを乗せたまゝ、永劫に還らぬ物となつて仕舞つたのである。

此悲痛なる出來事と共に、在浦港三萬の同胞居留民は我艦隊の保護を享くる望みなく、家財を投棄して陸路遠く豆満江指して避難した。が、其途中無頼の徒に捕はれて所持品を奪はれ虐殺せられ、若き婦人は其貞操を汚され……三萬の中雄基(北韓にあり)に到着せるもの僅かに二千二百餘に過ぎなかつた。二萬七千餘の生靈は怨みを吞んで西比利亞の野の鬼と化したのである。

生き残りの人々は、口を揃へて露國の暴を訴ふると雖も今は奈何ともする事は出來なかつた。海軍の大不覺其の一凶事が三萬の非戰闘員を見事に失つて了つた。嗚呼!!!  
血祭! 吾人の如き殺戮的意味に生れた國民に取つて此一句が如何に痛烈に響くか?

蘇つて日清役三十七八年役——皆是れ此機先の血祭を外した事はなかつた。是れが軍の首途だ! どうせ戦はねばならぬ運命が目の前にブラ下つてゐる以上、近き昔の例にも鑑みるが可かつたに……我大日本帝國は此嬉しい、旨い、傑つたい冒頭の御馳走に舌鼓を打つて其の後、悠々と日本刀を提げて出て行くべき筈であつた。吾人の先輩祖先既に然り——吾人後輩亦然らざらんやであるに……。首途の血を祖先の靈前に供ふる爲めにも、決死の覺悟を事實の上に證明するが爲めにも、曳いて還らぬ梓弓——機先の血祭は徹頭徹尾戰爭をやり透すてふ純然たる男性美の象徴なるに……。

嗚呼惜しい事をしたものだ! 立ち遅れ!! 吾人は常に一步を敵に超越してゐなければならぬ、其超越の餘裕に由つて先制の劃策を續け得るのである。其機微其危機一髪の要點を贏ち得た日本人種が、遂に其要點を敵に奪はれて受太刀の姿とはなつたのである。

凶か吉か? 吾人は今日の不覺に前途を悲觀するものである。不安と疑懼とは交々襲ひ來りて恐ろしき敗戦の閃めきを直覺せずにはゐられないのである。恨めしきかな我艦隊や、悲しきかな浦港外の海面! 終生拭ふべからざる敗衄の第一歩は斯くして刻まれたよ!!

第一發——機先、之れが日本帝國の手から失はれたら地球は滅裂だ、國交の斷絶まで目前の御馳走を食はずにゐる? 其塵間鈍い日本男子と思ふか、國交斷絶は言ふまでもなく外交官が



最後に口から出す唯一の一言だ、其一言が出るまで餓しい思ひをして待つやうな優柔不斷の陸軍で無い、海軍で無い。外交官最後の態度を花やかに装はしむべく果斷に出てしむべく長射程の銃砲が其れに先んじて飛ぶのに何の不思議があらう?!——吾人は斯く信じた。

戦争と平和——平和から戦争に移る一瞬間の變化は微々たる人間の舌の尖のみで色を着けたくは無い、必ずや其境界線は血の事だ! 兵器の事だ!! 戦争大局の勝敗は此一刹那に決するものなる事は我のみならず、口に平和を唱へつゝ内に兵を研ぐ毛唐人の熟知する所である。うっかりすれば敵から機先を制せらるゝことは鏡にかけて見る如し! 機先を狙ふ毛唐の頭上に其又機先を獲得する……其處に日本人の唯一のプライドがあるのだ。然しながら其美しきプライドも今は我等のものならず。

滿洲に兵備を嚴にし、海に艦隊を出動せしむ。其意果して那邊にあるか? 言はずもあれ今の場合を遺憾なく處置せしめやうとするにあることを……然しながら今や萬事休矣。

かうなつたら思ひ切りが第一番だ、出來た事をクヨクヨしたつて仕方が無い、總ての覺悟と決心とは此第一發に由つて付いて仕舞つた。吾人は總ての不快を忘れたい! 動員下令の綠雨が祖國の都鄙を喜躍に満たしたとして、未來の大戦に勝ちさへすれば可いのだ、そして召集令狀には陸海二方面の捷報を添へて志氣を鼓舞して戦はう!!

吾人は改めて我軍事當局者に感謝せざるを得ない事がある。其れは今日の日本が斯の如き不覺があつたとは言へ、大體の作戦に於てアクチーブの動作に出づる事を主眼とするを得たのは、偏に軍備の擴張に盡瘁し兵備を整頓した赤誠の結果に外ならぬと信するからである。若しも過去戦役後の儘の姿であつたならば、恐らく今猶屈辱的外交を重ねて、滿洲の租借權も朝鮮樺太の保安も將に放棄せんとする頃であつたらう。危いことであつた! 吾人は此處まで思ひ及ぶと全身の戦慄を禁じ能はざるものがある。

けれど、今は極東に於て彼等と對抗することを得るのである!! 假令兵員が彼等に劣るとも、兵器材料は遙に劣等なるも、今猶日本魂の面影が微に残つて、雲霞の如き大軍も物の數かは……精銳なる敵の兵器が何の恐怖を持来さう?! 其れのみが一綫の光明だ、戰場に花らしく出て得る唯一の武器唯一の材料である!

此上は勇敢なる軍人の働き、精忠なる戦士の活動其れが唯一の希望である。長い間無用の長物視された軍人は有らん限りの勇を發揮して起つた。けれども浦鹽斯德港外に於ける我海軍の不覺は、未だ戰場を踏破せざる陸軍々人の頭腦に此上なき不快と憤懣とを漲らしめた。極東の海上權を握つた帝國艦隊が微々たる浦港艦隊に先を制せらるゝ……之れ程意氣地の無い事があらうか?! これは戦争の首途に於ける百萬の戦士の齊しく切齒する所であつた。



(二) 戰鬪序列——兵力の膨脹

第一次動員の結果奉天附近に集中すべき第一線諸團隊及作戰上の目的より編成せられたる諸部隊は左の如く戰鬪序列を定められた。此各團隊は動員完結と共に戰場に輸送さるゝのである。

★第一軍(浦鹽要塞攻圍軍)戰鬪序列

軍司令官 陸軍大將伯爵 高矢木鎮男  
軍參謀長 中將男爵 下村多賀義  
參謀副長 少將 大原正明  
(其他砲兵部長工兵部長總て少將を以て充つ)

第一軍團

軍團長 中將子爵 小笠原重徳 (師團長は中將旅團長は少將なり、以下同じ)

第七軍團

軍團長 中將男爵 山口太三郎 (同右)

第十一軍團

軍團長 中將 寺島伯之助 (同右)

後備第一師團

師團長 中將男爵 男澤久明 (旅團長は少將なり)

獨立徒步砲兵旅團

旅團長 少將 後藤鱗八

歩兵	八十四大隊(一大隊は約千人、以下同じ)
騎兵	四十四中隊(一中隊は約二百騎、以下同じ)
野砲兵	七十八中隊(四六八門)
重砲兵	二十四中隊(二四四門)
要塞砲兵	二十四中隊(二四四門)
工兵	三十中隊(一中隊は約二百人、以下同じ)
輜重兵	三十中隊

○戰鬪員 大約十二萬五千人

(注) 騎兵第二第七旅團及各師團の騎兵半部は集成して(軍司令官直屬) 騎兵第一師團を編成、師團長は中將春山安俊なり

★第二軍戰鬪序列

軍司令官 陸軍大將 ×××××殿下

軍參謀長 中將公爵 山坂鱗太郎

參謀副長 少將 大白公三郎

(其他各兵科の部長も亦少將を以て之れに充つ)

近衛軍團 中將 △△△△△△△殿下



第九軍團  
 軍團長 中將子爵 扇町平之丞  
 後備第二師團  
 師團長 中將 吉田良喜智

合計  
 步兵 六十大隊  
 騎兵 二十八中隊  
 野砲兵 四十二中隊(二五二門)  
 山砲兵 六中隊(三六門)  
 重砲兵 十二中隊(七二門)  
 工兵 十四中隊  
 輜重兵 二十中隊

○戰鬪員 大約八萬人

(注)〔騎兵第一旅團及各師團の騎兵半部は集成して〕(軍司令官直屬)  
 〔騎兵第二師團を編成、師團長少將山口元貞〕

★第二軍戰鬪序列

軍司令官 陸軍大將侯爵 穎川素一郎  
 軍參謀長 中將 吉村瑞賢  
 參謀副長 少將 田邊方直

第二軍團  
 軍團長 中將男爵 楯澤猛之進  
 第八軍團  
 軍團長 中將 結城一道

後備第三師團  
 師團長 中將 原 轟貫

合計  
 步兵 六十大隊  
 騎兵 三十六中隊  
 砲野兵 三十中隊(一八〇門)  
 重砲兵 十二中隊(七二門)  
 工兵 二十四中隊  
 輜重兵 二十九中隊

○戰鬪員 大約七萬五千人

(注)〔騎兵第三師團を編成すること前に同じ〕  
 〔師團長中將大山信直〕

★第四軍戰鬪序列

軍司令官 陸軍大將伯爵 雲井俊恭  
 軍參謀長 中將 山川十郎治  
 參謀副長 少將 藤井輝太



第五軍團 中將男爵 大越綾三郎  
 第六軍團 中將 仁禮家時  
 後備第四師團 師團長 中將 柳川方義

合計  
 歩兵 六十大隊  
 騎兵 二十八中隊  
 野砲兵 四十二中隊(二五二門)  
 山砲兵 六中隊(三六門)  
 重砲兵 十二中隊(七二門)  
 工兵 十五中隊  
 輜重兵 二十中隊

○戦闘員 大約七萬八千人

(注) 騎兵第四師團を編成すること前に同じ  
 (師團長中將敬田勝治)

★第五軍戰團序列

軍司令官 陸軍大將公爵 小早川利春

軍參謀長 中將男爵 石川雄吉郎  
 參謀副長 少將 谷田直

第十軍團 中將 ×××××殿下  
 第十二軍團 中將 上原不二美  
 後備第五師團 師團長 中將子爵 吉川高秋

合計  
 歩兵 六十大隊  
 騎兵 二十八中隊  
 野砲兵 五十四中隊(三二四門)  
 山砲兵 六中隊(三六門)  
 重砲兵 二十四中隊(一四四門)  
 工兵 十五中隊  
 輜重兵 二十中隊

○戦闘員 大約八萬人

(注) 騎兵第五師團の編成前の如し  
 (師團長中將男爵高木梅香)

★第六軍戰團序列



軍司令官 陸軍大將元帥伯爵 武内顯正  
軍參謀長 中將 千々木久  
參謀副長 少將 目益八郎

豫備第一軍團

後備第六師團  
後備第七師團  
(兩師團共編成兵力は前に同じ)

軍團長 中將 大谷 臺 太

豫備第二軍團

後備第八師團  
後備第九師團

軍團長 中將男爵 前田 洋 直

後備第十師團

師團長 中將 寶 井 陽

合計  
步兵 六十大隊  
騎兵 二十中隊  
野砲兵 三十中隊  
工兵 十五中隊  
輜重兵 二十中隊

○戰闘員 大約七萬三千人

(注) 各師團の騎兵半部を集成して騎兵獨立旅團を編成す  
(旅團長少將大井義任)

★獨立軍團戰闘序列

軍團長 陸軍大將男爵 土村力三郎  
軍團參謀長 少將伯爵 力 石 光

後備第十一師團

師團長 中將 大隅 利 敷

後備第十二師團

師團長 中將 佐 方 博

後備混成第一旅團

旅團長 少將 竹川 祿 太郎

合計  
步兵 三十大隊  
騎兵 九中隊  
野砲兵 十五中隊(九〇門)  
工兵 七中隊  
輜重兵 十中隊

○戰闘員 大約四萬人



第一次動員の結果輸送及既在滿鮮軍の總計左の如し

- 步兵 四一四大隊
- 騎兵 一九三中隊
- 野砲兵 二四一中隊(一四四六門)
- 山砲兵 一八中隊(一〇八門)
- 重砲兵 八四中隊(五〇四門)
- 要塞砲兵 二四中隊(一四四門)
- 工兵 一二〇中隊
- 輜重兵 一五九中隊
- 戰闘員 五十五萬一千人

第一次動員に於ては、第三軍團(仙臺)及び第四軍團(弘前)は其命令に接しなかつた。國會は滿場一致を以て、急遽『六箇師團』『騎兵一旅團』『野砲兵二箇旅團』『重砲兵一旅團』の増設を可決し殘留軍團と共に第二次動員の準備に着手した。新設團隊の編成左の如し。(但目下編成中)

- 第十三軍團
  - 第二十五師團 步兵 二十四大隊
  - 第二十七師團 騎兵 十六中隊
  - 騎兵第九旅團 工兵 六中隊
  - 輜重兵 八中隊

- 第十四軍團
  - 第二十六師團 步兵 二十四大隊
  - 第二十八師團 騎兵 八中隊
  - 野砲兵第九旅團 野砲兵 二十四中隊(一四四門)
  - 重砲兵第八旅團 工兵 六中隊
  - 輜重兵 八中隊

- 第十五軍團
  - 第二十九師團 步兵 二十四大隊
  - 第三十師團 騎兵 十六中隊
  - 騎兵第十旅團 野砲兵 二十四中隊(一四四門)
  - 野砲兵第十旅團 工兵 六中隊
  - 輜重兵 八中隊

計、歩兵七十二大隊、騎兵四十中隊、野砲兵六十中隊(三六〇門)、重砲兵十二中隊(七二門)、工兵十八中隊、輜重兵二十四中隊。

第一次動員の命令に接したる各團隊は四日乃至七日を以て動員を完結し夫々戰略上の方針の下に内地港灣を出發して戰場に輸送さるゝ筈である、(戰略上の配置輸送等は後に述ぶ)

常備軍十三軍團の中十一箇軍團の動員に依りて充員せる結果第一戰列に推進し得べき兵力の膨脹を見よ!!! 吾人は籲つて平時編成を一見する時國軍の全力を注いだものが僅々二十三萬九千人ではないか?! 其の中から二軍團を殘留せしめても優に五十五萬一千人の肉彈を出し得



て猶餘裕綽々である、暫く時期を待つて第二次、第三次動員の後極東の大陸に勇往邁進する日本男兒の數を一瞥せば、如何に其膨脹力の大きなるか、解るであらう。武器、資力？ 曰ふ勿れ吾人は武器を以て戦ふにはあらず資力を以て戦ふにもあらず、百萬の肉弾が最劣等なる武器を以て戦ふのであるよ!!!

動員完結と共に同時に戰場に向つて大兵團を輸送する事は到底不可能である、四千餘噸の汽船に乘載すべき兵數は僅々歩兵二千餘に過ぎず、砲兵や騎兵には馬匹あり砲車あり彈藥車あり之れを以て觀るときは一隻の運送船に備へられたる搭載力は眞に微々たるものではないか!?! 五十五萬餘の第一線部隊のみを輸送するには、如何に輸送船の數を要するか、如何に時日を要するか、如何に周到なる計畫を必要とするか、全軍が滿洲に集中するまで戰場の形勢は如何になり行くか、敵の鐵道輸送と日本の船舶輸送とは何れが優か劣か唯此危機一髪の運命を開拓するものは一に海上權の確保二に計畫實行の整然たるに俟つ外はないのである。吾人は極めて大局に注目して彼我兩軍が滿洲の平野に於て真面目の會戦を行ふまでの日子を冷靜なる思慮の下に待たねばならぬ。一勝一敗の微々たるものには心を惹かるゝ必要を有たないのである。

(三) 第一期作戰目標

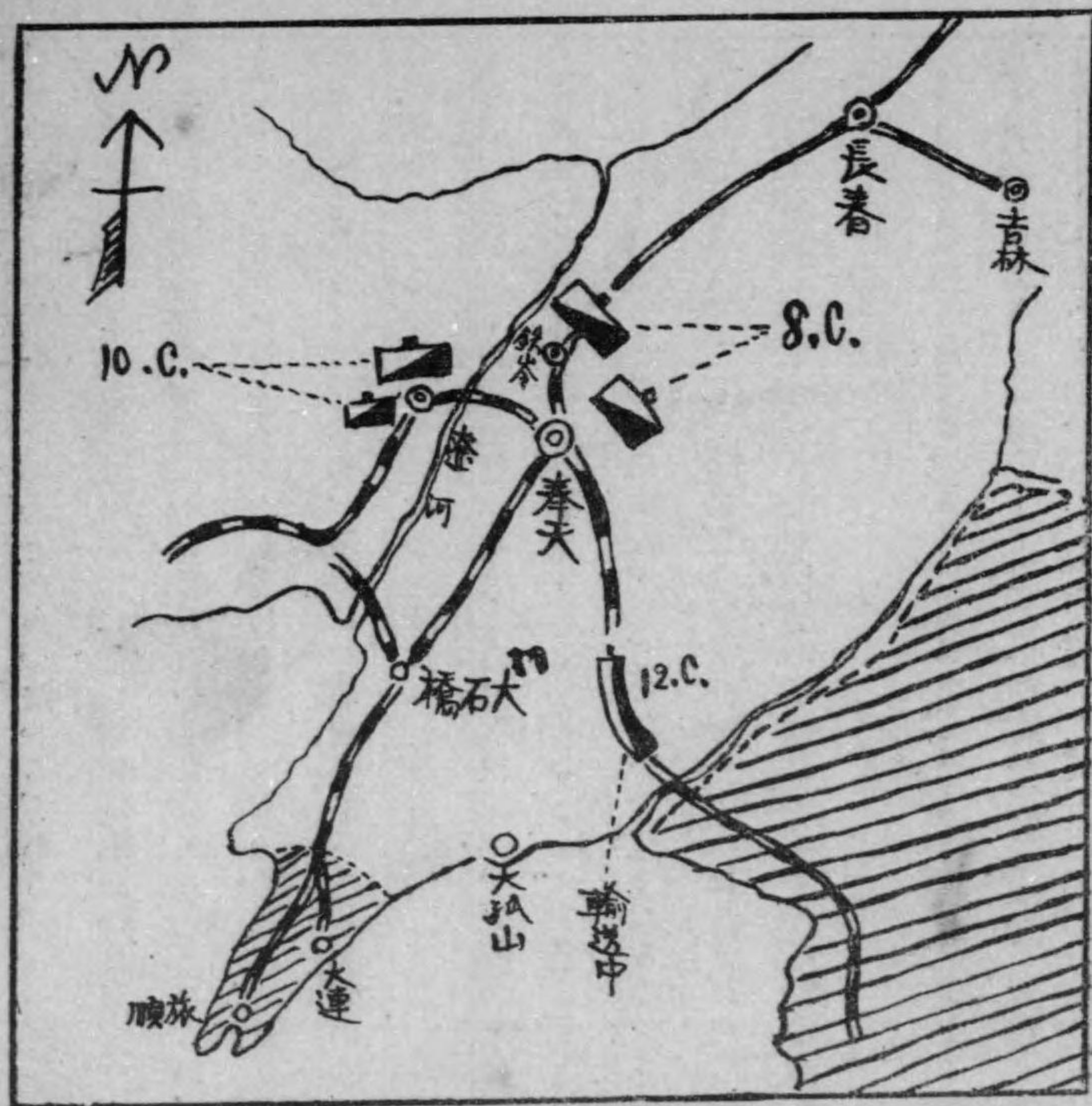
先づ兵力を奉天に集中し、直ちに攻勢作戰を採り、長春——東遼河——西遼河の線に前進して暫く此地線に滯陣し、第一軍(浦鹽攻圍軍)の北韓國境を越えて確固たる地歩を占むるを待つ。……之れが第一期作戰である。浦鹽の陸正面攻圍は西比利亞鐵道を遮斷した後でなければ決して意の如くはならぬ。其故第一期の作戰は極めて寡々としてゐるが之れは洵に已むを得ないのである。畢竟主眼とする所は七十幾萬の兵力を奉天附近に集中するにあるからである。

滿洲守備軍たりし第二、第八軍團は六月三十日以後戰場に到着する豫定の後備第三師團を合して第三軍の名稱を附せられた(第一次動員表参照)。國交斷絶の前日奉天に到着した第十軍團を直ちに新民府附近に前進せしめ、從來其地の守備たりし第八軍團の第十師團と交代せしむ、同師團はやがて鐵嶺に轉進した。

朝鮮常設の第十二軍團は六月二十五日より鐵道輸送に依つて新民府附近に急進中である、之れは將來後備第五師團の到着と共に第十軍團と合併して第五軍の戰鬥序列中に入る筈である。北韓に臨時派遣中であつた第六軍團は、司令部及第十三師團を城津附近に置き、第十四師團をして雄基以北豆滿江畔に於て國境の守備に任じてあつた。

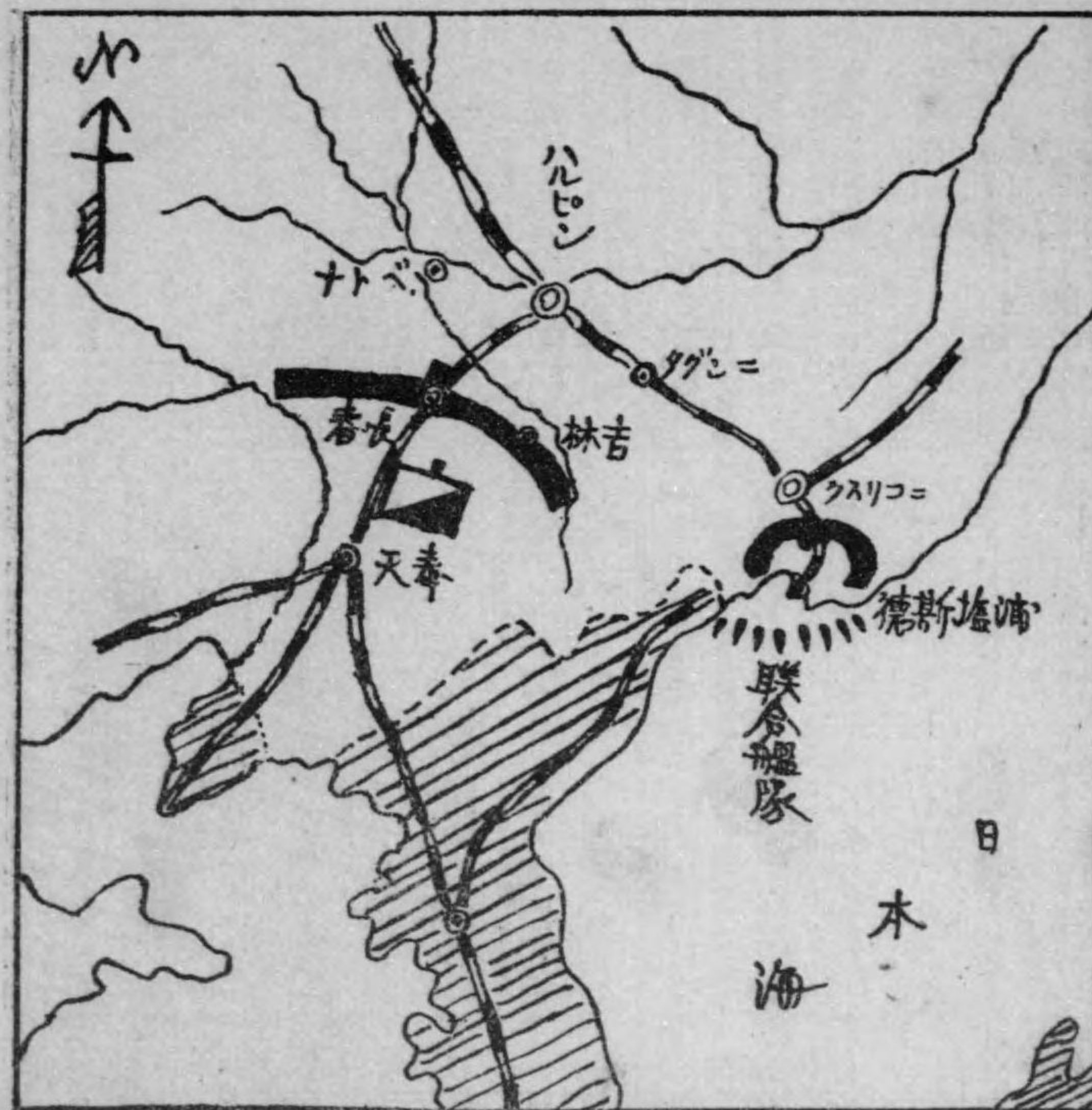
開戦前其等の作戰計畫に基き、既に其位置にあつた諸團隊及び秘密動員の結果六月二十五日奉天附近に到着した第十軍團、朝鮮常設の第十二軍團等の現位置は別紙略圖(圖第二)の如きもの





滿洲駐屯軍現狀

知らず陸軍は健全に活躍するの元氣がある。第一期作戦目標を遠く北方に取らざりし理由は、中華民國が嚴正なる中立を保持するか或は好みを露軍に通すべきか判明しない爲めに、孤軍遠く北方に突進するは少からぬ危険の狀態あるを慮り、第二次動員の結果戰場に到着する部隊と相呼應して民國の態度如何に依つては一撃を彼等の頭上加ふるをも辭



(圖二第) 作戦理想圖

であつた。集中は一時一刻も速を尙ぶ。戰場に於て一員だも優勢を占むる事は應て敵に對して先制の利を占むる唯一條件である。吾人は過般浦鹽斯德港外に於て無能なる海軍の不覺により甚しく志氣を殺された。其恥辱を恢復し機先の餘裕を挽回するには敵に先じて兵力を集中し敵に先じて攻勢を採り敵に先じて勝利の斧を揮はねばならぬ。海軍はい



せずといふ大々の願慮と野心とがあつたからである。

吾人は、翻つて六月二十日以後に於ける露國本國の光景が知りたくて仕様がなない。が、奈何せん。敵國の内情が鏡にかけて見るやうに判然と知れるものでも無く、唯敵國の出兵敵愾心も亦少くとも我と同等……若しくは其以上の機敏と精銳と強度とを有せるものとして、萬事を判断しなくてはならぬ。我國の作戦計畫さへも局外者の窺知するを許さないではないか況んや海を隔つる敵國の内情をや……である。

國民は作戦の如何を憂慮するよりも其等は天佑、天運の棚に揚げて後援の實を發揮し、外征の骨肉をして毫も後顧の患なからしむる事に努むべきである。一勝一敗は兵家の常……戦ひの敗るゝは敗るゝの日に敗るゝのではない、些々たる小敗悲報に喪心して戦場の運命をトするの誤れるも酷しいものだ。戦争のヴェールに包まれたる國民は須らく『大功は細瑾を顧みず』を自覺して、日東帝國が世界の帝國を創造するまでの間に發現する細瑾は、大海の一粒と鵜呑みにして仕舞へよ!!!

もう斯くなつた以上は、母國に残れる男性も女性も萬事を廣義に解釋して、第二の國軍を充實すべしドシ〜子を産め！百萬の生靈が屍を馬革に包むとも、母國には既に呱呱の聲を揚ぐる百萬の少戦士が嬉々として笑ひ叫ぶが如からしめよ!!

Such separations did not daunt the spirits of officers and their men, and their wives. And every Spartan lady was bred up to be able to say to those She has best loved that they must come home from battle with their shield, or on it—either carrying it victoriously, or borne upon it as a corpse.

(斯様な別離が忠勇武烈の將校下士卒……且つは彼等の最愛なる妻——に取つて何程の悲嘆があらう?! 其塵事は何でもなかつた。其れからスバルタ婦人は誰も彼も、己れが最も愛する男に向つて、次のやうな事を言ひ渡すやうな勇氣と決斷とに富む生れ方をしてゐた。——我が愛する良人よ！ 卿は戦場で花々しき功を樹てられよ、そして卿の持ても楯の上に名譽ある戦功の花環を載せて歸つて下されよ！ さもなくば花環の代りに卿の白骨を載せて——) 嗚呼日東大帝國婦人よ！ 我國は現世に於けるスバルタに非ずや、卿等は正に在昔のスバルタ婦人に一籌をも輸しはせまじ……よもや別離の悲哀を浮べもすまじ!!!

苟も世界戦の端緒を開いた以上、祖國の人々は劈頭第一に世界の地圖を擧げて見よ、而して最後に差當り吾人の超越せざるべからざる滿洲、蒙古西比利亞の地形を按ぜよ。北滿洲の地は巨流縦横に渡りて作戦上少からぬ困難の横はる位は假令門外漢の老弱男女へも了解し得られ



るであらう。殊に吾人の眼瞳をして極度に充血せしむるものは黒龍江の上流——松花江の河孟ではないか？ 隅田川や荒川のやうな與し易き河では無い、其等の天然障礙に據つて防備する敵に對し、日本軍の運命は如何に開かるゝであらうか？

第一期の作戦は兵力の集中にある。遠く北方に目標を採りたきは山々なれど、無数の天然障礙は吾人をして暫く手を引かめずには措かないのである。吾人は開戦第一日から松花江の線に彼我の大軍が相對峙するの秋を豫想して置かねばならぬ。而して其までの間に發生し得べき諸處の會戦をも相當に注意を拂はねばならぬのである。

吾人は又露軍が南方に向つて作戦し我軍が北方に向つて作戦する間は未だ吾人の意を安んずる事の出来ない期間であることも思はねばならぬ。敵が西比利亞鐵道を背後に控へて軍隊の正面を東方に向け、我軍は鐵線と直角に南北に跨りて大旋廻を爲し、西方に正面を向くる時初めて世界に對する姿勢を示したものだと思はねばならぬ——覺悟せねばならぬ。

第一期の目標を確定して實施の其れに伴ふ事實なればなるだけ爾後の行動が圓滿に行くものであつて、未だ相當でも濟まぬ裡から無謀にも遠く北方に豫定するといふ事は敵を侮つたもので勇者の處置とは決して謂へないのである。

其故我大本營は兵力の集中を第一の目的とし南滿洲確保の程度に兵力を展開する事を以て度

とした、『田舎馬の出が宜過ぎて、龍頭蛇尾に終る。』的の愚策は演じたくないからであつた。

(四) 陸海軍の首將

我英武比びなき 大元帥陛下は、世界の記録に未だ曾て例を見ざる大出師の壯舉につき、此

等陸海軍の統率を一點に纏むるの極めて切要なるを感じさせ給ひ、六月二十四日午前九時、

陸軍大將元帥公爵 八雲 起 秀

を表御座所に召出させられ、畏くも

滿洲軍總司令官

の大任を仰せ出された、八雲元帥恐懼措く所を知らず闕下に拜伏して大命をお請け申した、

嗚呼七十萬餘の將帥！ 祖國の運命は一に八雲元帥の雙肩に累つたのである。

次に 陛下には

海軍大將元帥 ○○○○○○○○殿下

をお召し出しとなり、浦港外に飛んだ不覺を取りし伊村司令長官を免ぜさせられたる上

聯合艦隊司令長官

の御任命があつた。



兩首將は既に七十の高齡に達し、白髮銀髯秋野の芒の其れの如く、殊に千載の恨みを宿せし伊村海軍大將の後を享けさせ給ひし御老體の殿下を仰ぎ奉るだに畏かつた。伊村海軍大將の邸宅は戸を鎖し妻子は泣きの涙の見るも哀れな有様であつた。然しながら過去戦役の如く失敗將帥の邸宅に向つて瓦礫を投ずるものもなく妻子に迫害を加へんとするものもなかつた。其寛量な國民性は確に大正の一進歩を示したものとて誰も嬉しく感じたのである。

然しながら開戦當初から海軍の首將更迭を見て心ある人は頗る憂慮した。或人は過去日露戦役に於てクロバトキンがリウネウイツチに總司令官の重職を委ねたる不吉を今日我に於て繰返さねばならぬやうな不幸な状態にある事を悲しんだ。殿下の御赴任はさうした愁眉の中にも國民の志氣を恢復するには多大な効果があつた。

★滿洲軍總司令部編成

- 總司令官 元帥公爵 八雲 起 秀
- 總參謀長 大將男爵 木村 綱 安
- 總參謀副長 中將男爵 潮見材八郎
- 以下將官參謀長、幕僚夫々合計四十八名
- ▽聯合艦隊司令長官部編成

- 司令長官 元帥 ○○○○○○殿下
- 參謀長 海軍大將子爵 馬屋原俊道
- 其他合計六十名

軍艦 若菜 (一等戰艦四萬八千七百噸) が旗艦と定めらる。若菜は目下浦鹽要塞沖にあり。六月二十四日はほのゝと明けた。軒々には國旗を掲げ、各公園から祝ひの煙火般々と打ち揚げられて、都の雑沓織るが如く、皆々宮城二重橋の袂に平伏して 陛下の御武運長久を祈らぬものはなかつた。蹙蹙たる紫蘭の花雲は千代田の玉殿に天引きて、燦々目も眩まんばかりの朝日は徐に昇つた。三伏の夏ながら日比谷の翠綠滴るが如く……一天片雲だに無き日本晴れ! 戦勝の瑞兆は何人の身にもひし〜と感じられた。

歡びの極み……進軍、戦捷、幸福を壽ほぐ樂隊の律は四邊から起つた。音の都、歡びの都、勇みの都……まあ何といふ熱狂した光景であらう。『もう何も思ひ残すことは無い、俺も年が若くて身體が自由になるなら、往つて敵の生つ首切抜いて冥途の旅の土産にせうものを……糞ツ、年を取るんてないわいッ、……』悲憤の聲恨みの熱情……見るものをして戦慄せしめた一老爺が楠公銅像の青柴の上に跛の足を投げ出して齒齧みをしてゐた。



『女はどつたらぬものは無いがやい。』  
と出征することの出来ない異性の身の上を慨こち四十路の女が氣狂してゐた。

『往きたいなあ！ 俺は 陛下に直訴しよか知ら。』と叫ぶ十四五の少年もあつた。

『女なんか産れるもんぢやないわねえ。』

目に涙を溜めて、國難の一刹那に大和民族の本領を直接に發揮し得ない女性のやる瀬なきを口惜しがる女學生の群もあつた。

さうした美しい光景を載せたまま太陽は高く昇つた。やがて滿洲軍總司令官八雲元帥と〇〇〇〇〇〇〇聯合艦隊司令官殿下とは俾を列ねて宮門から出られた。之れぞ國運を一身に擔ふて遠く遠く異國の空に老いたる身を進むべき海陸の代表男兒！

司令官殿下は目も眩まばかり美しき海軍元帥の御正装……昇る朝日にさらさらと幾萬の赤子の敬禮に答禮遊ばしつゝ。

總司令官八雲元帥は陸軍大將の正装して、眼は百鍊の鏡の如く今茲七十一の高齡と聞く……嗚呼老いて益々壯なる八雲元帥！

仇氣ない小學の兒童は兩司令官に向つて、愛らしき叩頭を捧げた。と思ふと二長官の俾はハタと止まつて、

嗚呼！

『戰爭は幾年間續くかわからんぢや、おまへ方は大きくなつて大陸の戰場に來て呉れい、俺は其れを待つてゐますぢや。』

と八雲元帥の挨拶!! 兒童は希望に輝く愛らしい眼を注いで、

『大將よ、屹度往きます、往きます、殿下も大將も御老體で誠に御苦勞に存じます、どうぞ僕達が行くまで戦死も負傷もしないで待つてゐて下さい!』

といひつつ十二になる一人の生徒は進み出て元帥の俾の傍に石のやうに突つ立つた。八雲元帥は餘りのいぢらしさに前後を忘れて滑つこい其頬を揉めた。

殿下も感激のおん涙止め敢へ給はず。

之れぞ各長官が 臺命拜受の後退出の途中の出來事であつたのだ。

(五) 黄色人種の代表國

白人は常に恁んな事をいふた。

『黄色人種が何か、彼等は地球に永住すべき動物では無い。地球は吾々白哲人種が上帝から賜はつたものである、黄色人種は自然的に消滅すべき運命を持つてゐる。』  
偏頗な上帝も居つたものだ。其れは何でも可いとしてさる皇帝は黄色人種の侮るべからざる



を知り且つは己が身邊の少からず異人種の妨げを享くるを憤慨して、『黃禍』などと呼ばびだした。上帝の眞意は暫く措いて白人しかも一強國の皇帝をして、『黃禍』を叫ばしめた事に對しては吾は一大痛快である。之れから見ても黄色人種が如何に白人の勁敵であるかも知る。地球を賜ふやうな上帝があつたとすれば白人を迫害する異人種の跋扈は上帝の神威に依つて排除されなければなるまい。けれど、事實は決してさうで無いのだ、黄人は屢々白人を壓倒して黃禍の實を發揮した。黄人の崇拜する上帝は白人の崇拜する上帝と違つてゐる、黄人未だ開けずと雖も神の公平なるを信じて疑はないのである。彼等が果して斯様な思想を以て黄人を遇するならば、吾人には相當の覺悟がある!!

日本刀!

眼を轉じて世界の形勢を見よ。黄色人種の活躍する處は那邊にあるか? 中華國……取るに足らず、土耳其……混血兒、南亞細亞……白人に侵蝕されてゐる。日本……然り然り黄人を代表して常勝の榮冠を飾り得るは日本を措いて他に無い、即ち黄人の代表國ては無い。代表國の肉彈今や百萬を揃へて大陸へ輸送中である。

白人の上帝をして名を爲さしむるか否かも將に此一戰に決せられんとしてゐる。健全なる日東帝國が一度槍を揮つて起てば、そは何時も人種の消長を意味する責任戰となる。世界の黄人

は迷夢未だ醒めずして此凄慘なる戰爭を單に極東の一紛争なりと心得てゐる。奈んぞ知らんや彼等の未來の爲めなるを……。

此意味が正當に解釋せらるる中華國ならば、躊躇逡巡せずに蹶起一番動員せる衆軍を進めて西比利亞鐵道を破壊し日軍と相呼應して露國東西の連絡を絶つこと掌を覆へすよりも容易な業なるを……。應ては鼻露の餌食に葬らるる國の運命とも知らず陽に中立の姿勢を採り陰に白人に欺を通ずるではないか? 嗚呼共に俱に齡するに足らざる民國なるかな!

怨を述べうなら我國の揮はざる外交だ、數年前から失敗に失敗を重ねた外交は遂に民國を離して鼻露の扶翼たらしめたのだ。安逸遊惰の妖魔に魅せられた弱國民の反抗に堪へやらて一途に平穩無事をのみ希ひし結果は、いざ戰爭となつて不利も不利、驚天動地の害を神聖なる日東帝國の軍隊に與ふることとなつた。が、今は後悔既に及ばず吾々は一意専心當面の敵を撃破して國是の貫徹——延いては世界の日本を日本の世界に進めねばならぬ。外交? 頼むに足らざる外交は今後永久に存在せぬが可い!!!

其程の大責任を負ふた我帝國だ、他に戰爭の眞意に同情して一臂の勞をも惜まぬといふ美しい國は無い、英國之れは東洋に於ける領地確保の條件から結んだ親交……言はば物質上の關係から懸意になつたやうなものだ、同郷同閭で生立まで同じうした間柄の親睦と親睦が違ふ。



獨逸之れも同じ事自國の利益を先決問題としての厚意だ、今日の獨逸としては正しくかくあるべき現象だ、隨喜の涙を零すべからず、而かも彼等は異人種ではないか。

王蜀黍のムシヤ鬚生へた正方形に近い頭蓋骨持つ毛唐人は、彼のラデコの頭腦から斬新奇抜な物事を考へ出す點に於て偉い！ 銳角の頤を突き出してクリ／＼坊主の頭を振る日本人は彼等の發明物を機を失せず真似る點に於て偉い、いや確かに我有と爲し得る點に於て世界の物議を醸してゐる。他人の牛蒡で法事を營み得る點に於て痛快なる日本人である。黄色人種の代表責任國は正に斯の如き状態に趨つてゐるのである。

今度の戦争こそ世界の黄金を掻き集めて富士山よりもヒマラヤよりも愈星の世界に達くやうな黄金山を築き上げて月宮殿の玉堂に尊き吾等の 兩陛下を戴き奉らねばならぬ。玉の樓から全世界が一眸の中に入るやうに……。

強盜は厭だ、といつても祖國を楯に取つての強盜なら萬更厭でもなからう、何がさて白人相手の大戦争だ、其大戦争は人道の上から觀すれば正しく強盜ではあらうが、白人既に斯の通りだ、天與享けざれば却つて咎を享く、運命の神が彼等の心を魅する奇怪なる上帝を征服すべく黄色人種に命じたのだ、白人は黄人の手を藉るに非ずんば迷夢遂に醒め能はぬのである。其迷夢之れを攘ふには他ではない。

日本刀！

黄色の吾人が揮ふ日本刀は正しく偏頗なる上帝の角頭を兩斷するのである。手當り次第斬つて斬つて、斬り捲くる事に依つて日本刀は狂喜の満足を得る譯だ！ 斬る爲めの日本刀は斬らずして飾れば脾肉の嘆に呻く唸る、壯なる哉百萬の日本刀は牙を揃へて出でた、筐底に呻いた及は再び殺伐の空気を吸ひ得るを喜び、血にあやかるを悦び……其れが忌はしき黄血黒血にはあらずして、渴し切つたる白人の血……切れ味は定めし宜からう……彼の血管の充實した肉體に躍り込んだ一刹那、細胞の分れて行く跡に兩斷の痕跡を残す痛快よ、あゝかうして考へるだけでも自分の肉が武者振ひをする、床にかけた日本刀で跳つたり弾ねたりしてゐる。

おのれもうなるか錆び刀……

なに、錆びたので澤山だ、いくら錆びてゐても大丈夫、斬つて／＼斬り捲くる裡には白人の骨が砥石にもならう、肉が打粉にも脂油にもなる、紅い血を嘗めて日本刀がゲラ／＼笑ふ……

飛行器が要るものか、材料が要るものか、吾人は心と肉とで戦ふのだ、武器など奈何だつて可い、高が白人を相手にするのに……

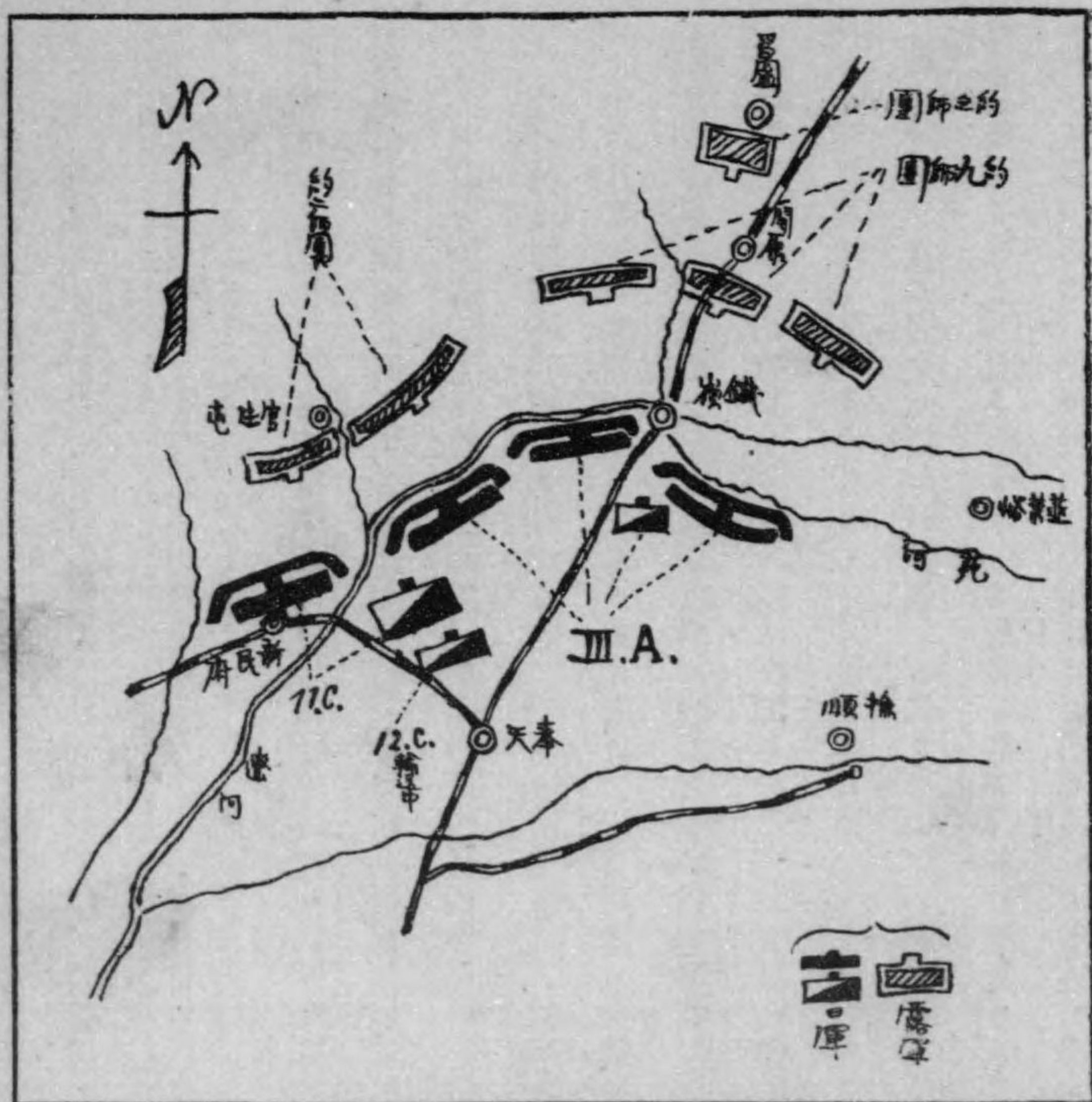


### 第四章 悲報頻々

#### (一) 冒頭の陸戦

滿洲軍七十萬餘の陸軍諸部隊が、奉天附近に集中するを掩護すべき任務を以て、鐵嶺——新民府の線以北の地帯を守備しつゝ、あつた我第三軍(後備第三)及第五軍の一部は、六月二十二日未明より、優勢なる露軍の來襲を蒙り苦戦甚だ努めしも遂に其效果なく、昌圖、開原を敵手に委して鐵嶺南方高地線に引退するの已むを得ざるに至つた。新民府附近に於ても官生屯を烏有に歸し第五軍の一部は辛うじて新民府東西の線を固守し得るの状態となつた。

鐵嶺附近に追撃し來つた敵の兵力は大約九個師團を算し得べく、新民府前方の敵は約二師團の見込であつた。當時我軍の兵力は兩軍を合して六個師團に過ぎず、第十二軍團は二十七日以後にあらざれば戰場に到着するの胸算を爲すことが能きないのであつた。彼我兵力を比較するときは、先づ敵は私の三倍に相當してゐた。加ふるに精銳なる飛行艇隊の來襲は我軍をして多大なる難境に陥らしめ、任務戦に決意固守した我軍も死傷續出し逼迫危殆の驚天動地なるに恨を呑み夥多の死傷者を戰場に遺棄して敗退せなければならぬやうなハメに立到つたのである。



戰 陸 の 頭 冒

(況 狀 日 二 十 二 月 六)

冒頭の陸戦が我軍の敗北に歸してから、我滿洲軍七十萬の奉天附近に集中するの計畫は一大恐慌を以て迎へらるゝやうになつた。敵は開原南方高地線及び官生屯附近に停止し堅固なる陣地構成に努むるもの、様であつた我第三軍司令官顧川大將は第十二軍團の朝鮮より到着するを待ち直に攻勢に轉じて開原昌圖、官生屯を恢復し



祖國の作戰計畫を危険なからしめんと企圖して居つた。(第三軍司令官のみ戰場にありて、第五軍司令官未) 六月二十四日夕刻までに軍司令官の許に到着せる斥候及間諜よりの諸情報に綜合すれば、  
『少くも二萬を下らざる敵の一兵團は六月二十三日夕刻昌圖及其附近に到着し、官生屯方面にも  
續々増加の部隊到着す、』……と。

其情報に基づき二十四日夜半軍司令官は狀況の時々刻々悲なるを知り茲に現在の陣地を死守  
し内地出兵の戰場に到着するを待つに決した。何となれば第十二軍團の全部が到着する頃には  
敵も亦其れと同等以上の増援を得て、兵力の比較は依然面目を改めないからである。

二十日拂曉軍司令官は在義州輸送第二十師團長より左の通報に接した。

『二十六日午後八時朝鮮暴徒の爲め義州附近に於て鐵道の大破壊を蒙り一時輸送を中止せざる  
を得ざるの悲境に遭遇せり、修繕の爲め少くも五時間を要する見込みなり。』

分秒をも争ふ今の今の一刹那、第十二軍團の到着は益々遲滞しやうといふ場合、果斷なる類  
川司令官も轉た悲觀の息を吐いた。

殊に開戦の當初假令性質が持久戰なるにもせよ、一舉にして昌圖、開原を奪はれ死傷者を戰  
場に遺棄して後退したといふ事は、祖國一般の志氣に影響すること莫大なものだ、凡そ物には  
最初が大切である、微々たる早駆競争でさへも立遅れが遂に優勝の榮冠を失ふ主因となるでは

ないか、國交斷絶の前悲痛なる血祭戰を演つたのは別として、交戦宣言の後の第一戦に脆くも  
敗北を取り、而も狀況は時々刻々悲に向つてゐる。

日本男兒の到底忍ばれない處だ!

軍司令官は憤懣晴らすに由もなく熱涙を飲み込んで依然陣地を固守するより他はなかつた。

六月二十七日午前九時三十分大本營訓令

『滿洲軍の輸送は六月二十八日より開始する豫定なり貴官は極力前任務を遂行する事に努むべ  
し』

第二軍(先發たる)は七月二日以後戰場に到着する豫定にして貴軍に附屬すべき後備第三師團  
も殆んど同時に到着せん。』

嗚呼孤軍は今後多くの日數を累卵の狀態に於て重要な任務に服せざるべからず。武夫の心  
中察するに物哀しいではないか?! 況や兵事の變化は測り難く如何なる故障の生じて豫定の  
タイムが延びぬともつかぬに於ておや。

此に於て軍司令官は熱血を注げる一場の訓示を部下團隊に下附した。

『軍は現在の陣地を死守せざるべからず前途遠遠なる國運の第一歩は一に軍の目下の行動如何  
に關す、將校以下本職の意を體し祖國の安危を一身に擔へ。』



大正〇年六月二十七日午前十時

第三軍司令官候爵 額川素一郎

かうなると不思議なエネルギーを湧かすのが日本兵の特色である。三倍の敵に當らうが五倍の敵が寄せ來らうが三人殺す、五人殺す……これが日本兵各個の思想となる。五倍の敵なら一人が五人宛殺さば可いぢやないかと度膽を据ゑる。多々益々可なり結構なりだ。下級將校も下士も兵卒も、軍の危険なる状態にあるを聞いて私に氣に病んでゐた。奈何したら可いのか下級者としては如何にせば可いのかと問ふた。一意専心現在の陣地を死守して一歩も退かないのだ、一誠石をも貫くのだ、と言ひ聞かされて、部下は

『よろしい引受けた。』と叫んだ。

上の意が下の腹に徹底した曉の我軍よ、一種悲觀の妖氣が漂ふてゐたのに、今は……今は名残なく霽れて昨日にいや増す今日の志氣、

『いくらでも來やがれ儘に引受けてやる。』

と言ひだした。中には兵力の優劣は問ふ所ではないから速かに攻勢を取つて過般失つた陣地を奪ひ還したいから、軍司令官閣下に取り次いで呉れといふ青年士官連も出て來た。

此活々した光景を見た軍司令官は狂喜措く所を知らず從來の固守的戦法を翻して攻勢に出

て一大打撃を敵の頭上に加くんかと物色の眼をキラ／＼させるやうになつた。

(二) 大輸送——戰機發展

眼のある者は臉をしかと開いて日本海の海面を見ずや?! 逆捲く怒濤を蹴る運送船——玄海

灘の激浪を物とせずに進む運送船、數へても見ずや……數ふる違はあらざるべし、海上は

黒煙吐く船の蔭で眞黒くなつてゐる。あの船の上には幾十萬の祖國分子が乗つてゐる、出しも

出したり船の數、作りも作つたり兵の數! 流石に鎗打つたる日本海の怒濤も隙間なく浮び走

れる船に蹴退されて浪の形は成してゐない。今は波の上の船にはあらで船の間の波ではないか。

松浦佐用姫は山の上で石になつたと聞く、今日の婦人は

“Come home from battle with your shield, or on it——either carrying it victoriously, or borne upon it as a corpe.”

など、言つて手巾を振つて門出を壯にしてゐる、石になる程別離を哀しまないのだ!!

嗚呼母國!

運送船に乗つたる數十萬の戦士は母國の山々が雲烟糶糊の裡に包まる、時遙に振願つて此山紫水明の地を見た。陛下の在します國——我を生んだ國——我最愛の骨肉のゐる國——我



墳墓の國——嗚呼母國の山は青い……紫だ、我は再び此神の國に還るやら還らぬやら……

……。フト現實の我に蘇れば舳艫相街んで五千餘噸の運送船は西へくと走つてゐる。

我等は青い紫の樂園を出て、紅い濁り汚れた血の池國に急いでゐるのだ。其處には咽喉を癒すべき甘水も無い、汗を拭ふべき緑の蔭もない、同情の無い修羅の地獄だ——紅い爛れた眼を刮いて性を屠らうとする残酷な太陽の直射する沙漠のやうな大平野だ、草も木も水も無い夢のやうな荒地だ、其處に我等は純潔な血を搾り出しに行くのである。

スクリユーは地獄の妖魔が唄ふ鬼謠の如き音たて、銀色の飛沫を散らしつゝ、走るわゝ、日は暮れて母國の俤も今は暮い水平線下に葬られた。臨月の太胎抱えて健氣な事をいつて良人を勵ました可憐しの妻の面影も浮んだ。絶望の息を瘦せ細る兩肩に現はして、それとなく決心の面色を見せた花耻づかしき情人の最後の表一情も繰り返された。老い先き短き母の老眼から喜悲交々迫つた緑の涙の玉と落ちた彼の一刹那が想はれた。『お兄様……どうぞ立派な功績を樹て、下さい。』と言つた可愛い妹の黒髪も目についた。『お父様左様なら……。』と頭を下げた可愛いの我が子が、せぐり来る涙を噛み締めた手巾の蔭に隠す母の懐に抱かれてニコ／＼した罪の無いあの悲哀も浮んだ。將に息を引取らんと爲しつゝある父の最後を見届ける暇もなく國難に赴く首途の一瞬間も考へられた。

今は唯船の走るに任せてやがて殺戮の舞臺に花々しく活躍するより他に何等の色彩も見出せなかつた。そして其色彩こそ此上なき結構なものであつた。海上の月は波に洗はれながら出ててさながら銀波をいやが上に白く見せた。日本海上の甲板に見る月は美しとも美しいものであつた。光の一つ／＼から愛と情との糸が聳々と我を取巻くやう……。廣い／＼海面に唯一つの月が中天にあるばかりで咽ぶばかり美しかつた、そして此水が……。此月が物を思はずには措かなかつた。幾萬里走つても水は祖國に通じてゐるではないか、鱈ある魚は其水くぐつて今日は日本に明日は他國へと通ふではないか。幾億里走つても此月は祖國の人も見るとはないか、光線の一つ／＼が色香の生靈をして様々に物を思はしむるではないか？

泣くな嘆くな山ほと、さす

泣けば昔が思はれる

と誰やらが口ずさんだ、我一人にあらぬ今宵の感想を他人も同じく感じ動かされたのであらう。

釜山、仁川、鎮南浦、大孤山、大連、營口、元山津、城津、柳樹屯——七月上旬には此等の各上陸地に雲霞の如き大軍が續々上陸をする、廣軌の汽車は車扉を開いて待つてゐる、海上には運送船が列を爲してゐる。人あり黄海、日本海は寂寞なりと曰はんか——否々引きも切らざ



る海面の船舶の光景よ！ 人あり西比利亞鐵道は單調悽然たりと、否々時毎に通過する汽車の窓を見よ、白人はピツシリつまつて東へ〜と急いでゐる。  
七月四日先着第二軍は主力を以て奉天に達し、後備第三、第五兩師團は同日夕刻各々所屬軍の陣地に到着し、茲に第三軍及第五軍は完備したのである。第二軍は直ちに右翼に行動すべく第三軍の東南方を行軍し撫順城方面より前進すべき姿勢を取つた。滿洲軍總司令官八雲元帥の到着するまで、第三軍司令官顯川大將が最古參の故を以て、暫く三箇軍の統率を爲すこととなり四日の夜各兵團をして各々當面の敵に當らしめ、開進の終るを俟つて攻勢に轉ぜんと決心した。

戰機は爰に一大發展を爲したのである。

新來の兵團と合併するときは明日正午頃以後第一線に使用し得べき實兵力は左の如し。

○第二軍(二軍團及後備第二師團合計八萬人)

○第三軍(二軍團及後備第三師團合計七萬五千人)

○第五軍(二軍團及後備第五師團合計八萬人)

總計(歩兵百八十大隊、騎兵九十二中隊、砲千百十六門其他……)

右は明五日日正午以後使用し得る實力にして、去月二十二日悲痛なる敗戦を爲した以後十幾日

間は、敵もさしたる攻勢的動作に出でず、ハルピン、長春の附近に續々兵力を増加しつゝあるを知るのみ幸に無事なるを得た顯川大將は欣喜雀躍……今宵は一杯飲んだ。  
斥候及間諜の報告を綜合する時は、我前面にある敵は約四軍團(歩兵百四十大隊、騎兵百二十中隊)にして、後方梯團の未だ到着せざるに先だち斷然現在の敵陣を奪ふことは、此上ない好機會と他人も我もさう思ふのであつた。殊に明五日以後には第四軍の一部、第六軍の先頭部隊も亦奉天附近に達するの好況にあるを以て「好機逸すべからず」と見て取つた顯川大將は直ちに攻撃に關する命令を下した。

第一軍(將來浦鹽を)は動員上出發を遅れて七月七日夕までには其先着團隊が雄基の附近に到着する筈である。此到着と共に從來守備に任じありし第六軍團は直に船舶輸送に依つて大連に向ひ第四軍司令官の隷下に入る筈である。第四軍の中第五軍團及後備第四師團は大連、柳樹屯、營口の各港に上陸して遼河以西の地帯から北進することゝなつてゐる。七月五日其司令部及歩兵一旅團と各兵科の少數は遼東半島の南角を廻つて海上を急いでゐた。

第六軍及獨立軍團は動員編成の完結に稍時日を要し七月七日頃内地港灣を出發する豫定である第六軍は將來第一軍と連絡し滿洲軍の右翼を形成するの豫定にして獨立軍團は蒙古附近に於て我最左翼の據點を構成するの姿勢を持つてゐる。



數日前祖國別離の喜悲を浮べた無數の戦士は今や大陸上に闊歩して明日の激戦を様々に考へてゐる、而も我軍が大に優勢ではないか？

(三) 日本海上の悲劇

後備第一師團の一部(後備歩兵第二旅團司令部、後備歩兵第三聯隊の二個大隊、兵器彈藥)を搭載したる運送船赤月丸は第一軍の諸團隊に遅れて、七月六日夜越前敦賀港を出帆して北韓の城津に上陸せんと、洋々たる日本海の中央に出た。夏の海上は曇の上を這るが如く涼風徐に來つて水波起らず、甲板上の將卒は四方水なる晴天の航海に行く手の陸をくと一途に望みつゝ無聊なる時間を過ごしてゐた。翌七日の暮方西南幽に對馬の山々を望んで思は再び母國の上に馳せた。

八日拂曉より殷々たる砲聲が行手の方から起り始めた。

『海軍が戦闘を始めたのだらうか？！』

在北韓の諸軍が假令大陸戦を開始したにもせよ、斯くも砲聲の間近く聞ゆる筈はない。

『どうしても海軍だらう。』

言ひつゝ一同は睡を凝らして見えぬ地平線を眺めた。が、夜は明け放れても何物も眼を喜ばしむるものは見えなかつた。斯くする程に日本海に有名な朝霧は見る／＼間に四邊を立軍め

て、前途に横はる容易ならぬ光景を包んで仕舞つた。

船は汽笛を鳴らしつゝ、水を蹴つて砲聲を心當に西へ／＼と進んで行つた。午前十二時霧は名残なく霽れて砲聲もいつしか沈黙に歸した。一天雲なき碧空には燦爛たる太陽がかつてゐるのみ。前方の地平線に浮ひ上る山影其れが船中の武士の唯一の希望であつた。清らかな空氣——淨らかな水——之れが活々とした日本戦士の肉體に如何ばかり心地よかりしよ！

『明日の午後は上陸するのだ。』これが如何ばかり嬉しかりしよ、血に渴した武斷の國子が一時一刻も陸上に闊歩するの早からんことを希ひしが故なれば……。

正午十二時甲板にある我戦士は行手の水平線上一朶の黒煙を見た。我軍艦？ 我運送船？ 蓋二者其一でなくてはならなかつた。數日間水のみを見た徒然に、かうした他のものを見るといふ事は門外漢の窺知し得ざる快爽と可懐味とがある。彼等は今さうした心裡に囚はれて狂氣の如く甲板上を躍つた。

『軍艦だ！』

と叫びだした頃には黒色の舷側を見せた一大軍艦であつた。時正に午後一時。

『一同船室に入れッ、何分の命令があるまで甲板に登ることを禁ず。』

かういふ奇怪な命令が輸送指揮官から下つた。船室に入ると同時にスクリウの音もバツタリと



止んで數千噸の運送船は進行を中止した。船室の將卒は此不思議な現象に不安疑懼の念を起さずにはゐられなかつた。

嗚呼赤月丸は露艦に捕はれたる也!!!

船は消魂しき音響と共に脱逸すべく再び移動を始めた。間髪を容れず露艦から發射した第一發の巨砲彈は我運送船の右舷側を貫いて舵機を粉塵した。

「武裝、甲板に集まれ。」

此命令があつて一同甲板に登つた時には、間隔僅に四百メートルに山のやうな一露艦が停止して、黒服を着けた水兵が砲側に右往左往してゐた。舷側を射貫されてから水は狂奔して船内に飛び込んだ、今や約三十度の角度を以て右に傾き始めた。

「残念だが此處で死なう!!」

これは輸送指揮官の最後の悲痛なる言葉であつた。ふと眸を其方に轉ずれば後備歩兵第三聯隊の日章軍旗は今焼き棄てられつゝある、旅團長吉澤少將と聯隊長蒲田大佐は舉手して最敬禮を施してゐる、旗手大島少尉は桿を握つて……誰の眼にも大粒の涙がバラ／＼と流れてゐる。

第二發、曲射砲の一破甲彈が煙突の根元に落下して其處に集つた戰士を拂ふた。甲板には太

き孔が穿たれて鮮血は附近を染めた。蟲の息を通はせつゝ

「天皇陛下萬歲」

を呼んでゐる。

第三發、中口径の平射砲はマンマストの根元に命中して凄じき音響と共にマストはポツキリ折れ倒れた。

第四發、巨砲彈は再び舷部の舷側を貫いて上甲板を寸断々に爆破した。船の運命は既に定まつた、今や四十度の傾斜を以てドシ／＼沈没の途中にある。

第五發、一魚形水雷は我船底に突進して、猛然たる爆裂と共に船は見る／＼水中に入つた。萬事休矣二千餘の生靈と少からぬ兵器材料は遂に日本海の底の藻屑となつて了つた。船中の誰一人として遊び逃れんとするものもなかつた。揃ひも揃ふて切齒憤恨の目眦物凄く天を睨んで船と共に沈んで了つた。

誰か其勇壯悲絶に咽はざる者があらうか?! 嗚呼忠勇なる二千の骨肉!

師を出して未だ戦はざるに身先づ死し永く祖國をして涙襟に満たしむた!! 此狂行を爲したる露艦は悠々として西南指して全速力で逃げた。鬼神を泣かしむる忠魂の未だ戦はざるに無念の亡者となり畢つた怨恨や……! 七月八日夕方より満天墨を流せるが如く掻き曇り電雷し



きりに至つて海上は山なす波が狂ひ狂ふた。

悲報は遂に祖國に通じられた。曩には滿洲の陸戦が思はしくなく、今又此殘忍なる海上の悲劇、母國の都鄙は有繋に愁眉を織りなした。人心兢兢として前途遼遠なる此大戦争を危ぶまざるにはゐられなくなつた。日本海、黄海、支那海の海上権は一に我帝國に占められあるにも拘らず斯の如き凶事の現出は、前途の幸運に齎す吉兆であらうか！ 否々吾人は決して吉兆吉瑞と思ふ譯には行かぬ。

十〇年前須知中佐の率ゆる一聯隊が常陸丸に乗つて玄海灘上に出たとき、之れ亦無念の涙を呑んで底の藻屑となつた、其物語の未だ生々しき血魂を宿せるに何たる不運であらう何たる痛恨事であらう。……志ある人は唇を噛んで男泣きに泣いた。

此報の傳はると同時に浦鹽近海に游弋する我聯合艦隊司令長官より『目下蔚山沖に於て露の浦鹽艦隊と海戦中なり』といふ無線電信がかつた。勝か敗か……國民の心は忽ち喜忽ち悲……

(四) 大海戦勝敗決せず

七月七日午後より浦鹽の諸砲臺は一齊に砲火を開き其掩護に由つて港内にある約百二十萬噸

の浦鹽艦隊を出動せしめ、港外に以て一大決戦を求めむと健氣な攻勢的動作に出た。待ち構へたる我聯合艦隊は砲火を冒して港口を突出せんとする敵艦隊に向ひ茲に花々しき一大海戦を惹起する事となつたのである。

敵の要塞から凡百個ばかりの飛行艇隊を現出し我艦上近く逼迫して恐ろしき爆裂弾を投げ始めた。我艦隊にも飛行艇隊の準備の無いではなかつたが奈何せん精銳なる露の要塞に備へ付けられたる飛行艇隊に對抗し得べくも見えなかつた。

艦隊司令長官代理吉村中將(長官殿下)は要塞に近き港口に於て決戦を求むるは却つて不利なるを知り斷然是等を朝鮮近海に誘出して、我速力の輕快と砲火の精銳とを遺憾なく發揮するの有利なるに如かずと同日午後八時を期して南方に引退した。敵は執念くも其を追跡して愈々八日拂曉となつたのである。聯合艦隊の主力は蔚山沖に於て速力を緩め追跡する敵艦隊に對し大旋回を爲し三縦陣となつて北進を初めた。其れが即ち一大海戦を誘發することとなつて、悲痛なる最後を遂げた我運送船赤月丸に殷々の砲聲を聞かした本舞臺であつた。

午前四時二十分

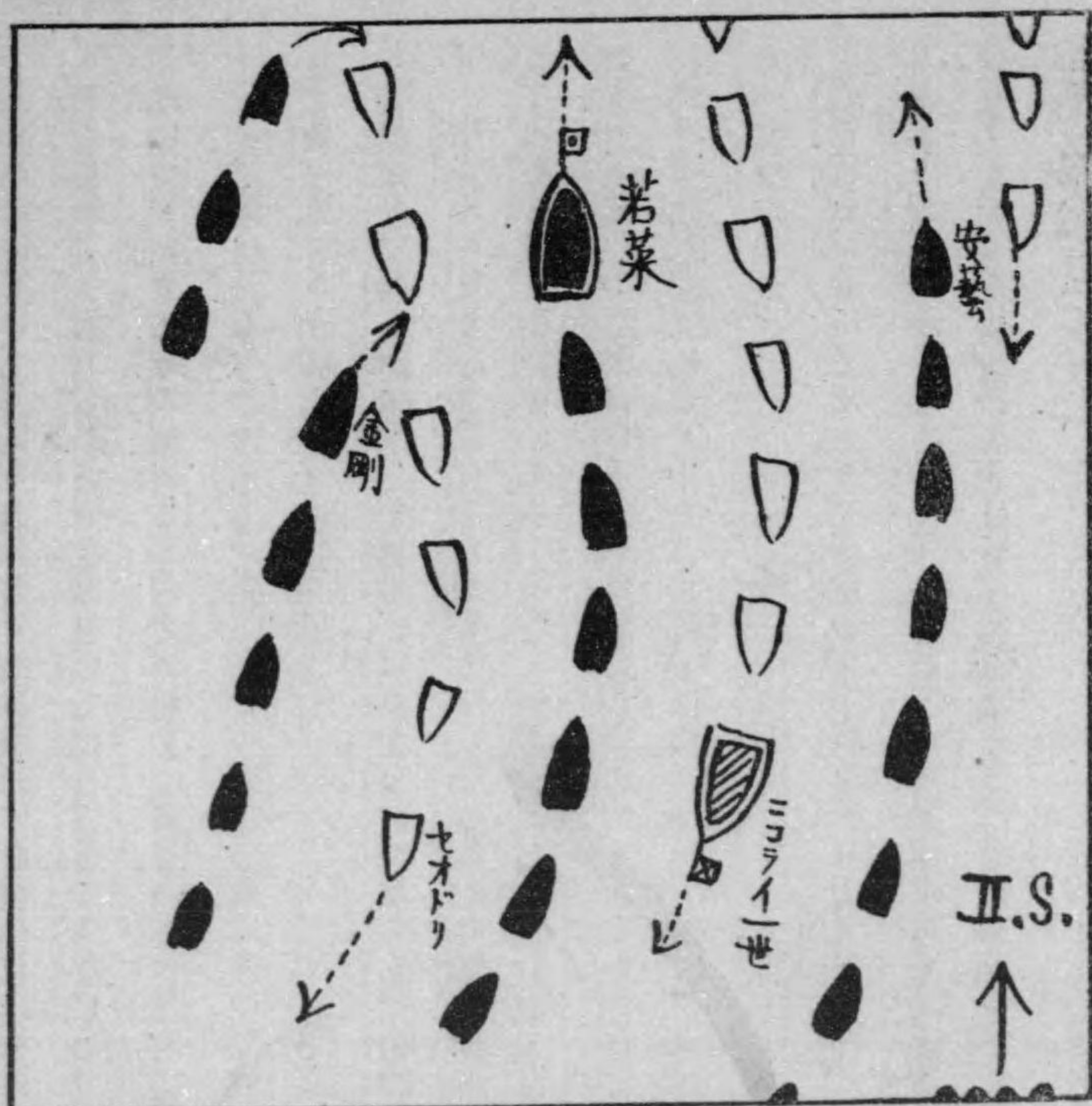
彼我の先頭艦船は、各砲火を交換することとなり、速力も漸次加はつて來た。此頃多少の修繕を要する第二艦隊の主力は鎮海灣に碇泊してゐた。急報に接したので直ちに鎮海灣を出發



し戦闘の渦中にある聯合艦隊の主力の右翼に向ひ全速力を出した。我北朝鮮の天地は、海上の活劇に震動した。水上を平面に走つて戦闘する戦艦、空中を立體に翔つて戦闘する飛行艇、水中を魚の如く走る潜水艇、嗚呼日本海は遂に血の海と變じて了つた。而も我より數等劣勢なる敵艦隊が健氣にも攻勢を取つて南下したるには流石の日本人も驚きの胸を轟かさずにはゐられなかつた。

旗艦若菜の橋上に翻めく戦闘旗、聽て霧立單めて少時は咫尺をも辨ぜず、戦闘は自ら中止の姿となつて艦の進行も暫く鈍かつた。午前十時頃霧は名残なく霽れ去つて、數列の我艦艇巨船は坐ながら山の如く儼然として一絲亂れず。殷々轟々の砲聲は間もなく北韓の天地を震動せしめた。我旗艦若菜は殊に敵砲彈の集注する所となり甲板上の慘状目も當てられず。されど、將卒皆泰然自若として其位置に安んじ下瀬火藥の炸裂は敵の戦艦上を見事に粉塵して、午前十一時前後には流石の敵陣も稍動搖の色が見へ初めた。

第三戦隊の勇敢なる肉薄は敵の膽を奪ひしこと多大にして、此頃より敵は漸次右翼を崩しつ艦列を長蛇の形に變じて仕舞つた。我第一戦隊たる若菜、安藝、三笠、屋島、津雲、生島、三隅、尾島等の戦艦は敵の中堅と此處を先途と火花を散らしてゐた。午後一時頃旗艦若菜に達したる無線電信には、



蔚山沖の海戦略圖  
(七月八日正午)

「第二艦隊は午後二時戦場に到着すべし。」といふ通報があつて、交戦中の將士志氣大いに振つた。哀しい哉我一等巡洋戦艦佐久良、二等戦艦鷹巢は敵の飛行艇と潜航水雷との冒す所となり遂に沈没するの悲境に陥つた。敵の一等戦艦ウスレコフ、同ストロキ、同イルツツクの三隻も我水雷艇の爆破する所となり心地快くも底の藻屑となつて仕舞つた。



其他水雷艇等の損害頗る大にして彼我戦闘の成績は互に相譲らず今や伯仲の裡にあつた。其時！ 其時！ 第二艦隊が全速力を以て我右翼遙に到着した。これを見た敵艦隊は砲火の危険を冒しつゝ、舳を北方に廻轉して飛ぶが如くに浦港の方へ逃走した。我全艦隊は誇るべき快速力を發揮して一齊に追撃に移つたが奈何せん敵は港口諸砲臺と恐ろしき飛行艇隊の掩護に由つて港内深く走り込んだ。我第二艦隊の到着にして今一時間も速かりしならむか、露艦隊は決して無事では濟まなかつたらう、嗚呼流星光底長蛇を逸すであつたのだ。損害の程度も亦彼我大した逕庭もなく開戦第一の海戦は斯くして終りを告げた。此戦ひに於て我艦隊が少なからず苦しめられたるは實に要塞から出づる有力なる飛行艇隊であつた。此物凄じき天魔の活動は日本人が豫想した以上のものであつた。浦鹽艦隊其物には何等の恐懼をも抱かぬ聯合艦隊も思ひ掛けなき飛行艇隊の爲めに空しく蔚山沖まで引退せざるの已むを得ざるに至つたのだ。

此光景を目前に見た人々は前途の日露戦を決して樂觀のみに観ることは不可能のやうに思つた。獨り要塞のみならず將來陸戦に於ても海戦に於ても此悪魔が空中を飛んで如何なる慘行を敢てするかは蓋し容易ならぬ不安と恐怖とを覺えしめたのである。勿論我海陸軍にも飛行艇の編成の無いではないが、此十年間之れが爲めに苦辛した結果のものが露國の其に比較すれば昔

の火繩銃と今の自動連發銃との差があつた。軍人は今更國民の不熱心なるを慨嘆せずにはゐられなかつた。無論日本人は武器を以て戦ふのでは無い、けれど其意味は單に形式の武器を意味するやうな狭義のものでは無く、形式の武器は苟も人間としての頭腦努力のベストを盡し得る限りは言ふまでもなく必要とする意味のものであつた。武器などはどうでも宜い……そんな冷淡な意味では無かつた。精銳なる武器を有しつゝも精神は常に武器に頼まないといふ實精神を鼓吹するのであつた。

増師反對を唯一の口上とした人々は所謂形式の武器が精銳であれば戦争は出来るものだと思つてゐたのだ、其淺薄な思想が永らく太平の人心を酔はして武器々と謳歌せしむるに到つた。けれど、完全なる武器さへも調製しては呉れなかつた。徒に机上の空論のみを喋々して手も足も働かすのではなかつた。

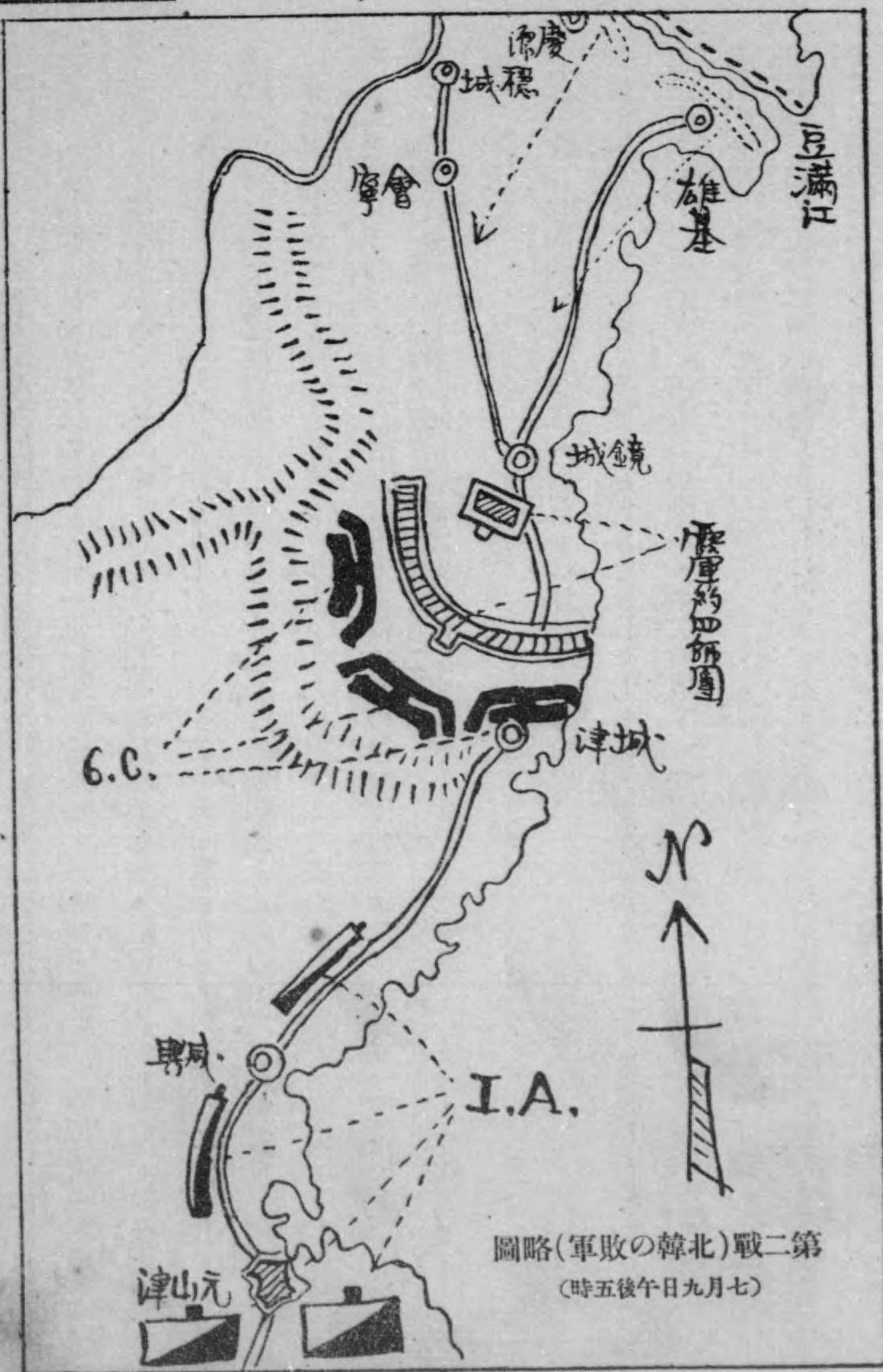
今にして、日頃の誤れる結果は明かに現はれたのであつた。我より劣等な敵艦隊が武器……精銳なる實武器に依つて優勢なる我艦隊に對抗し得た事は争はれぬ證明であつた。國民舉つて武器材料の提供に身を獻ずる白人は、戦具は軍人の發明製造すべきものだと思見する日本國民に見事な痛打を與へた。而して大正〇年七月八日の大海戦はさうした憂慮すべき暗示の閃きを與へられて結局となつたのである。



更に思へ！ 我赤月丸は日本海上に於て同時に二千の生霊と少からぬ兵器彈藥を失ふたことを。損害の程度から言ふなら敵國に比して我帝國の損失が蓋し莫大である。大戦争の緒戦に於て甚だしき悲觀の状態にあるを知る人は眉を擧めて了つたのも決して無理からぬ事である。此公報が祖國に達した時號外の鈴の音も十〇年前の其れと同一の心理状態を以て聞くことは決して出来なかつた。重症患者の生死未だつかざる一瞬間に枕に侍る看護人のやうな心地で……嗚呼!!!

(五) 第二戰——嗚呼

七月八日早朝より日本海上の砲聲が遠く東南方より起り漸時北方に移りつゝ行くを耳にしつゝ、我第一軍の主力は元山津に揚陸最中であつた。豆満江右岸の線に於て國境の守備に任じありし我第六軍團の第十四師團は、其司令部を雄基に置き慶源以東の沿岸に堅固に布陣してゐた。夜暗に乗じて猛烈に渡河したる優勢なる露軍は八日未明より我守備陣地に逼迫し一氣呵成に無謀なる攻撃を爲し慶源の陣地は間もなく突破せられて、會寧も亦其有に歸した。師團の主力は防戦甚だ努めしも衆寡敵せず遂に陣地を撤して城津に退却する事となつたのである。城津には軍團司令部及第十三師團の主力が駐屯してゐた。



圖略(軍敗の韓北)戰二第  
(時五後午日九月七)



敗退せる第十四師團は此地に於て駐屯諸隊に收容せられ漸く停止する事を得た。兩師團は城津西南方高地線及同地北方に布陣して約一軍團半の敵に對し防戦する事となつた。第一軍の先着部隊も戦線に加入することとなり漸く現陣地の保持を爲し得る状況であつた。近く勁敵と相對して恢復戦の好機を待つこととなりしが十二日夕方軍司令官高木大將が戰場に到着し、我兵力が少くも敵と同等となるまで攻勢移轉を見合せ一途揚陸と北進の順序に醒醒してゐた。敵は其處に堅固なる陣地を構成し一步も退かじと固き一決心の色を見せてゐた。此不利戦の結果城津に上陸せしむべき豫定なりし我第一軍の諸部隊輸送部隊は、過日の海戦を中途に知つて一時航行を中止し猶上陸計畫を元山津に変更せざるの已むを得ざるに至り一大頓挫を呈出してつた。

第六軍團は戦闘序列上滿洲へ轉進しなければならぬ、之が爲め第一軍司令官は自己隸下の諸部隊が到着する毎に第六軍團の諸部隊と交代せしめ滿洲の戰場をして作戦に齟齬なからしめむことに努めた。随つて攻勢移轉の期日も漸次遅延すべき理由となり、敵の陣地は愈々益々堅固なものと變ずるばかりであつた。

我第一第二艦隊は再び浦鹽封鎖の任に當り、遠く北海にあつた。滿洲軍主力の方面も今や集中する諸部隊の増員によりて鐵嶺——半拉門の線にある敵に對し近く決戦を豫期し戦機益々發中する。展して從來の細瑾を償ふべき秋は來たが、奈何せん大陸は今や例年の期に遅れて今が強雨の盛季に入り交通不便泥濘車軸を没し、遺憾なき活闘に不利尠からず。全軍は空しく雨季の霽るゝを待たねばならぬハメとなつたのであつた。

霽れみ曇りみ定めなき天候がこれから凡そ二十日間も續くかと思ふとうんざりするやうな心が湧いた。然しながら此二十日間も作戦を中止するやうな我軍ではなかつた。好機は今である敵の集中が我よりも一步遅れてゐる此時一打撃を敵の頭上に加へて機先を戦局の終末まで保持せねばならぬ。

如何なる大敵に對つても常に攻勢を取り如何に危難に際しても常に先制の利を占むること。之の二つは日東大帝國に特有の日本魂である。唯任務上國境を守備して集中を掩護する上に於ては戦闘の性質上防禦戦を交ゆるが之れが將來世界を蕩捲すべき本務の首腦戦に取つては何等の影響をも持たぬのであつた。部分戦の一勝一敗は世界を主眼とする大戦の前には大海の一粒だも價しないことは祖國民の中の婦女のみに不可解であるばかりだ。

其故滿洲に於ける第一の防禦戦が退却に終らうとも、北韓の持久戦が失敗であらうとも、蔚山沖の海戦が思はしからずとも來るべき真舞臺の大會戰大海戦に於て飽くまで攻勢に飽くまで驀進的に巨人的に日本流を發揮することを思へば、樂園の入口に蟠る小蛇の醜にも價せぬ



ではないか?! 一喜一憂は交戦國民の常とは謂ひながら、勝てば雀躍し負ければ將帥の邸宅に瓦礫を飛ばすやうな島國根性は須らく慎まねばならぬ。疑心暗鬼、偏狹、臆病——さうした悪疫を千里の外に遠ざけて、極めて健全に極めて公平に極めて冷静に戦局の推進を刮目して待たねばならぬ。

試に戦闘中の屈曲せる戦線を一瞥せよ、或部分は危殆に陥り或部分は退走に陥るも司令官たるものは此等の現況に眩惑さるゝことなく常に頭腦を冷静に保ちて、戦闘の大局を達観し用ゆべき兵力を用ゆべき場所に推進して最終最極の大勝に注目せねばならぬ。其れと同じく内地に残れる紳士淑女も亦極めて冷静を保ち大功を獲んが爲に細心の罪を犯すを深かな咎め給ひそ。

我兵の歩波が今猶異國に向つて踏み出さるゝ間は決して悲觀の狀態にはあらざる也。

嗚呼我等の今踏める滿洲の地よ? 我等の先輩が血を流し涙に咽びつゝ贏ち得た此茫茫たる大平野は今や再び同一の敵と干戈の裡に相見えねばならぬ悲境に陥つたのである。思へ志ある民! 我々は此大陸上に於て三度戦ふ事の運命を有つた。然も第一戦の清國は今や北鎮の諸軍を集結して動もすれば其斧勢を白人に藉さんとしてゐる、而して我が前面には潮の如き白人の軍が日に増し時々刻々増して来る。西比利亞複線鐵道は列車の通過頻繁なる爲めにいつの間にか軌條がキラ／＼光だしたとよ……。日本海黃海の空は祖國の輸送船が吐き出す黒烟に

因つて曇つてゐるではないか。ヴェスピアス山の爆裂……其れが現世界に何の色彩があらう、日露兩國の破裂は正しく世界を鳴動せずには措かぬ。嗚呼地球の末路が來た世界戦の端緒か? 血の雨血の風は益々勢を増して吹き始めたものを……。

七千萬の大兵を異國の野に集中するといふ事は、吾人が机上に於て考ふる程容易なものでは無い。而して此集中運動の遅速が祖國の運命に如何ばかり大影響を及ぼすか、戦争の勝敗の既に分岐點を形成するものなることを知らば、六月二十日以後七月上旬に至る僅々二十日間のタイムは實に危機一髪……其れは古今を通じて世界を通じて此瞬間ほど大切なものはない——危険なものはないのである。千八百七十年普佛の戦役に於ても、獨逸は數條の鐵道によりて佛國よりも優勢なる兵力を國境に集中し得たるを以て直ちに攻勢を取り國境を越えて佛軍の集中中にあるものに對して各個撃破の舉に出て、以て大局の大勝利を博したては無いのか? 吾人の祖國と今の戦場とは數日を徒費すべき海がある、數條の鐵道に由る程迅速なる輸送を望むべからざる所である。此危機に對し我軍事當局者が腐敗せる國民の渦中にありながら健全なる頭腦を繼續して周到なる計畫を立て、秩序正しき實施の成績により今や敵に先んじて豫定の集中を完結せんとしてゐる。吾人は軍事當局者に對し何を以て感謝の意を表しやうか? どうしても民主主義なる一種の危険思想を流布した徒輩の頸首を斬つて、健全なる當局者の面前に詫びね



ば濟まぬ。

戰鬪の形式は既に軍事當局者の敏腕によつて遺憾なく實施されつゝある、此後の戦勝を獲るか戦敗を招くかは一に國民赤誠に歸するのみで、此神祕の力は國民平素の教養如何に依つて解せらるゝのである。之れまで國を憂ひて前途を悲觀した人が間違つてゐるか、腐敗を腐敗ならざと主張して意氣揚々とせし人が正當であるか？ 今や戦機は發展した。來るべき一大會戰の成績は確かに其若干を事實の上に説明するであらう。假令戦勝を得るとも戦鬪の成績には程度がある、戦ひの勝敗唯之れのみを以て勇敢なる軍隊と爲すことは出來ない。深く其眞髓を研究して成績の優劣を評價せねばならぬものである。

### 第五章 櫛風沐雨

#### (一) 鐵嶺附近の會戰

第三軍司令官額川大將の指揮を以て、鐵嶺——新民府の線を堅固に守備し後續部隊の來着を待ちつゝありし第三、第五軍は、七月一日以來敵の兵力頓に増加し、鐵道線路方面に於ても優に十師團を數へ得るの状況となれるを知り、爰に攻勢移轉の企圖を見合せ益々現在の陣地を強固にする事に努めた。彼我第一線の距離は三千乃至四千メートルにして、日夜小衝突の絶ゆる暇も無かつた。七月二日第十二軍團は全部輸送を終り、三日以後第四、第二軍の先頭梯團が首山堡及び鳳凰城附近に到着せりととの報に接し、軍司令官額川大將は守備軍の現狀を通報し、發展せる戦機を失する事なく直に攻勢作戰に出でんとし、各軍司令官に向つて所要の意見を交換したのである。

七月四日各軍司令官の決意纏まり、相協力して前面の敵を驅逐し、沮喪せる國民の志氣を恢復せんと直に戰鬪企圖の下に戰略上の開進を行ふこととなつた。

空は霽れた日も曇つた日も又降る日も吹く日もあつた。交通極めて困難にして砲車などは車



軸を没する程の泥濘であつたが、其等の不便は目前に發展せる好機の前には何等の故障をも持ち來すのでは無かつた。運動不便が我軍の苦痛とする處であるならば、敵も亦其不便を平等に受けることを考へてみる價值があつた。國交斷絶以來數度の小戦に於て未だ曾て勝利の縁聲を聞かない我忠勇なる戰士は、最早敵の血に餒る切つてゐた。厭でも應でも來るべき會戦には花しき大勝を博して、不安兢々たる状態に陥りある祖國の人心を癒し軍隊の名譽を恢復せんと、各の戰士は重き大山の如き責任を痛切に感じてゐたのである。

其結果總司令官八雲元帥の來着を待つまでもなく、七月四日より攻撃前進を起し長驅鐵嶺東西の線に展開した。第三軍は滿洲鐵道兩側地帯より、第四軍は第三、第五の中間地帯に急進、第五は獨立軍團の來着と共に斷然新政府を捨て、官生屯の敵に逼迫し、第二軍は遼陽より轉進して具さに困難缺乏を嘗め最右翼撫順方面に前進し、第六軍は豫想すべからざる戦況の激變に應ずる爲め奉天東北地區に集結して主將の後命を待つこととなつた。

然しながら各軍共兵力未だ完備せず目下續々戰場に集合の途中であつた。五大精力を發揮したる各軍諸團隊は五日々方漸く所望の線に開進を終り何時にても攻撃前進に應ずる如き進歩を見る事ができた。

六日午後より各軍の先頭は漸く鐵嶺東西の線に到達し茲に始めて敵の係を目撃すること、

なつた。

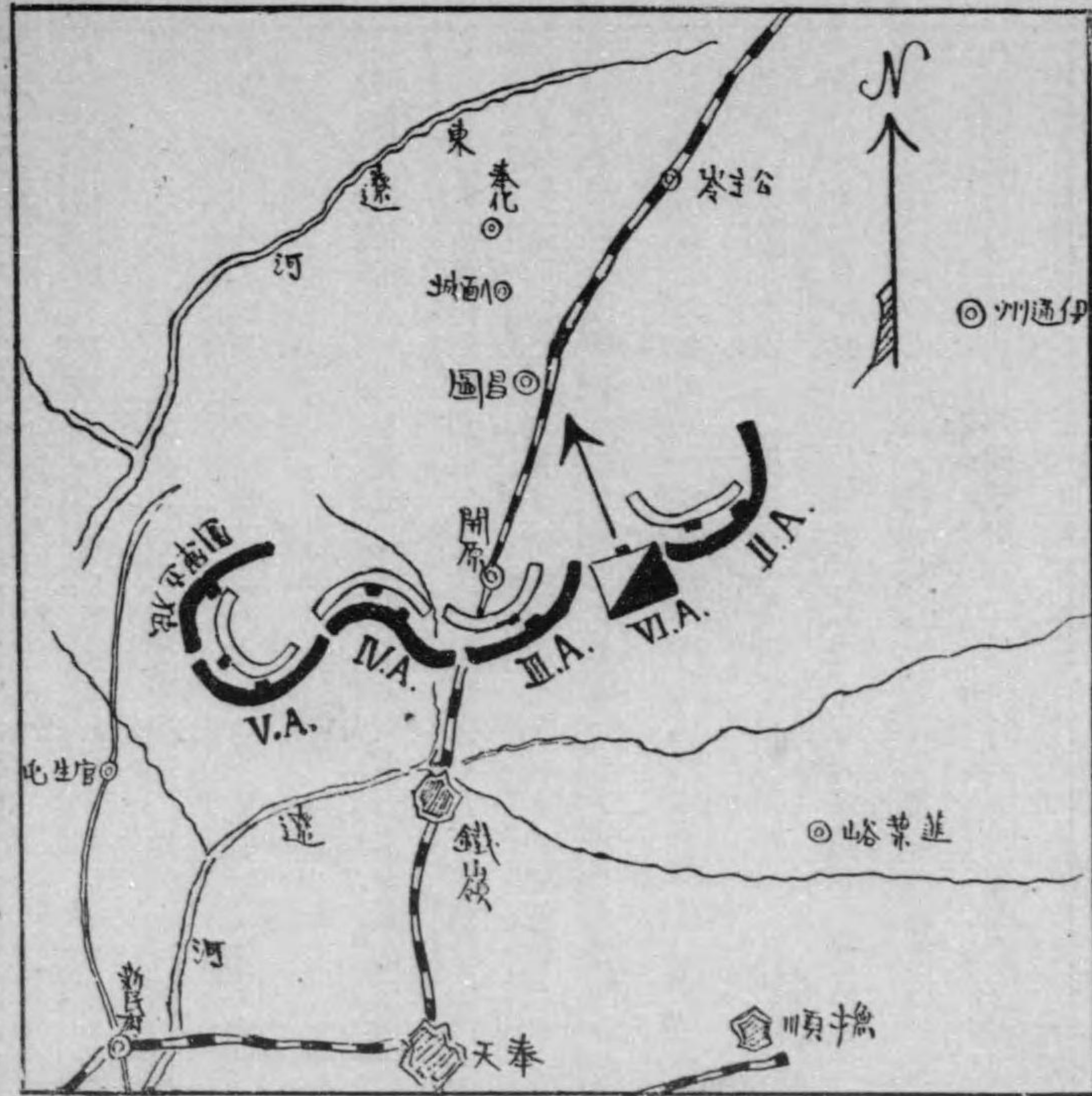
七日滿洲軍總司令官八雲元帥は幕僚を率ゐて長驅奉天に到着し茲に各軍を統一するの樞軸を作つたのである。此日午後戦闘は第五軍及第四軍の第一線部隊に由つて開始された。比較的緩慢なる遭遇を行ふたる諸團隊は險惡なる天候を冒して戦闘隊形のまま、夜を徹し、彼我前哨線上に於て絶間なき擾争を演じつゝ、未明より一齊に攻撃を開始した。

獨立軍團の運動が豫想外に迅速なりしは實に我軍の幸福とする所にして此日夕方には既に敵の最右翼に突出し我第五軍の騎兵師團を援助しつゝ、有名なるコサツク騎兵の大集團をして些々だも其功を爲し得せしめなかつた。

七月八日の戦闘に依り判斷するときは露軍の全兵力は我よりも遙に劣勢であつた。又俘虜訊問の結果敵は約四軍團にして我第三軍正面以東は其昔敗衄に敗衄を重ねたるクロバトキン將軍が司令官として老骨を戦陣に置いてゐるらしかつた。新政府正面の敵は敵の第一軍なりといふ答を得た。

第一線は近く敵と相對して猛雨の中に夜を明かし拂曉より再び攻撃前進に移つた。河水は溢れて渡河の困難は名状すべくもあらず、暗夜の架橋隊其苦辛慘澹は忠誠なる日本武士にあらずんば決して克く耐え能ふべきことではなかつた。優勢なる我軍の攻撃は朝日の昇ると共に益々

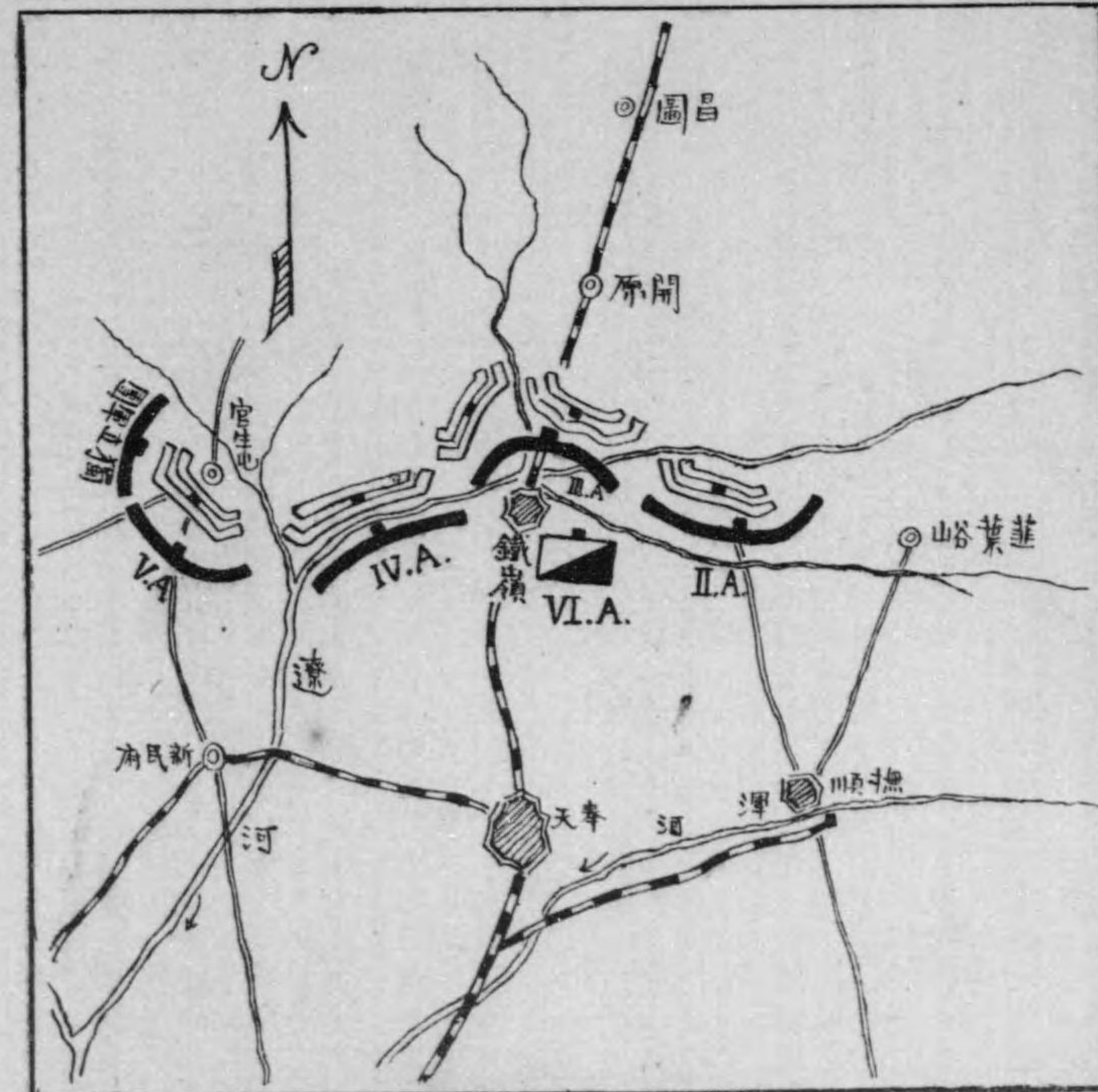




(二其) 圖略戰會近附嶺鐵

(時六後午日七十月七)

て、一途に攻撃進捗の  
 努力に専念從事した。  
 總司令官は逐次到着す  
 る第六軍を奉天より鐵  
 嶺東方地區に招致し機  
 を見て敵の中堅を突破  
 すべき企圖を達示し  
 た。かくて七月九日各  
 軍は既に其大部の兵力  
 を展開し我と殆ど同等  
 なる敵に對し猛烈なる  
 戦闘を交ゆる事となつ  
 た。展開は夜間に於て  
 も連續し翌十日遂に全  
 兵力を展開すること、



(一其) 圖略戰會近附嶺鐵

(時二後午日八月七)

猛烈となり、敵は正午  
 頃より第一線陣地を棄  
 て、後方の本陣地に撤  
 退し始めた。我軍は機  
 を逸せず之を追踵して  
 午後六時頃戦闘の第一  
 局は既に勝利の閃きを  
 望み得らるゝやうな状  
 況となつたのである。  
 滿洲軍總司令官八雲  
 元帥は七月八日夕方、  
 其司令部と共に鐵嶺に  
 到着し爰に各軍の樞軸  
 を形成し前豫定を其儘  
 推行すること、なし



なつた。十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八の八日間には彼我共に苦戦の状態に陥り第一線は距離千乃至八百の附近に停止して攻勢的散兵壕を構築し力戦苦闘——空しく時日の過ぐる所となつた。此間彼我の死傷續々増加し恐ろしき血の池地獄が演出されたのである。是に於て總司令官は斷然前企圖を執行せんとし控置せる第六軍をして豫定の如く夜襲を執行せしめた。

何れの場合にも全力を發揮せんとする我大日本帝國の忠勇男兒は、我よりも劣勢優勢に關することなく當面の敵に對して亦全力を發揮した。其結果敵の損害頗る夥しく殊に我第五軍及獨立軍團正面の敵は殆んど全滅の悲境に陥り其退路を絶たれて、西比利亞狙撃歩兵第七十一師團長カーラスキー少將は遂に我軍の捕虜となつた。戦闘の比較的閑なりしは我第二軍方面であつたが、此等は運動不便なる山地に行動したので、やる瀬なき僻地に附帶する困苦缺乏の程度は他軍に比較して決して遜色のある譯ではなかつた。

七月十七日夜半敵は遂に陣地を捨て、北方に退却を始めた。我軍は直に追撃に移り、八月二十二日の夜にかけて開原を突破し二十三日午後は昌圖東西の線に進出したのであつた。敵は殆んど潰亂して其主力は奉化附近に辛うじて停止せるもの、やうであつた。

何分にも雨季のことで連日の不衛生に、健康を害するもの亦尠くなかつた。で總司令官は爰

に追撃を中止し暫く軍隊を休養せしめんと所要の命令を發した。

此會戰に於て我軍の損害も亦決して尠少では無かつた。就中第三軍は損害過半数に達し第六軍及第五軍も亦可なり多くの犠牲を拂つたのである。俘虜の總計大約四千八百名、敵の最右翼は敵ながらも悲惨極まる損害を蒙つたのであつた。

我大本營は俘虜の取扱に關して諸種の改革を施し、今回の戦役間俘虜は絶對に内地へ護送することをやめた。朝鮮の義州及平壤に收容所を建設し食物等は全然日本兵同様とした。命令に服せぬ者は寸毫の假借なく銃殺、斬殺の如き斷乎たる處置に出づるの方針を採つた。俘虜に同情する事は何れの場合、何れの點から考究するも絶對に其所以を發見するを得なかつた。其故國際公法に抵觸せざる限り最下限の待遇法を取り遊惰逸樂は固より許すことをしなかつた。俘虜は戦敗のあの時のやうに收容所の藁を見たとき色を失ふた。中には過去の敗戦に日本内地へ收容されたものもあつた。彼等は口を揃へて訴へた。けれど食品の如きも彼等が日頃から口にする洋食なるものは絶對に給せず、而かも義州より平壤にかけて新しく開墾した田園の耕作に従事せしむるなど、彼等が衣食する若干部分の報酬的勞働を課し遊逸散樂の花園に身を置くことは塵程も許さぬ事としたのである。

翻つて日本將士が不幸にして敵の爲めに捕虜となつた場合には、直ちに『自刎せよ』と宣



告されてあつた。其上露國に對しては日本俘虜を優待することは少つとも望ましくない、殺すも可也——虐待するも可也……と交渉は既に換はされてあつた。假令平和克復しても日本人は俘虜となれる日本人を受領すべく潔しとしない、況や他國の俘虜だとして優待するの理由があるらうか？！

鐵嶺會戰までに我軍の將士にして敵の手に收容されたる若干の者は多くは露兵に抵抗して斬殺され又は舌噛み切りて自殺し、又は切腹、鐵砲腹など演じて生きて彼等の手にあるは瀕死の負傷者數名に過ぎずといふことだ。

八月二十五日午前九時滿洲軍總司令官は大本營より左の要旨の訓令を受けた。

一、第二次動員を行ひし結果九月十一日迄に貴官の指揮に屬する諸團隊左の如し、

第七軍

第八軍軍の編成は別表の如し

第九軍

二、歐露本國より波 艦隊東上の風説あり、大正〇年七月二十三日在露國間諜の報告 米國大西洋艦隊買

收の件は英獨兩國の強抗なる抗議に依りて今猶行惱みの状態にあり。

三、第一軍は七月十三日夕全部の揚陸を終り、目下南下せる敵に對し決戦を豫期しあり、

第六軍團は不日貴官の隸下に入るべし。(七月二十五日午前四時發)

是に於て總司令官は滿洲軍の活動今や好機にあるを知り、第二次動員の結果を待つて、一舉に長春の線に進出せんと、銳意作戰企劃を凝らしつゝあつた。

(二) 平面戰の極致

國交斷絶から多くの日子が経たぬ間に、我等は既に己に血の雨血の風に沐浴して黃白の生靈は異域の野に土と化した。兩人種が保有するエネルギーを發揮すべき真面目の此戰場は東亞大陸の上に選擇せられて文明史上に破格の光彩を副へねばならなくなつた。

過去の戰塵は今や靜肅なる平和の微風に宥められて老弱男女の頭腦から漸く消え去らむとしつゝある一刹那！ 陰に陽に軍備に吸々とした我と敵、他の各國は平和を口に唱へつゝ常に武裝の平和を謳歌するの奇異な現象を呈することゝなつた。

鐵嶺附近の大會戰後一舉にして昌圖東西の線を占領した我軍は、兵力休養の必要から數日間を滞陣に過ぐすことゝなつた。血氣に早る將卒は之れが大嫌ひであつた。——

第四軍司令官の雙眼鏡に旋風が砂塵を捲き揚ぐるやうな不思議な渦が前方遙なる平地上に映つた。空虚なる戰場、一望千里の大平野は、今日に限つてそよ吹く風も雲の搖るぎもないので



あつた。對陣の無聊を慰むるものは斯うした單調を破つて血でも宜い雨でも宜い我等の頭上を掠むるものが欲しい位である。

風も無く煙も無い今日の曠野に、砂塵の渦捲きは衆目を惹くには充分であつた。其故居は、す幕僚一同は腫を凝らして其光景を窺ふた。珍らしいそして奇異な現象は疑問の儘で彼我の間地帯に浮き出てゐる。

果せるかな果せるかな！ 其は彼我騎兵の衝突——格闘であつた。

距離は遠し、孰れが勝つか負けるか元より判断はつかぬ。唯クル／＼廻轉する靈肉の渦が漸時敵陣の方角へ移動するのを眺めて、アレヨ／＼と喚き叫ぶのみ。

『ほう！ 戦ひの渦といふが眞實の渦だね、僕は生れて初めて恁んな渦を見るんだ。』

『物凄いちやないか眞劍の舞踏だからね……一體如何してあんな事になつたのだらう。』

『如何してつて敵の騎兵と味方の騎兵とが衝突して今格闘最中までの事さ。』

『無論左様だが、又我軍の騎兵が拙劣を逡巡つて蕞蛇を演つたのだらう?!』

『でも、渦が漸々敵の陣地へ近寄つて往くぢやないか、屹度味方の騎兵が勝ちつゝあるのだけ、見給へあの名優の舞踏を！』

『なる程さうだ、大に敵騎を壓迫しつゝあるんだね、萬歳！』

司令官閣下も幕僚一同も喜色満面に溢れてさうして奇怪なる此現象を觀つゝも、味方の騎兵が好況に突進するものと断定をつけた。其故不安疑懼の霧霧は全く消えて相互ひに交ゆる談話も今や勝利の歡笑と變じて來た。

其時！ 腕を胸に組んで凝乎と腫を据ゑてゐた參謀副長の藤井少將は、今まで無言の唇を噛み締めてゐたが弱輩の無責任な批評を片腹痛しとやうに屹つと四邊を見廻して、

『さて／＼つ、戰場に經驗の乏しい君達が勝手な判断を付けるのは不都合だ、味方の騎兵が何うして勝ちつゝある？ 我騎兵はやつつけられつゝあるぢやないか、日本人種の血を受けた人間なら目玉を据ゑて熱く視るが可い、喜ぶどころの騒ぎぢやない哩!!』

大喝一聲凜々乎とした副長は、やおら彼方に向き直つて雙眼鏡を取り上げた。

格闘の渦は廻轉のまゝ漸次敵陣へ近寄つて往つた。藤井少將の一言は獻身殉國の戰士群に向つて社會主義を説いた程の刺戟と憎惡反感を醸さしめた。

『ふむッ、藤井閣下は戰場を呪ふ奴だ、祖國を呪詛する惡魔の搖籃だ、不吉不祥の言動を弄して我軍にケチを附けるのだ、不都合千萬ぢやないか……やつつけやうかッ?!』



氣骨稜々勇肌の青年參謀は、憤慨の極鐵拳を固めて今にも飛び蒐らうとしてゐる。  
『おのれッ、あれが終つて我騎兵が勝つたことなら胴てッ腹蹴破つて呉れるぞッ。』  
『祖國五千萬の同胞に代つて俺が天誅を加へてやる。』  
かう意氣込む副官も

ゐた。

が、參謀副長は平然自若として、『莫迦共が！』と胸の中に繰り返したのみ。

此一瞬間！ 東方

高地の蔭から我騎兵の一集團が疾風電\*

なるかな！ 渦巻はグラ〜と解けて平地は見る間に平穩なる水面のやう……長槍を提げたたる鬚蓬々の白人は悠々閑々として彼等の陣地に引揚げた。砂塵の治まつた格闘の跡には黒珠のやうな物體が點々と横つて、主なき狂奔馬が蜘蛛の子を散らした如く右往左往してゐる：



平面的戰の極度

\* 雷の如く其渦目蒐けて突進した。勝つてゐても負けてゐても今此新銳な増援を得た渦中の我騎兵は、相呼應して哥薩克を囊叩きにするには充分であつた。

……其の足波は廻轉の緩やかなる蛇足を受けて今もグル〜……半徑は漸次に増大しつゝあつた。

『それ見ろ、我軍が何處に勝つてゐるかッ。』  
と少將は再び叫んだ。

『わかるもんか、孰らが負けたか勝つたか報告に接しなきやわからないッ。』  
血氣の幕僚は半信半疑の狀態にありつゝも猶かうした負惜しみをいつてゐた。

暫くすると、色蒼ざめて血だらけになつた黒田中尉が軍司令官の召に應じて司令部の帷に入つた。彼は實に渦巻の主人公である。

其物語に一同慄然として襟を掻き合はした。

『雙方とも兵力は同じく一中隊でありました、が、衝突力の微弱であつた爲め知らず〜の裡に格闘が始まつて中隊は敵の爲めに取巻かれた。中隊長と小隊長の四人とは、いつの間にか圓の中心に啣へ込まれて抜きも差しもならぬ破目に陥つた。小官の目には味方の兵卒が哥薩克の槍玉に揚げられては馬から落ちるのばかりが映つて、敵の斃れる所は少とも見えませんでした。中隊長も小隊長も圓の中心にあつては氣のみ苛ら慌つても日本刀を揮ることさへも出来ないか



ら一刻も早く外へ出やうとしましたが、気がついて見ると圓は中隊長を中心としてグルグル廻り始めた。敵騎は其外周を取圍んで中心近く壓縮された味方の騎兵を滅多突きに突いたので

す。恰度蛇に巻き付かれたやうなものでした。『かうしてギユツ〜と締めつけられるばかりでした。』と。手真似をしつゝ、黒田中尉は愁然として語り續けた。

『見ると敵の中隊長は四騎の護衛騎兵に圍繞されて泰然悠悠と馬を常歩に……渦の廻轉方向と反對に、渦の中を覗いては斥りに部下を督勵してゐる。其森嚴さ加減といつたら敵ながらも感服の外は無い。翻つて味方の中隊長は如何か？ 斯の通りに渦の中心に立つて隙もあらば外周に逸出して、憎さも憎い敵の中隊長を一刀の下に斬り捨て、呉れんと心のみは慌るけれど、奈何せうたつて奈何することもできなかつた。』

渦の速度は時々刻々増して来る、馬蹄に踏まるゝ死傷者空馬の嘶き！ 噫！ 今更何とも言ひやうが無い。渦は次第〜に敵の陣地に近づきだした。これが敵の中隊長の手練である、結局味方の中隊長は知らず〜の裡に敵の爪系で手繰り寄せられてゐるのだ。

中隊長も小隊長も思ひは同じ……一時一刻も渦の中心から通れ出て戦況を盛返さねばならぬ。あの癩に觸る敵の中隊長を思ふ存分に斬つてやらねばならぬ。渦の容積は餘程小さくなつ

た。其れは死傷者の爲めに兵員が減じたのと、彼我が身體が密接の度を高めたからである。小官の馬は中隊長の馬を圍むやうに小さな圓運動をしてゐた。他の三人の小隊長も同じく意味もなく馬を廻轉せしめた。

さうして間もなく一人斃れ二人斃れ……小官が今の状態を保持してゐる間に少尉の乗馬が二頭主なきまゝ、グルグル廻つてゐた。二少尉は憐れ馬足に横つて了つたのであつた。

此頃、哥薩克の兵卒も大分渦の中に混じつて來たので日本刀で斬られた白人もポツ〜目に入るやうになつた。が何たる悲惨であらう小官は遂に一人坊つちとなつた。』

『小官は日本刀を真向に揮りかざして當るを幸ひに斬つて棄てやうと、廻る騎兵の隙を目懸けてゐた。不思議にも駒の運動が緩慢に陥り、空馬に懸け隔てられて軍刀を使ふに由もなかつた。懊しさ、不意と振顧つて中隊長を見た。中隊長は其處にゐなかつた！』

中隊長の乗馬は空のまゝに私の側を離れ兼ねてゐた。あまりの心細さに生残りの小隊長を見た。然しながら其處には一人の姿も既に見る事はできなかつた。小官は知らぬ間に渦の中央に捲き込まれたのである。

最早、頼みの綱も切れ果て、全責任は全速力を以て小官の身の上に降りかゝつた。小官は再



び敵の隊長を見た。彼は依然森嚴に部下を督勵してゐる。とすると捨鉢の情がムラ／＼と發つて此恐ろしい物凄い渦を斬り破つて、惡鬼となつても何うでも斯うでも彼奴を殺さねば死なれない、今更戦が勝つとか負けとかそんな大局の事を考へて居る暇はない場合である。唯彼奴の眞向を唐竹割にして呉れないでは成佛が出来ぬ。然しながら其れも駄目であつた。て私は聲を限りに部下に向つて敵の隊長を斬れと喚めいた。けれど／＼其聲は部下の耳には達せられず其上小官の咽喉は乾きにコビリ付いて居ました。』……

『聲を掛けても無益な今の場合、唯小官の目指す所は彼の隊長にある、彼奴を殺さへすれば、小官は死ぬ前に甘露を飲んだやうにも、好きな／＼林檎を食つたやうにも價するのだ。最早部下も要らぬ、負けても可い、血に渴いたこの咽喉を濕して後に笑ふて死ぬのだ。』

最早斯うなれば總てが自棄だ！

小官は目を瞑ぶつて駒に思ふ存分の拍車を入れた、駒は驚いて四邊の乗馬群に突進した。目を開くと直ぐ横手に哥薩克の髯面が目を刮いて居る。おのれつ……と言ひさま彼奴の横面を覗いて柄も通れと突き刺した。狙ひは過たず、上顎から左耳朶の下まで孔が明いた。其時彼奴の上齒に觸れて刀刃は鋸の齒のやうになつた。そんな事は其際に氣が付いたのちや無い。

紅椿の瓣のやうにブラリツとぶら下つた唇肉を見たとき始めて本心に立返り。屹と隊長を睨んだ、隊長は相變らず徐々と駒を歩ませて居る。

嗚呼、小官の駒は再び渦の運動に従つて走つて居た。外股がスラヴの外股と擦れ合ふた事もあつた。一しきり飛揚する砂塵に目までが其作用を失つて、廻轉の進路にある間は彼我共に白兵を揮ふに由も無かつた。』……

『不思議にも一傷を蒙らず、折もあらば圏外に逸出せうと慌せる此一刹那！ 渦の廻轉は漸次速度を弛めて哥薩克と味方との境界線が劃然見え初めた。と氣が付いて目指す隊長を探したら、彼奴は圏外數十メートルの地點に位置を占めて銳意渦中にある部下の拾集に努めて居る。而して數十に近い彼の部下に依つて既に／＼嚴重に守護されて居る。是れを見た小官は唯呆然自失のみ。目の前に見ゆる兵卒の總ては皆生残りの味方のみであつた。』

此時我騎兵聯隊が救助に來たのである、彼は隊伍を整へて肅々と北方の陣地に退いて、戰場は急に寂寥となつた。後には灰色の地上に朱に染まつて戦士が横はつて居る、そして渦は名残も留めず消えて仕舞つた。

六十騎足らずの部下と小官とが血だらけになつて残つて居る、敵は悠々と彼等の陣地指して



引揚げつゝある。小官の本能の意識が今始めて此光景を正當に見たのである。残念ッ!!! 斯う

叫んで單騎、哥薩克目蒐けて乗り出したが其れも無益であつた。唯七騎の死傷者其れは哥薩克に依つて取遣されたるスラヴの騎兵であつた。多くの死傷者は乗馬と乗馬との間に釣るされたる擔架によつて、嬉しい可憐しい彼等の本城に搬ばれた。野邊には味方の死者の傷者四十騎ばかり……血を流して斃れて居る。……」

黒田中尉は右の如く語り畢つてホツと息をついた。  
『どうも何とも面目が御座いませぬ!』  
これを最後の言葉として首垂れた。

聽いて居た幕僚一同は呆れて了つた。さうして各自の淺薄な推斷と高言とを深く悔ひた。彼等は參謀副長に詫びを言はねばならぬ。  
『何うだ、コサツクだよ君ッ、コサツクだよ、餘り安く買つちや飛んだ不覺を招ぐぞッ、歴史は争はれぬものだらう。』

と少將が言つた。  
『……青年參謀は無言。』

『驚いたらう?!』

と少將は再び願て罵るやうに彼等を見た。一同は水を打つたやうに靜肅であつた。

『ハハ……、腐つても鯛だ、奈翁一世を苦しめた哥薩克のもの……歴史を無視する君等では無いとばかり思つて居たが實際吾輩は君達の不用意なのに寧ろ失望して居る。戦勝を呪ふとか社會主義云々とか大に憤慨したやうだが負けたものは勝らだとは言へないだらうぢやないか、實地が彼の通りなら最早詮方があるまい。空威張りは近頃憤むが宜からう。』

『どうも……一本参りました。』

と如才のない八方睨みの參謀が其場を濁らさうとした。

『どうだ、暑い〜と愚痴ばかり零したが、今の談を聽いて今日は少つとは涼しくなつたらう?! ……ハ……、肌に粟が生えた筈ぢや……』

北滿の微風は濕氣を帯びて冷々と戦士の肌を嘗めて居た。

(三) 第二次動員

大正〇年七月十九日鐵嶺大會戰の捷報祖國に傳はるや、國民は歡喜極まりて嬉し泣きに泣いた。提灯行列、戦勝祝賀會など催されて數日間悲報又悲報を重ねし鬱憤が驟雨の後の空のやう



に間もなく霽て旱田に緑雨のやうな心地に狂喜が漲つた。  
我大元帥陛下は此機逸すべからずと思召し、爰に第三、第四軍團に動員を令し給ふた。新編成の第十三、第十四、第十五の三軍團及後備師團若干を合し左の通りの戦闘序列を命じ給ふたのである。

★第七軍戦闘序列

- 軍司令官 陸軍大將子爵 大伴直高
  - 軍參謀長 中將男爵 篠井重時
  - 參謀副長 少將 佐々田新八
  - 第三軍團
  - 軍團長 中將男爵 高木喜久次
  - 獨立軍團 (目下蒙古地方に作戦中)
  - 騎兵第十一旅團
  - 歩兵 五十四大隊
  - 騎兵 二十五中隊
  - 野砲兵 三十九中隊(三三四門)
  - 山砲兵 六中隊(三六門)
  - 工兵 十六中隊 (飛行艇隊を含む)
  - 輜重兵 十八中隊
- 合計

○戦闘員 大約七萬五千人

★第八軍戦闘序列

- 軍司令官 陸軍大將伯爵 奥村猛一郎
  - 軍參謀長 中將 有地百々太
  - 參謀副長 少將 鹿村剛
  - 第四軍團
  - 軍團長 中將男爵 竹川嵐好
  - 第十三軍團
  - 軍團長 中將子爵 山浦婆無治
  - 後備第十三師團
  - 師團長 中將男爵 原吉次郎
  - 歩兵 六十大隊
  - 騎兵 三十六中隊
  - 野砲兵 三十中隊(百八〇門)
  - 山砲兵 六中隊(三六門)
  - 工兵 十五中隊
  - 輜重兵 二十中隊
- 合計

○戦闘員 大約八萬人

(注) 騎兵第十一旅團及各師團騎兵半部は合併して騎兵師團を編成す  
(師團長中將栗地綾男、軍司令官の直轄とす)



(注)〔騎兵第三、第九旅團及各師團の騎兵半部は集成して師團を編成〕  
〔師團長中將盛岡毅、軍司令官直轄〕

★第九軍戰團序列

軍司令官 陸軍大將 ▲▲▲▲▲▲殿下  
 軍參謀長 中將男爵 品川太吉郎  
 參謀副長 少將 吉井 猛  
 第十四軍團  
 軍團長 中將男爵 齋藤 益男  
 第十五軍團  
 軍團長 中將侯爵 松平 久直  
 後備第十四師團  
 師團長 中將男爵 福原 元義

合計  
 歩兵 六十大隊  
 騎兵 二十八中隊  
 野砲兵 五十四中隊(三二四門)  
 重砲兵 十二中隊(七二門)  
 工兵 十五中隊  
 輜重兵 二十中隊

○戰團員大約 八萬三千人

(注)〔騎兵旅團及其他を以て師團を編成すること前に同じ〕  
〔師團長中將男爵山坂陽春〕

(以上)

第二次動員の結果滿洲軍總司令官の隸下に入るべき兵力左の如し。

歩兵 百七十四大隊(既に滿洲に在るもの三〇大隊を含む)  
 騎兵 八十九中隊  
 野砲兵 百二十三中隊(七三八門)  
 山砲兵 十二中隊(七二門)  
 重砲兵 十二中隊(七二門)  
 工兵 四十六中隊  
 輜重兵 五十八中隊

戰團員 二十三萬八千人

但此中より在滿洲獨立軍團の兵力を控除する時は、新増加の戰團員は

238,000 - 40,000 = 198,000

十九萬八千人

となる譯である。鐵嶺附近の大會議に於て受けたる損害を算入しないならば、數日の後滿洲軍總司令官の隸下に現存する第一線兵力は、

551,000 + 198,000 = 749,000



全員 七十四萬九千人

に上るのである。

壯なる哉!!!

第二次動員の結果我が常備部隊は全部戦場に輸送さるゝこととなり、今は漸く留守隊の補充力を養成して後、更に新編成の増援軍を産み出すより他はないのであつた。大元帥陛下は續いて、第十六、第十七軍團の新編成に御思召があるらしかつた。

前に數々掲げた戦時人員は直に第一線に用ふべき實兵力を示すものにして、各軍には夫々兵站部ありて其等の守備兵、補助輸卒隊等後方勤務に忙事する祖國の生靈を合算するときは優に二百萬に上るべく、今後戦勝を續けて兵站線路の延長するに隨ひ、戦線の擴張せらるゝに隨ひて益々後方勤務の人員も増加すべきは勿論である。

此戦争に於て歐米諸國は争ふて觀戰武官の派遣を申出たのであるが、英、獨、伊、埃の四箇國を除く外絶對に拒絶した。殊に佛國及米國に對しては言下に之を退けたる我大日本帝國の意氣は天晴れ見事なものであつた。従軍を許されたる外國武官は各軍に分屬することとなり、舊來彼等の本國に通報する信書に對し嚴重なる監視を行ひしを罷め、絶對に其自由を解放してやつた。此に於て大日本帝國の如何に戦勝に關する強き決心と自信とを示したるかが窺はれる

である！。

(四) 第一軍の捷戦

優勢なる敵の攻撃を蒙りて城津附近の陣地に引退し銳意恢復の時機を待ちつゝ、ありし我第六軍團は、七月三日以來第一軍の上陸と共に漸次其兵力を増加し元山津以北の地區には續々我兵の充満するの状況となり、第一軍司令官の意見により七月六日第十四師團を交代して滿洲の戰場に轉送し、該地方面の戦勢に遺憾なからしめんとした。七月七日早朝第十三師團も亦交代して元山津に發送せられんとするに際し偶然にも敵の攻勢的動作に會ひ、爰に大激戦を惹起するに至つたのである。

當時城津の陣地に來着せる我軍兵力は、第一軍中第一軍團の第二十四師團及獨立徒歩砲兵旅團を除くのみにして、戰場にある兵力實員は優に十二萬を計上し(第十三師團を合し)、第一軍は海岸方面より、第十三師團は左翼山地より猛烈なる攻勢移轉を行つたのであつた。

七月七日午後五時、山脈の彼方に没する蒼然たる暮夕を望みつゝ、全軍は大突撃に移り、格闘又格闘を重ねたる揚句、同日夜半該陣地附近にある堅固なる敵陣地を奪取して其夜は城津北方の地區に露營し、翌八日強雨を冒して大追撃を行ふた。



七月九、十兩日に渡り雄基、會寧附近に於て一大激戦を演じたが、兵力遙かに優勢にして且つ勝利に倣るたる日本軍は如何なる犠牲を拂ふも意に介せず猛烈果敢殆んど鬼神の如く國境は一面に焦熱地獄と化したのであつた。洋々たる日本海を右に眺め、滔々と流るゝ豆満江を前に控へ、鬱蒼巍々と聳ゆる老爺嶺山脈を左にして此處を先途と奮撃突戦した。

優勢なる我砲兵は豆満江左岸の地區を砲撃して敵をして其退路に夥大の不安を來さしめた。然しながら敵の後方には鹽浦斯德の要塞がある、彼等は戦路上なるべく遠く日本軍を拒止して要塞の運命を一日だも長く保たんとするのは至當の事であつた。けれど、精銳なる我第一軍の攻撃にはさしもの白人——スラヴの能く支持し得る所とならず、無数の橋梁を破壊しつゝ、豆満江の左岸に退走して此處に停止することゝなつた。第一軍の騎兵師團は會寧北方に於て江を渡り遠く敵の右翼に進出して敵の哥克薩騎兵團と相對峙することゝなつた。

豆満江對岸の敵陣地は半永久的築城にして一瞥大要塞の如き觀がある、第一軍は七月十四日第十三師團を後退せしめたる後一舉にして此強塞を粉塵せんとせしも目下大雨霖りに至り河水増嵩して架橋其他の諸動作意の如くならず、少時滯陣して雨の霽るゝを待ち河水の減低するを見て斷然國境を越えんと銳意其準備に怠はなかつた。

此戦闘に於ては地形殊に險惡に、山川錯雜し彼我共多大なる不便を感じ局地々々の混戦は到

る處に演出せられ、格闘殺戮坐に残酷を極めた。殊に山地に於て有力なる我山砲隊は豫想外の大效力を現はし神出鬼沒敵をして端睨すること能はざらしめたのである。

我第二艦隊の一部は城津沖より精銳なる長加農の爆裂榴彈を發射して敵の背後を脅かし直接間接に陸戦を援助して、さしにも要害を占めた敵をして僅々六時間の停止のみを許すことゝなつた譯であつた。敵の陸軍は浦鹽要塞守備軍たる所謂城外支隊であつた。西比利亞鐵道及北海岸の安全を自信して城を空虚として北韓方面に出動したものでらしい。

此戦闘に於ても彼我飛行艇隊の衝突を見たるも、巨木林立する山地の事故、悲痛なる墜落破壊の光景が續々と演出せられ、殊に我三八式野砲及大正式自働砲は巧に之れを撃破し得たのであつた。七月八日午後三時頃敵の飛行艇一隻突然天空に現出して、猛烈なる爆裂彈を我第一師團司令部附近に投下し、參謀長井街大佐、副官清水大尉は無残にも戦死を遂げた。其他下士卒の戦死負傷頗る多く司令部は一時大混雜を極めた。敵飛行艇は悠々と方角を北に廻して約六百メートルの高度に疾風の如く退却したが、雄翼山頂に布陣してゐた我山砲隊の射撃する所となり千仞の谷間に粉碎されて墜ちて來た。

國境の對陣に於ては彼我共に飛行艇隊の襲撃を慮り地中を掘つて、空中の惡魔を豫防することに腐心してゐた。爾來元山津、城津、雄基に通ずる鐵道線路の擴張、道路の修繕等に専心



努力し、雄基灣を以て第一、第二艦隊の根據地と爲すべく確固たる據點を構成したのである。

七月十七日聯合艦隊司令長官宮殿下御着艦遊ばされ同地にある陸海軍は爰に祝意を表して皇禮砲を發射した。目下砲艦十數隻豆満江口に到着し將來渡河の爲め第一軍を援助すべく吃水を利用せんとしてゐる。江水頗る奔流して國境の山脈今猶雨霧に鎖される。滔々と流るゝ江水の畔に晴れたり曇つたり吹いたり風いたりする北韓の風雲は、暑いゝ三伏の夏を透して美しいものも嬉しいものも悉く此現實の世から取除いて、世は一面に血の泥濘……最早紫も無ければ緑も無い、紅いゝ毒々しい色彩のみとなつてゐる。人間も皆血に染まつて祖國の女性も口を揃へて、紅い花がね、紅い花がね……と唄ふてゐる。人の笑ひも血に喝したやうな笑ひである。我等の投ずる影までが紅い、かうして東大陸の隅から血に彩られてだんゝ其色が擴がつて行く、遂には世界全體が眞紅になつて仕舞ふのだ。

嗚呼異國の野邊も秋風が吹き初めた。糸のやうな小雨のまにゝ秋の色が見える、夜は蟲が啼く人が呻めく、凋落の秋はいつもゝ戰場の背景となつた。熱狂せる國民も今は立秋の空を眺めて思ひを西に馳するのであらう。戰場の勇士は戀しいゝ思ひを浮べて東の方山紫水明の母國を考へてゐる。

今や陸戦は一大勝利を得て、異人を國外に驅逐し得た。而も大陸の生靈は時々刻々殖えて戦

線を延長し、北へゝと進んで行く其雄々しき姿よ、いつ見ても勇ましきは我戰場の勇士なるよ!!

スバルタ武士は戰鬥の猛烈なることを形容して次の如く言ふた。

『來るわゝ往くわゝ空飛ぶ矢の蔭で太陽の光も洩れて來ぬ、地球は暗黒となつた。』と。

日本と大陸との間を往復する船舶を見よ、海の波が見えぬではないか?! 異人は異人らしい事をいふた。けれどゝ地上が血の泥濘になつた事をも思ふて貫はねばならぬ。

七月二十日第二十四師團及獨立徒歩砲兵旅團も國境に到着し、其夕方迄に重砲陣地の布陣を終り、江を越えて我二十八珊知榴彈が轟々の響きと共に敵陣地の頭上に爆裂し始めた。二十六珊の加農は射程を延伸して露領の市街を處嫌はず砲撃し始めた。雨と風とに人の耳目を疲らした此一日間、國境は再び不活物の鳴動に地獄の世が演出された。

(五) 義勇軍のカムチャツカ上陸

我義勇艦隊——梅香丸(大正〇年再び建造)、春雨、吹雪、明治、桃山、義勇(旗艦)黒雲、櫻木、山風の九隻は義勇兵凡そ一萬八千餘を載せて、七月二十三日突然カムチャツカ島を砲撃した。艦隊の總噸數十四萬三千噸、提督は後備海軍少將梨川實之進にして、二十四未明より陸戦隊の上



陸を終へ、一舉にして同島を我有にしてしまった。有繋の寒地も今は夏の盛りである、恰も内地の春の景色、山々の木々は若葉青葉を吐き出してゐた。在千島の漁人共は手に魚鉾を携へて、陸戦隊の員に加はらんと哀願したが、『其れは後の事』といつて本務の漁業に専心勉勵せしめた。民は皆其途に安んじて公々然と遠漁の舟を乗り出した。陸戦隊は勢に乗じて北へ々と進み進んだ。

露領カムチャツカ人は此舉を以て、

『海賊。』

と言つた。

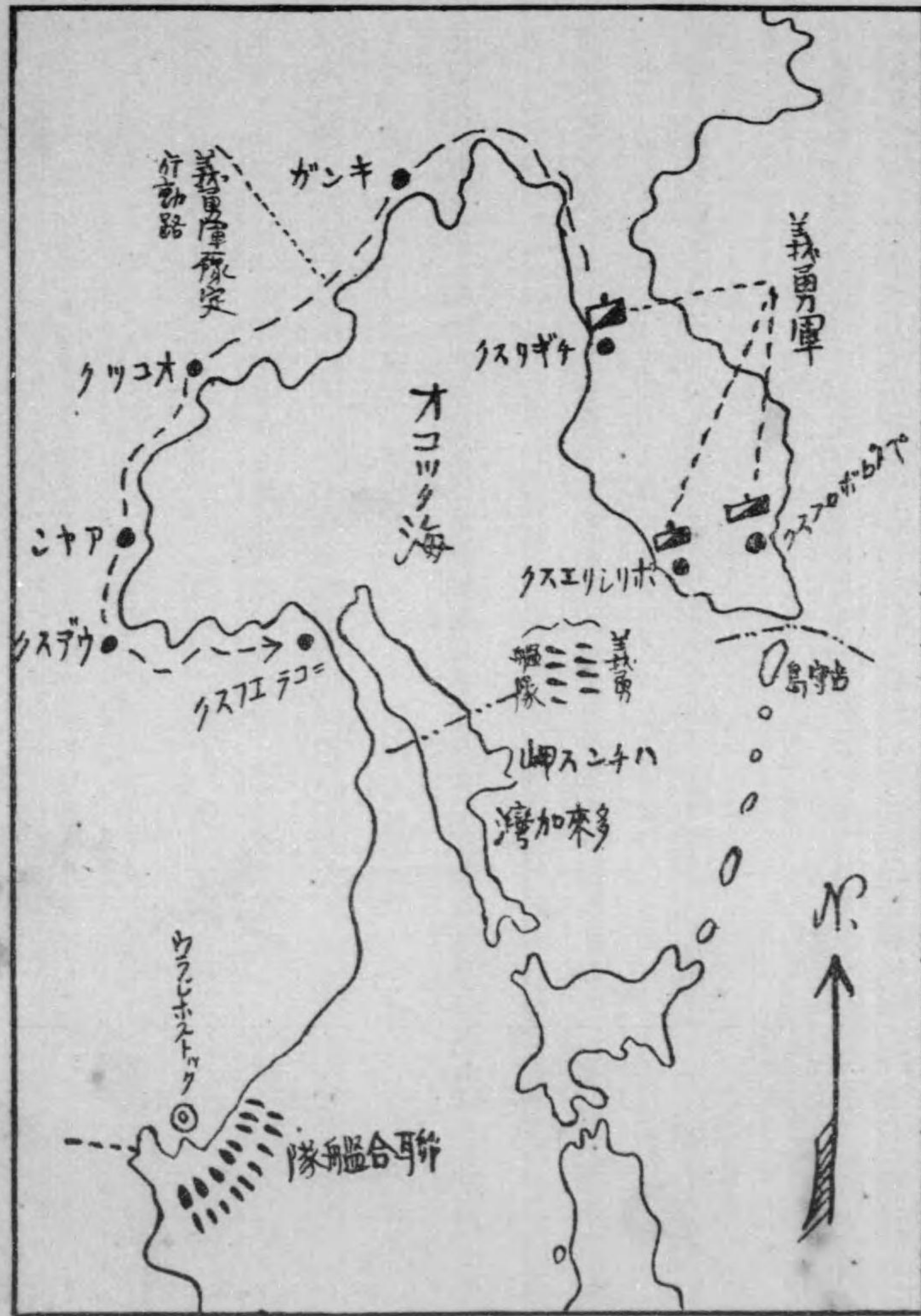
無論のこと、日本帝國が其昔支那の西南岸に出没して『和寇』と恐れられた事を知らぬか、況や國交斷絶した今日海賊も強盜もあつたものでは無い、手當り次第砲撃して日本の領土を擴めるのに何の苦情があるか、其れが口惜しいならどしどし蒐つて來い。日本人は刃に血塗らずして他國を領有することは寧ろ潔しとしないのだ。けれど抵抗する何者も無ければ詮なき事、不本意ながら黙つて有難く頂戴するまでだ。海賊と思ふなら海賊を撃攘するが可い、今更海賊呼ばはりしたつて何處の國が裁判して呉れるか、佛國か米國か、否々世界は皆亂れてゐる。佛も米も應てはこの渦中に葬られて世界の地圖から除かれるのを知らぬか、淺憊な奴ぢや……

五十年も七十年も以前に溯つて、樺太や千島問題に屈辱を重ねた日露の交渉を考へて見るが可い、あの時悲憤の思ひをした日本の心を今日露國がみるのだ。天の公道だ天罰だ。北海に生育する海獸、海魚を永久に日本の有となすには、北海に生育する白人を驅逐しなればならぬ、白人と海の動物とは絶對に兩立することの出来ない今日では無いか?! 日本義勇艦隊が應てベーリング海峡を通過して東西兩半球を白眼むまでに、白人は西と東に遁逃し置かぬと由々しき生命問題だ。

七月二十五日艦隊の内五隻は、旗艦義勇の指導に依り樺太附近に來るべき我第三艦隊の一部に連絡すべく發航した。第三艦隊の二等巡洋艦四隻は七月二十四日鎮海湾を出帆して樺太陸戦を援助すべく北進したのであつた。同日午後五時頃幽かに砲聲を耳にしつゝ義勇艦隊は全速力を出した。海上浪荒く風烈しく降雨しきりであつた。

陸戦隊は二十四日少數の守備兵を驅逐して未知の地深く踏み込んだ。高山今猶綿の如き雪を戴き唐突たる其形状はさすがに異國の感を深うするのであつた。不明なる地名、川名を幾度か通り越えて、恐ろしく物凄き大森林の入口に到着した。熊、狼などの猛獸が牙を刮きつゝ北の方へ走り去つた。





(況狀頃日六廿月七) 圖略區域動活軍勇義

上陸軍は七月二十六日ポリシリエスクに到着し一部隊はペトロプロブスクに派して東北の沿岸を警備せしめ、主力はポリシリエスクを根據地として南岸に沿ひチギリスクに向ひ前進を起した。艦隊はオコツク海上に出て、我漁民の保護に任じ同海岸にある諸港に對して其れとなく示威的の運動を爲すことに決した。

ポリシリエスクを出發したる義勇軍は險を冒して七月三十日チギリスクを占領し該半島は遂に我帝國の有に歸して仕舞つた。此軍は所要の守備兵を殘置したる後オコツク海濱に沿ふてキング、オコツク、アヤン、ウデスク、ニコラエフスクに向ひ大遠征を試むる企圖を有し、此行進と共に我義勇艦隊の二隻は彼等の安全を確保すべく航行する筈となつた。

半島のペトロプロブスクとポリシリエスク間には大精力を以て交通路を開設すべく、北海道千島の無職業者は喜んで其募集に應ずることとなつた。

北海の帝國漁民は徒に戰爭熱に浮さるゝことなく却つてより以上の國利を提供すべく夏の靜穩なる海上を利用して、太平洋——オコツク海上に木の葉の如き漁舟を漕ぎ出し、一日一刻も國家の富といふことを忘れずに各持てる無限大の職業にいそしむべきを訓諭されもし、彼等も亦其れを熟く了解してゐたのである。

義勇艦隊の内五隻は、七月二十五日ポリシリエスクを抜錨して樺太に向つたが、同日午後五



時頃西南方に當つて微に砲聲を聞いた。これは其翌二十六日ハチンス岬の沖合二百哩の附近に於て我第三艦隊に屬する二等巡洋艦笠置に出會して詳細なる通報に接して始めて嬉しく了解された。

『昨二十五日夕方露國陸軍を乗せたる運送船二隻は一隻の軍艦に護衛せられつゝカムチャツカ半島に向け進航中なるを發見し直に砲撃、運送船二隻は直に撃沈し、軍艦サツシユルツケ（四千七百噸巡洋艦）は捕獲して、今朝多來加灣に送航せしめたり。』

との快報を得た。一同萬歳を叫んだ。  
義勇艦隊と第三艦隊の一部とは多來加灣に於て相合し、樺太北征軍に協力しつゝアレキサンドロフスクの攻撃に従事すべく豫定された。樺太を全然我有となし大陸との間なる間宮海峡の海上權を獲得して、將來浦鹽要塞の攻圍軍の背面支隊を上陸せしむることを物色する任務であつた。如何に大國たる露西亞も極東而かもオコツク沿岸に迄有力な防備を講ずる暇もなく、此附近の住民は戦々競々として其途に安んずることを得ず、家具を負ふて西方の山間僻地に避難するものも多かつた。

此義勇軍は全部學生より成立し、國難の爲めには些細なる學問よりも戦争が大の好物として勇み出でたる若者が日頃から團隊を作つて、國交の斷絶頃には既に業に千島附近に出没してゐ

たのであつた。

(六) 極北の快報

樺太の守備軍は大正〇年四月左の如く改正されてあつた。(大正二年四月陸軍整理の結果一度撤退されしも更に改革せられて再設されたのである)

守備隊司令部(司令官中將大井川好春)

歩兵二大隊

山砲一中隊

騎兵一中隊

工兵一中隊

敷香

歩兵一大隊

山砲一中隊

豊原

歩兵一大隊(二中隊缺)

工兵一中隊(乘馬工兵)

眞岡

歩兵二中隊

重砲兵二中隊



步兵	四大隊
騎兵	一中隊
合計	山砲 二中隊(一二門)
	重砲 二中隊(一二門)
工兵	二中隊

○戰鬥員大約五千人。(本島守備兵は國交斷絶前其中數以上)の臨時増員が行はれたるものである)

之れに對する露國の守備兵は、アレキサンドロフスクに步兵二大隊、工兵一中隊、山砲兵一中隊(八門)を有するのみ。

司令官大井川中將は内地より守備兵の増援を仰ぐ事は到底胸算すべくもならず、且つ我が戰鬥力の敵に比して稍優勢なるを機とし、斷然北征の壯舉に着手して帝國の領土に一段の光彩を加へんと、七月二十五日早朝――

- 步兵 三大隊(殘一大隊は所要の守備として各地に分置す)
- 騎兵 一中隊
- 山砲 二中隊
- 工兵 二中隊

を率ゐて名好を出發しアレキサンドロフスクを目標として肅々として殺伐の途に就いた。此日

ノシヤ附近に宿營し、黄昏頃第三艦隊の一部より急電に接したのである。急電の要旨……

「海軍は来る二十七日以後間宮海峡に進出して貴軍を援助し得る見込みなり。」是に於て司令官は翌二十六日國境に達し此處に守備線を張り艦隊の來着を待つ事に決し騎兵を遠くアレキサンドロフスク方面に派遣して敵情の搜索を爲さしむ。二十六日午後八時該騎兵隊長の報告に依れば、

「ピリウオには敵の歩兵約五百、山砲三四門あり。」と、ピリウオは國境に近き一都邑である。司令官は此機會逸すべからずと爲し、翌二十七日ピリウオに向ひ前進を起す。

午前十一時我が先遣部隊は既に敵に衝突し一舉にして之を撃攘した。其日は此地附近に宿營して愈艦隊の來着を待つこととなし、アレキサンドロフスクに對し嚴重なる警戒を爲す。同夜騎兵隊長の報告あり。

「アレキサンドロフスクの守備兵は目下其南方ツエ附近に於て、防禦陣地構成中なり。」

同時に我が艦隊が間宮海峡を北進中なるの快報に接し愈明二十八日敵の大都邑に向つて攻撃前進すべく決心し、所要の命令を下せり。

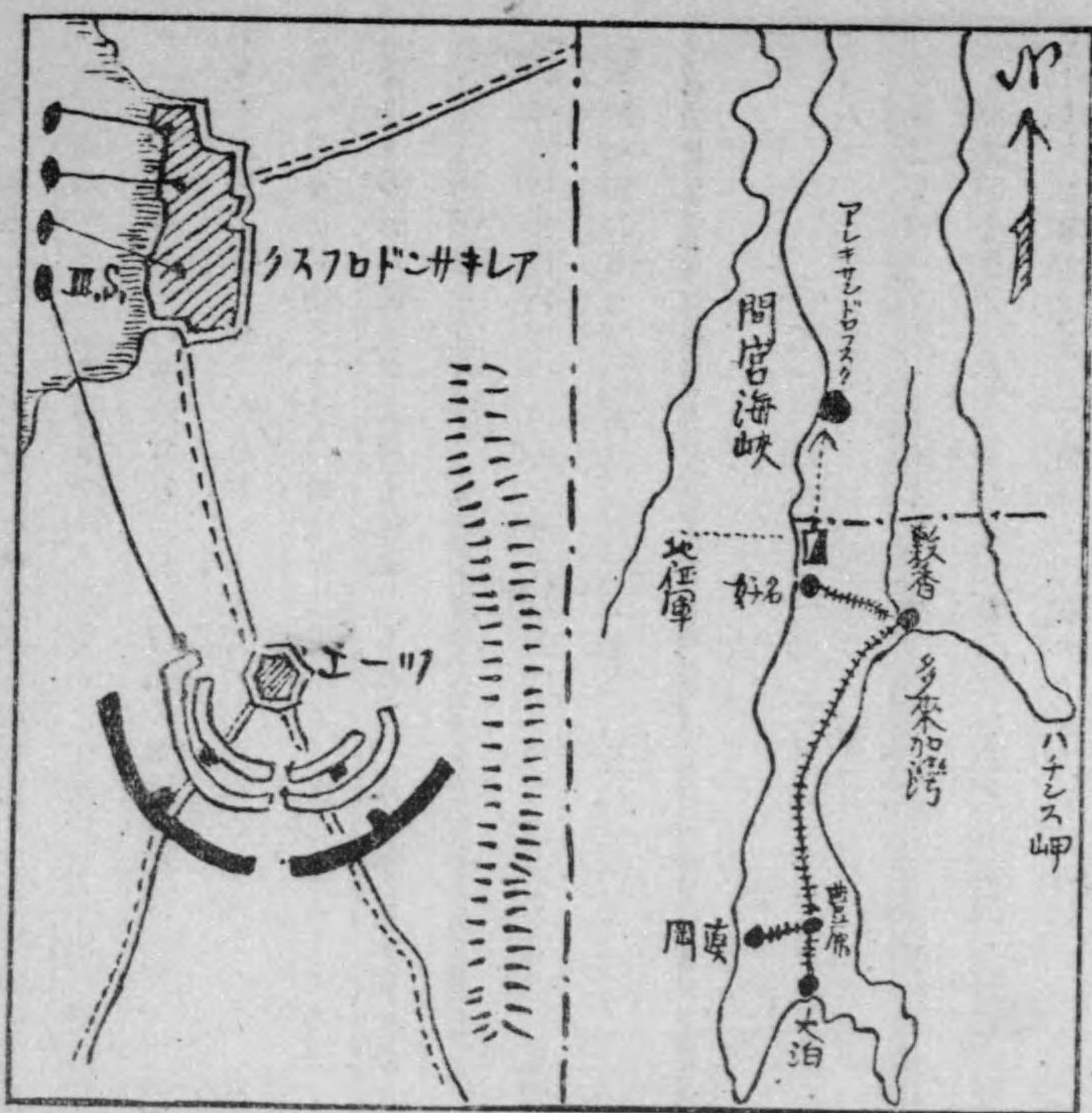
七月二十八日敵陣地前に到着し戰鬥準備の隊形を以て夜を徹し二十九日未明より攻撃を開始



す。敵の兵力は我よりも稍々劣勢なるもの、如く、ツイーエを背後に防禦線を張り頑強なる抵抗を爲したが、我が艦隊がアレキサンドロフスク沖に現出して同市を砲撃し、又其一部はツイーエ沖に來りて陣地の背面より猛烈なる砲撃を行ひしかば、敵は遂に陣地を棄て、北方に敗退することとなつた。時に午前十時二十分。アレキサンドロフスク港内にありし露國砲艦三隻は遂に武装を解除し我軍に投降するに到り、午後四時三十分全く此附近を占領して大日本帝國の國旗は極北の風にヒラ／＼と翻いて居た。露領樺太の首腦地は實に此アレキサンドロフスクである。ツイーエの一戦脆くも彼等の敗北に歸し最早抵抗するには兵なく、逃走せんには間宮海峡を渡るべき船舶なく北方に去れば孤島の悲しさ、其果てありて洋々たるオコツク海に終る。絶體絶命の彼等は父子相携へて我が軍門に救ひを乞ふに至つたのである。

敵の將卒は大部分我軍に投降し、俘虜は悉く我軍艦に收容せられて將來北海道の勞働に従事せしむることとした。敵の司令官少將ウーリヤスクは宣誓の上放免した。我艦隊は機を失せず北航して黒龍江口なるニコラエスクを砲撃せんとした。

樺太は先づ之を以て帝國の領土となつた譯である。軍司令官はロンギー附近に前進して堅固なる陣地を構成せんとし、艦隊と協力して陸戰隊を併せ指揮し、大陸方面より突然現出する敵を監視する事に定めた。同時に此寡少なる兵力材料を以て樺太全島の確保は頗る疑はしきにも



樺太北征軍の行動

拘らず、大本營に向つて、全戰役終了まで決して援助を要求することなく本島の守備を全うせんと誓ふた。其大膽と其獻身的には部下一同泣いて奮起した。然しながら黒龍江口は總ての意味に於て危険の或物が潜んでゐるやうに思はれた。せめて此附近に要塞の一つもあらばと思はぬ譯には行かなかつた。樺太軍が孤立して遠



く要地に前進したるを知つた在樺太民は馳せ參じて其守備の任に當らんことを島の政府に願出たが、實業殖産の忽にすべからざることを説いて、直に必要なる人員以外は決して採用しなかつた。大森林のみを載せた全島は温暖の氣天地に満ちて、谿間には鶯などが啼いてゐた。青葉若葉の景色は坐ろに内地の春を思はしめぬでも無かつた。唯臆皆祖國に充實した日本人は薄弱なる軍勢に依つて大島國を守り徹さんと銳意努めたのである。さうする裡に鐵嶺の大勝も傳はつて來て、本戰方面が着々順境の作戰を交へつゝある事を知つては狂喜に躍り上るやうであつた。極北の快報は内地の人心を痛く昂奮せしめて老弱男女共に地圖を擴げて今日は明日はと帝國の領土の擴がるを喜び勇んで神佛に祈りを捧げるのであつた。

(七) 嗚呼！七月三十日！！

大正〇年七月三十日は我 先帝明治天皇陛下崩御の第〇週年である。滿洲軍も海軍も全員齋戒沐浴して哀悼追弔の誠意を捧げ、軍樂隊は「哀しみの極」を奏して國難の前途に幸福あらせ給へと祈つた。

戦士の腸は寸断れさうであつた！  
東の空を伏し拜んで先帝の御靈に勝戦を禱り 今上陛下の御武運長久を祝福した。  
哀しき絲のやうな細雨が涙の如く降るのであつた。  
近く白人と相對峙せる海陸の巨軍は半旗を翻して謹慎の微意を捧げた。  
過ぐる兩度の戦役——其れは先帝が世界の強國となり給ひし花々しき戦争であつた。目前に控ゆる大戦之れは 今上陛下が宸襟を惱ませらるゝものである。未來は勝利か否か？ 神ならぬ現世の赤子の知る由もなし、靈か靈あらば先帝陛下よ！ 我等の祖國を勝たしめ給へ!!!



### 第六章 天空の妖魔（立體戦）

#### （一） 腐敗の象徴

飛行機が戦場の役に立つやうになつたから、未來の戦争は残酷だ〜と人々が口に出しながら手には何程の努力もしなかつた怠惰の天罰は此戦争に於て靚面に降つて來た。

曩に浦鹽斯德の港沖に於て、我聯合艦隊が痛く虐しめられた敵の精銳なる飛行艇隊は、獨り此要塞の武器たりしのみならず、北韓軍の頭上にも滿洲軍の天空にも群鳥の如く出沒して、飛翔を逞しふし、悠々として恐るべき爆裂彈を投げ付けるのであつた。氣流の關係に依つて動もすれば飛行に妨碍を受けた時代は遠く過ぎ去つて、今は如何なる暴風雨の日にも妖魔の如き大鳥が我等の頭上遙に翔廻つてゐる。

我帝國陸海軍に於ても此艇隊の無いでは無いが、露國のものに比較すれば恐ろしく劣等で、到底彼等を制御すべく思ひも寄らぬ事であつた。殊に飛行の術は今猶研究中にあるので、完全無缺世界第一と唄はれたる露國の材料に敵することは蠅螂の斧を牛車に揮ふのと些との逕庭もなかつた。

スクリューが空氣を振動さしつゝ、ふいと雲間に現るゝとき我軍の一同は憎惡と恐怖との混合した眼を以て地隙に避難する其の遺瀨なごよ！

『天空の妖魔』如何にも天空の妖魔である、嗚呼此〇年！日本の飛行機研究は至つて遅々たるもので、漸く軍用の一角を占めたのも、一昨年の事であつた。我軍の飛行機が敵に對して左までの痛撃を能ふ事が出來ないだけ、其だけ敵の飛行機は戦場の勇者であつた。遂に我軍をして土龍の如く地中に穿孔して妖魔の毒煙を避けざるべからざるの悲境に陥らしめた。

昌圖康平の線にある我滿洲軍五十萬は第二期動員出兵の戦場に到着するまで一時休止の姿勢にありし間坑道深く掘り貫いて、一途に天空の妖魔を避けた。が、今更如何に口惜しがつたつて祖國に訴へたとて及ばぬ事である、強て祖國に報じて母國人を悲觀せしむるのは徒らに人心を悲觀せしむるなど却つて害あつて益の無き所、唯戦時中と雖も飛行機研究を忽にすべからざる事を忠言したるに過ぎなかつた。砲撃も頗る困難にして、斯の輕快速力に向ては發射法も未だ充分なる研究を爲されあらず。前途に如何なる優勢な敵が居らうと其れは大膽不敵な日本兵の恐るゝ所では無いが、此不思議な妖魔が天空を翔け廻はるに於ては少からぬ不安が伴はずには措かなかつた。

之れが爲め我諸砲兵各陣地は深く敵眼を避くる事に努め各司令部も亦なるべく地中に設けて



不識の災害を蒙らざる手段に吸々とした。我飛行機も亦時々出て、敵陣を窺つたが、敵は我軍とは異つて坑道作業をも行はず飽くまで悠々閑々として對陣の數日を暮らしてゐた。然しながら『我軍は材料を以て戦ふのではない、魂を以て敵に勝つのである。』——かうした健氣な志想は絶へず漲つて、決して天空の妖魔のみに依つて大局が敗軍に歸するなど、思ふのではなかつた。材料の爲めに多少多くの犠牲をも拂はねばなるまいし、やる瀬ない思ひもせねばなるまい位な軽い心裡状態であつた。

然しながら北方地平線から蝶群の如く蜂軍の如く突然舞ひ揚つて懸て我等の頭上に來るとき我等は敵の飛行隊の踴躍を嫉むよりも我飛行隊の劣弱なるを慷慨せずには居られない。斯様な文明物の進歩が常に遅れ勝ちとなる日東帝國が大正〇年の今日となつても依然として同状態にある事を思ふと、机上の空論家のみ富んで、實行の功績が少しも其れに伴はないことは實に實に痛嘆此上もない事を袴々胸を抉るやうであつた。戦場の男の兒は切齒憤慨するのであつた。増師反對ならまだしも、中には架空の説を喋々として軍政改革、其れも多くは軍備縮少の意味を以て論ぜられた所で、世界の趨勢を知り祖國の前途を憂ふるの士をして聳せしめた事一再に止まらず。其都度血管の充實した巨腕踴躍の日本青年をして、兵に對する信仰を輕薄ならしめ浮華文弱以て身を處するの上策だと誤解せしむるに至つた。國民には別に閥族てふ一種の

反感から堂々たる日本の陸軍を以て『長の陸軍』なる偏狭より態々軍備縮少を唱ふる無意味の徒輩が多かつた。有りと有ゆる偏狭漢の片影が大々的弊害を作出して、今見る戦場に於て豫想せざるの不結果を來し、獻身殉國此れ我事と自任したる善良なる戦士をして戦慄せしむるものがあつたのは誠に残念なことである！

『未來は空中戦に由つて戦争の勝敗を決するのである。』とは明治末年頃から人も我も信ずる所であつたが、言ふは易く知るは易けれども行ふは難く實效を表はすは難かつた、否情弱なる國民は行ふべく奮勵しなかつたのである。戦争に用ゆべき兵器材料は悉く軍人が發明し研究すべきものであつて門外漢の關知せざる所だと誤認してゐたのである。泰西諸強國の一般社會の人士が健全なる頭腦を揮つて武器の提供に獻身した事は大切な東洋の強國內に於ては一向に見ることは出来なかつた。太平の御代には其れも直接間接の苦痛ではなかつた。が、が、世界戦の端緒たる再度の日露戦に於てした、か其打撃が國軍の頭上に降りかゝつた。

戦士は言つた『若しも此戦争が終局を告げて萬一生還することもあらば、軍備縮少——増師反對を口に唱へて帝國の武光を滅殺した、僞學者連を引摺り出して打踏めしてやらねば腹の蟲が癒えぬ。』

又言つた『國防を論じ兵を談ずるものは今後手も亦働く人に非ずんば立ちに鐵拳の制裁を



加へて、尙武の青年をして耳を傾けざらしめねばならぬ。」  
 又言つた。「國力を脆弱に導きたる偽學者、偽紳士は片端から束ねて、新領地カムチャツカ以北の不毛地に放逐し、該地に於て勝手な熱を吐かしめむ。之れ不毛の地を開拓すべき或一方法ならむか……。」と。

嗚呼！ 戦未だ半ならずして既に、戦士の頭腦に容易ならぬ不平の念が閃いた、其れも祖國を誤る偽君子が幅を利かして後進の徒輩を柔情の方角に導いたばかりに今日の結果を見るのだと絶叫するのであつた。大凡戦争を交ゆる當の内地に於て、戦士を憂慮せしむる分子の墊伏しある程戦闘力を減縮するものは爲い。吾人は過去日露戦役に於ても親しく其實例を目撃してゐる。其れは敵の露本國に於ける虚無黨の動亂が總司令官クロバトキン將軍の腦を攪亂し、五十萬の第一線が脆くも敗戦を重ねて滿洲の地を千古の涙を流しつゝ放棄せねばならぬ事となつた、今や我等の敵國露西亞は内政治まり舉國皆極東の大戦に祈を捧げて十〇年前の耻辱を雪がんと扼腕撫腕……其れに引き替へ日東帝國の戦士は、内地にある門外漢の知行の合一せざるを憾みつゝやる瀬なき戦争を爲しつゝある。

僅か〇年の變異よ！ 桑田變じて海となる、僅か〇年の間に日本の内情は偽君子の毒舌によつて汚されたる事多大なりしを奈何せん!!!

(一) 航空十年皆是れ血!

十〇年前の戦場に於ては、沙河滯陣、奉天對陣、最後に昌圖康平の滯陣に於て敵が輕氣球を飛揚して我軍の動靜を窺ふたといふので、大分八釜しい問題であつたが、時は推移した。戦争が終局となつて凱旋歸國內地の色彩に酔はんとする頃歐米諸強國に於ては、飛行機の研究ありて世界をして一驚を喫せしめた。殊に戦勝の刹那に於ける我帝國軍事界の驚きは一方ではなかつたのである。

間もなく飛行船も出来、飛行機も出来——遂先日まで地中戦とか叫んで詩的戦争の慘烈を嘗めた人士も、急轉直下地中戦を忘れて、未來の戦争は空中戦であると決心せねばならなくなつた。大正初年頃バルカン半島が痛く混亂して、飛行機が戦場に應用せられ、一瞥戦慄に價する莫大なる効果を以て迎へらるゝに至つた。

泰西諸國に於ては此數年間飛行機研究の爲めに、或は風向の爲めに墜落して貴重なる人命を犠牲とし、研究の爲めには幾百の血を拂つた事であらう?! そして我國に於ても明治四十年頃から少數の軍人或は一般人によりて漸次研究の歩を進めらるゝに至つた。が、奈何せん之れを軍用に立て直す迄には多くの未來と手續と熟練研究を踏まねばならぬやうな場合であつた。其



間にバルカン半島に於ては既に戰場に應用するに至り、世界の未來戰をして遂に制空なる奇異の光彩を帯びしむるに至つた。

大正二年三月の調査に依れば、歐米諸國の軍用飛行器勢力は左の如きものであつた。

- (英國) 飛行船二隻、飛行器百〇一隻
- (獨逸) 飛行船十三隻、飛行機二百五十隻
- (佛國) 飛行船十隻、飛行機三百隻
- (露國) 飛行船六隻、飛行機二百五十隻

之れが爲めに支出する一個年の費用少きも八百五十萬圓、多きは千八百萬圓に上る。而して大正二年度に於ける列強の飛行艇隊費の豫算は、

- (英國) 陸軍の飛行艇隊費として、二百三十四萬圓を計上し  
海軍のものも合算すれば五百萬九千五百圓に上る
- (獨逸) 一九一四年より一九一八年までの  
繼續事業として約三千五百萬圓
- (佛、露) 飛行艇隊費は不明なるも此年より更に飛行艇隊の擴張を行ふことに決定し居る次第なれば、佛國の如きは獨逸が既に大擴張を行つた以上必ず此れに劣ることはあるまいし、露國も亦少くも獨逸と同じ程度だつたに相違ない

回顧するに、普佛戰爭以來、列強は盛んに陸海軍の擴張を行ひ甲國が陸軍擴張を行へば乙國亦之に倣ひ、丙國海軍を擴張すれば丁國亦海軍擴張を行ひ、彼十歩すれば我亦十歩し、遂に今日見るが如き軍備競争の形勢を馴致したが、列強の競争は能く其權衡を保ち一國が他國を抜

て絶對的優勢を占むることは能きなかつた。殊に獨逸は一八一〇年來英國の海軍に對して猛烈なる競争を續け來りしも、獨逸一艦を増せば英國二艦を増し到底獨逸が步調を合はすべき望みもなく一八一四年遂に其野心を投棄し隱然飛行艇の優勢によりて競争の勝を占めんと全力を用ゐるやうになつた。

飛行機を軍用に使つたのは十二三年前のことである。當時猶完全なるものは作り得なかつた。が歐米列強の之れに對する暗闘は遂に一大成功を來して今戰場に見る如きに至つた。

(著者曰) 私 が此稿を此處まで進めて來て未來の妄想を逞しうせる一刹那！所澤の飛行場に於て、木村、徳田兩中尉がブレリオ單葉飛行機と共に不幸にも墜落して慘死を遂げたと聞き、胸塞がり悲涙頬を傳はつて流れた。我國空航犠牲者の嚆矢として七千萬の同胞が多なる同情と愁嘆の涙を注いでゐる。私はかうした悲惨の光景を演ぜられて後の飛行機發展に深き憂慮を惹起するものである。今や泰西諸國は飛行機發達漸く其界に達し二百人の犠牲を拂うて深く厚く既に得る所があるらしい。翻つて日本は今や犠牲者提供の時代にあることを思へば、其一步を遅れたる軍事界の爲めに洵に殘念に堪へぬ。嗚呼徳田中尉は私と同郷、しかも同窓の友である、山河數百里を隔つと雖も未だ嘗て中尉の事を忘れるやうな事は無かつた。中尉が飛行選拔將校として上京したと聞き、如何ばかりか私は喜んだ、そして此青年に向つて大



切なく飛行機操縦に關して望むことが多かつた。が、中尉は難に殉じて幽冥處を異にする事と成つて了つた。前途多忙なる邦家の爲に此程惜しい事は無い、私は此未來戦執筆の半途に於て、敢て一短の辭を陳べて木村中尉の嚴父氏及び德田中尉未亡人遺兒方へ深重なる哀悼の意を表するものである。

大正二年三月二十九日

陸軍歩兵中尉 原田政右衛門

嗚呼世界航空史の犠牲者中に我木村德田兩中尉の名を見るとき、我等は如何なる感じがするであらうか?! 意氣壯なる二青年士官が今や赤誠發揮の首途に踏み出しながら、あたら惜しき心身を妖魔の手に渡はれて、鬼神をして泣かすむ。

木村中尉! 德田中尉! 年は空しからず經過して今は世界戦の幕を切つた。足下の英靈を慰むべき秋は來た、足下以て冥すべしである。

同日

陸軍歩兵中尉 原田政右衛門

嗚呼露國飛行艇の總數は未だ幾何なるかは不明であるが日本の總數七百三十に對し少くも三倍乃至四倍の數に上りあるは最早疑を容るゝ餘地もなかつた、三倍と假定すれば實に二千九百九十の大多數である。我軍は之れを各軍、各軍團司令部に附屬してゐるから、實に少數で殆ん

ど天空の一角を曇らすにも足りない程であつた。

此〇年間歐米列國に於ても航空の歴史は皆是れ血であつた。我國に於ても亦木村、德田兩中尉を始めとして貴重なる生命の犠牲を拂ふこと實に八十六名、一年平均八、六人である。

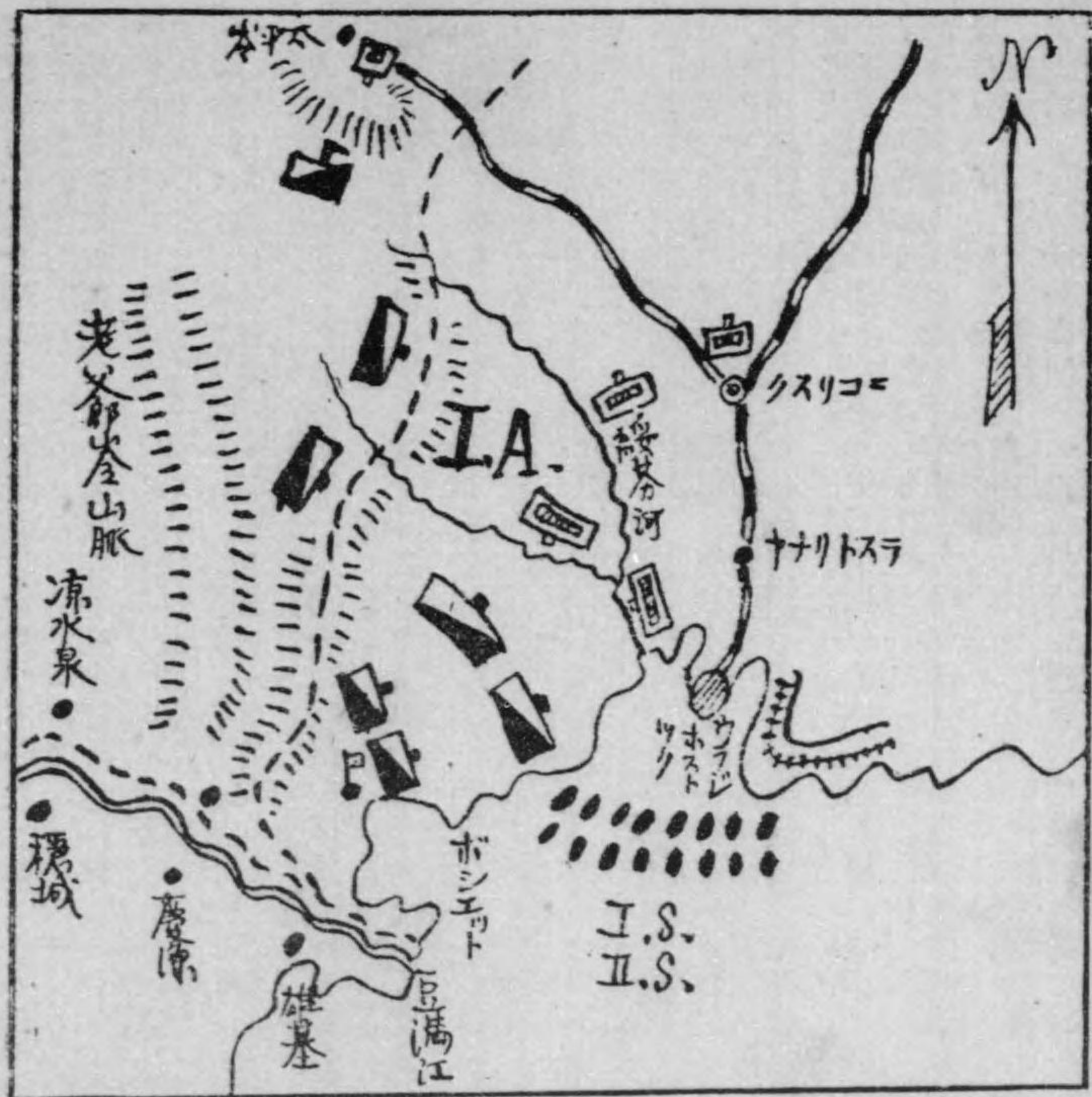
私は此處に殉難者の光榮ある姓名を掲げたいが、本務の未來戦を急いで其間に戦死病歿する人名を載することの出來ないと同一の理由を以て改めて芳名を掲げぬ事にしよう。十年の航空史外國も我國も悉く血を以て彩どられた事を人として此世に活きる者の夢寐だも忘れてならぬ事件である!!

(三) 妖魔の大血戦

大正〇年七月十八日、我第一軍は全部其勢力を雄基—慶源—穩城の線に集中し、前日來の快晴に豆満江の水量低減したるを利用して、夜間渡河の強行に着手したのである。第一艦隊及第二艦隊は江の沖遙かに來つて巨砲彈を敵の築城陣地に浴びせかけた。砲艦數隻は勇敢にも吃水淺きを利用して江を溯り我第一軍の渡河を掩護すべき任務に服した。

其夜は下弦の月幽に長白山脈の山端にかゝりて月影暗き河岸の中に我忠勇義壯の戦士は奮勵又奮勵……偽渡河本渡河の虚々實々を盡して、狭き地域の國境を越え、首力はボシエツト沿岸





攻圍軍の前進略圖

(七廿日現狀)

に進出し、一部は環  
春—凉水泉に進出し  
て、十九日正午頃山  
地の困難を経たる後  
少數の守備兵を驅逐  
しつゝ遂に敵の本陣  
地及山地の支阻壁に  
衝突し爰に一大激戦  
を演出するに至つた  
のである。我第一第  
二艦隊の一部は軍主  
力の戦闘の發展する  
に従ひ漸次要塞の方  
角に移動を始めて、  
混戦亂戦を極めつゝ

七月二十日老翁嶺山脈一帯及びボシエツト灣を背後にして綏芬河々孟の平地に進軍した。雲烟霧糊の裡に日光を受けて燦々ときらめく物體はあれは何であらう？ 黒烟を吐きつゝ海上に蟠居する黒色の物體あれは何であらう？ 浦鹽斯德市街の尖塔圓塔が長い間山地を跋渉した我大日本帝國軍人をして慰安の姿を見せたのである。祖國の人々をなつかしむ戦士をして爽絶快絶の聲を揚げしめたのは實に我聯合艦隊の英姿であつた。

綏芬河左岸一帯の線には大約一軍團餘の敵の城外支隊が堅固なる防禦陣地を構成し、ピーター大帝灣内にある浦鹽斯德艦隊と相呼應して我軍を拒止せんと大斧を揮り揚げてゐた。第一軍司令官高矢木大將は、攻圍線の第一基礎を確定する爲め先づ綏芬河の右岸に於て強固なる陣地を構成すべき事を命じた、其條件の一たる西比利亞鐵道の連絡を遮斷する爲めには運動困難なる山地の方面に其主力を用ひねばならぬ。

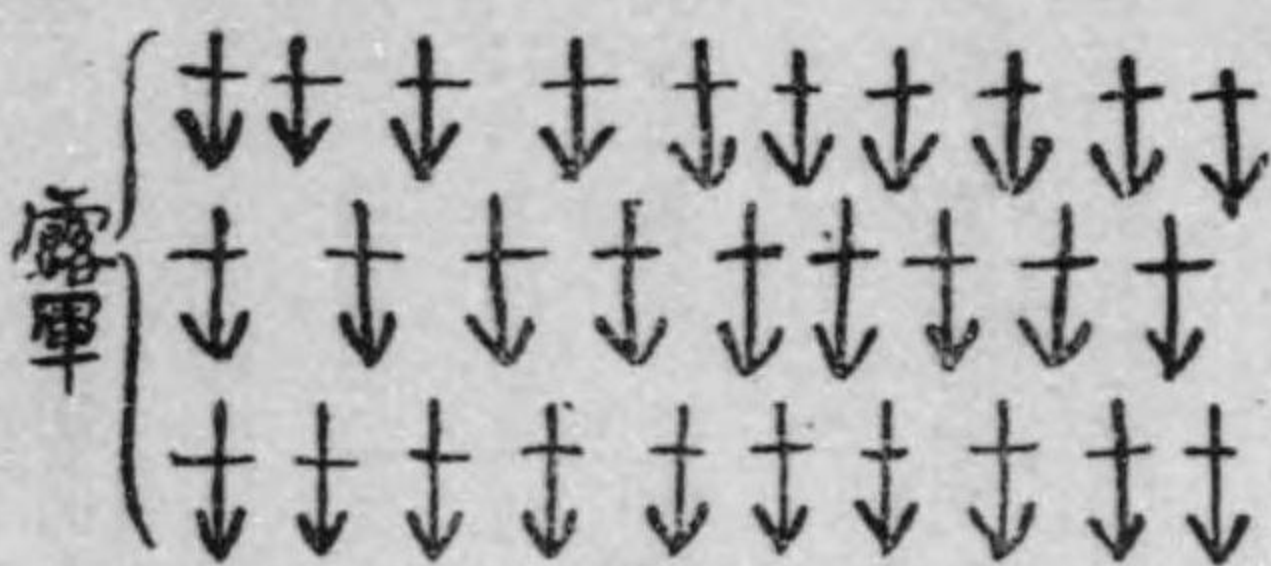
軍司令官は、第一軍團及獨立徒歩砲兵旅團を海岸方面に使用し他の野戰軍主力を提げて鐵道線路方面に肉薄せんものと所要の部署を爲し主として鐵道線路に正對する如く作戦を指導せんとした。諸部團隊は精勵努力困難を冒して七月二十日夕迄に、略ぼ其緒に就き殊に第七軍團方面は近く敵と相對峙するに至つたのである。

七月二十一日後備第一師團及第十一軍團は老翁嶺山脈を越えて、綏芬河水源地に進出し、該

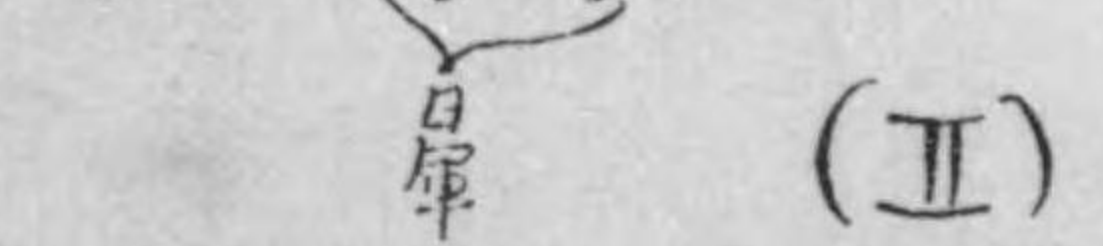
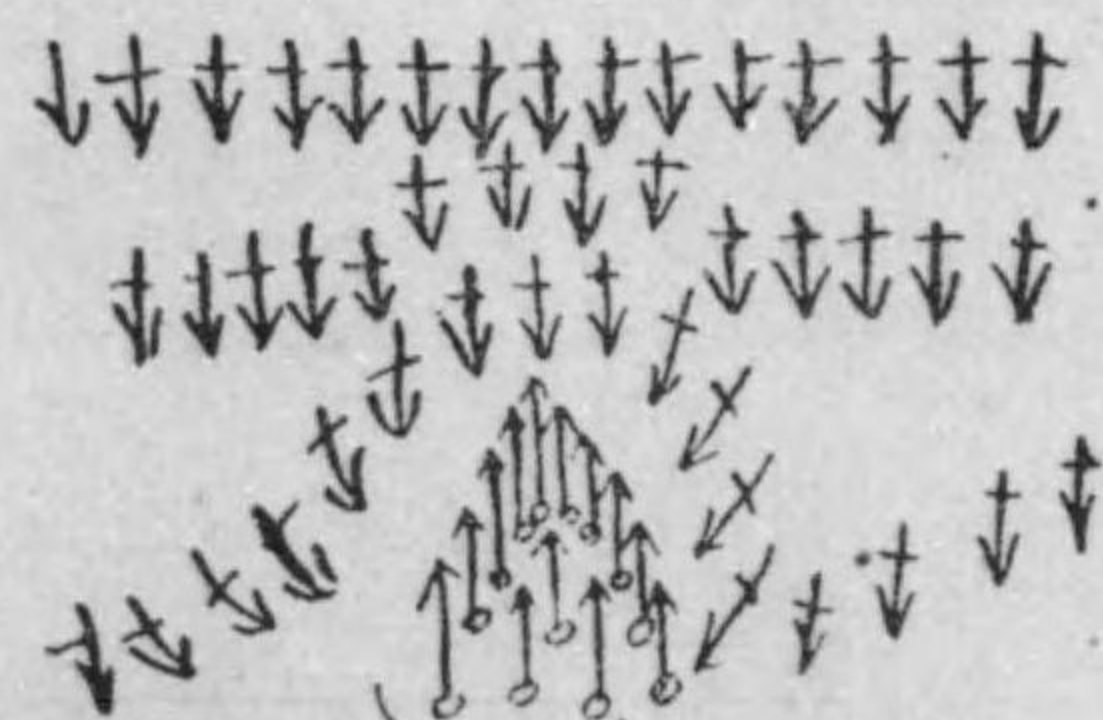


方面の敵を驅逐して、ニコリスクの陣地に進撃せんと準備中であつた、我軍の左翼たる太平嶺附近には少數なる敵の守備隊ありて附近の山地要害に據り堅固に陣地を張つてゐる。斯様にして戦機は發展した。

此上は  
滿洲軍主力の攻撃  
進歩を待つて、一  
擧にして  
鐵道線を切斷する  
あるのみ



期時一第



期時二第

七月廿二  
日朝來強  
雨蒼りに  
到り滿天  
墨を流せ  
るが如く  
掻き曇り  
て、物凄  
じき迄險

惡なる天候となり、午前九時頃より第一第二艦隊は一齊に砲門を開いて浦鹽灣内を砲撃し始めた。我攻城砲兵團も同時頃其に呼應して長加農の遠戦を行ひ四邊一面焦熱地獄となつた。然ながら我陸軍は敵との距離未だ甚だ遠く、單に綏芬河左岸の陣地に蟄伏する敵の野戦軍を砲撃する

に過ぎなかつた。軍の主力は強雨を冒して今猶移動中にある、唯第一軍團の砲兵隊が戦闘に參加したのみで、未だ真面目の戦闘といふ譯でも無かつた。

午前十時三十分頃雨勢僅かに熄んだ。と思ふと掻き曇つたる天空に凡そ二百餘の飛行艇が翼を揃へて我第一軍團の陣地を窺へて攻め寄せて來た。目蒐けて攻め寄せて來た。

「ホラッ来たぞつ。」

一同異口同音に叫んだ。

之を見澄ました我飛行艇

隊七十四隻は約二百米突の

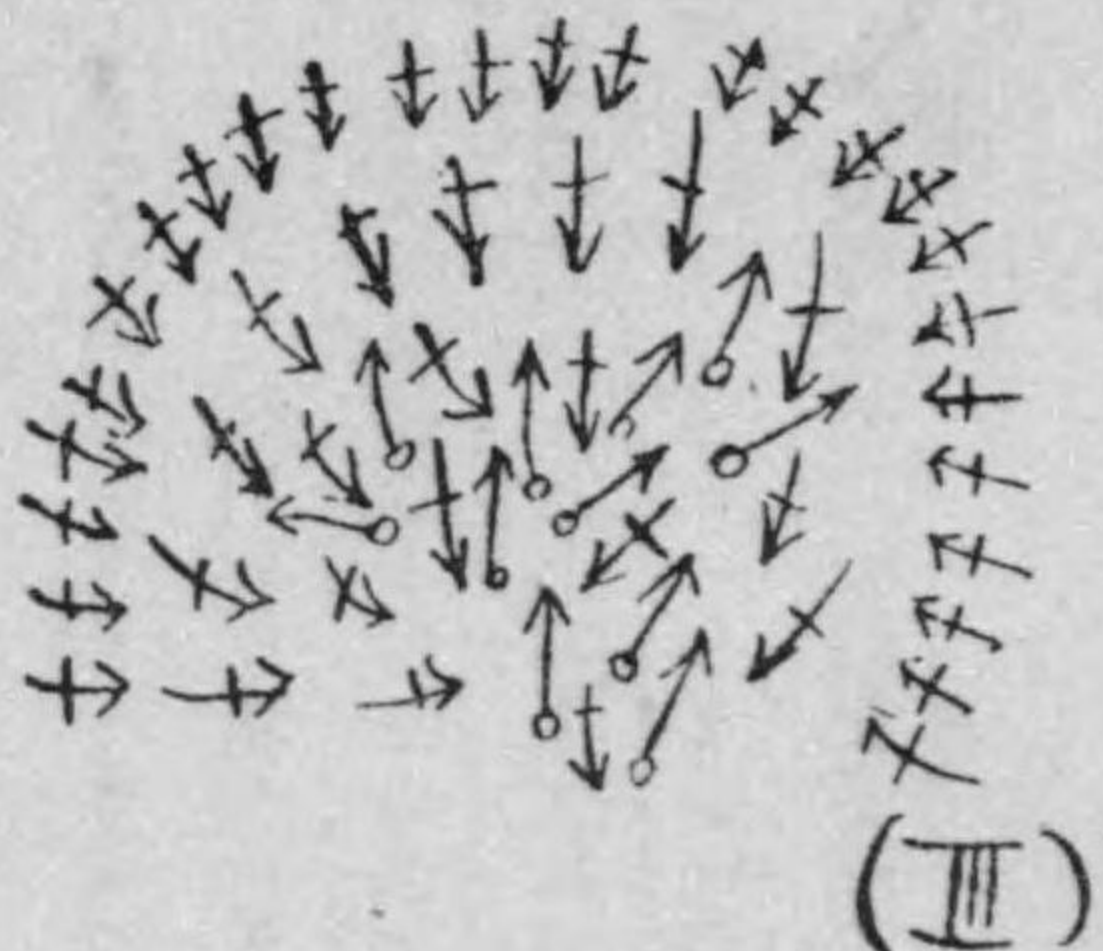
滑走を爲すよと見る間に敵

の妖魔目蒐けて雲井遙かに

舞ひ昇つた。

一瞬の後兩艇隊は一大混亂となつた。

敵の第一線は見事に突破されて第二線も同一の運命に陥らんとしてゐる。次の瞬間！粉塵された敵の飛行艇は時ならぬ花や紅葉の散る如くヒラ〜と地上に落下す



(III)

期時三第

二百に對する七十……如何程の效力があらう？三線の横隊となつて前進し來る敵の飛行艇の中央に向つて猛烈に突進した。其れは衝突するつもりであつたのだ。材料で勝つのでは無い、人で勝つのだ！これは此隊形に於てよく證明されてゐる、



る。其慘烈殘酷……人は生汗を握り目を閉じた。彼等の飛行機は巴渦の如く空中に活動して衝突又衝突……粉塵又粉塵……其都度地上に墜落する壯烈悲慘、これが現實の世であらうか？！

吾人は嘗て滿洲平野に於て騎兵の格闘を見た、あの間髪を容れぬ突差の活劇よりも飛行機戦の物凄さにはさながら天の悪戯か世は澆季かと其一瞬間は全て失神する程であつた。

有繫は日本男子だ！ よくやつた!! 悔り難きはスラヴ男子だ！ これも見事だつた!!! 妖魔の血戦は瞬間に終りを告げた。我艇隊残るもの僅かに十三隻……今猶空中に大旋回を行つて今一戦と意氣込んでゐる。敵の艇隊も凡そ六七十は地上に落ちた。敵の艇隊が地上に陥るや我大正式自働野砲は其機械を目蒐けてズドンと爆裂榴霰弾を浴びせかけた。空中に残つた百餘の敵艇も亦大旋回を爲しつゝ、損害多き此戦闘を名残りに彼等の陣地の方向へ全速力を出して消ゆるが如く逃げ隠れた。

誰も彼も飛行艇の眞面目の血戦を見たことは之れが冒頭であつた。軍司令官は我飛行艇の大部分を失ふとも、其行動の壯烈にして日本男兒的であつたことを痛く稱讃して艇隊長以下に感状を授與した外國従軍武官は此珍奇壯烈の光景を見て前後を覺えず其所持する白金の時計を艇長の一人に送つて狂喜的満足の意を表した。

やがて十三の飛行艇は恐るゝ氣色もなく我陣地に歸着して、神色自若としてゐた。外國武官は驚嘆の口を開いて、

『雲上の妖戦。』

と名をつけた。如何に援助せんにも雲上に於ける戦闘は唯あれよ〜と叫ぶのみで如何することも出来なかつた。我自働野砲が射撃せんとせしも我味方を撃落せしむる患があるので徒らに傍觀するのみであつた。

(四) 嗚呼陸上の生靈

浦鹽要塞の飛行艇隊が三線を作つて押し寄せたるに怖る氣色もなく、僅々七十の小艇隊を提げて其中堅に衝突せし大日本陸軍の勇烈には有繫のスラヴも驚いた。少數の勢力を以て優勢なる敵を破るには常に團結の鞏固なるを必要とするの教訓は日本軍によりて始めて實現されたのである。七月廿一日の空中戦は數に於て到底露國の敵たることの出来ない日本飛行艇が花々しき成功を遂げて、要塞の羽翼物を粉塵した事は直ちに世界の問題となつた。

陸軍は其兩足が地上に附着することに依つて始めて陸軍である。吾人が祖國の港灣を發航して僅々三四日の航海にも、如何にやる瀬なく如何に不安の念を起したらう?! 若しも怒濤の爲



めに嘖み込まれる、或は敵艦に捕獲されるやうな事もあらば、陸兵は本能の力を發揮することが出來ずに日本海の底に沈まねばならぬ。如何に残念に如何に憤懣に死ぬ事であつたらう。又飛行機を見ては吾人は土地から足が離るゝといふ強い恐怖の閃めきを覺ゆるのである。海にもあれ空中にもあれ陸上に活躍すべき本質を備へた陸軍戦士には、容易ならぬ問題である。地中戦、地上戦……吾人は此二つを以て戦争するものと思つてゐた、空中戦嗚呼如何に陸上の生靈を惱ましむるよ!!

昨日の空中戦は如何にも壯烈であつた、而して閃光の如く一瞬間であつた。(著者は航空史を飾る最初の犠牲者木村徳田兩中尉をして今日まで活かして置きたいと思はれてならぬ。)

七月廿一日の午前は此悲劇を濟まして午後を迎へた。空は再び暗黒となつて風伯雨師の光來殊の外劇烈に艦隊の砲撃も霧靄の爲めに鎖ざされて已むなく中止の姿となつた。各軍隊は警戒を嚴にして敵の不時の來襲に備へるに濡れて皇國の爲めに誠心誠意のベストを發揮してゐた。

綏芬河は見る／＼裡に奔流して兩岸は一場の海と化した、脛を没する泥濘中を往復して十數萬の陸上生靈は身を粉にして働いてゐる。嗚呼陸上も亦海か?、困苦缺乏は軍人の常とはいひながら第一軍の今日の辛苦は蓋し筆紙の盡す所にもあらず言語のよくすべき所でもなかつた。にも拘らず軍主力は肅々として險惡なる山地を進行してゐる。

鐵嶺、康平の線に滯陣中なる我滿洲軍主力四十幾萬の陸軍は海龍城に第二軍を轉進せしめて輝發城——土門河孟の警備に任じ、第六軍を伊通洲方面に進出せしめ、鐵道線路兩側には第三軍第四軍を置くこととなし、康平には依然第五軍を駐屯せしめ、獨立軍團を以て瓮翁方面に前進せしむることゝ爲し、七月十八日より運動を開始することとなつた。

昌圖附近に於ては彼我屢飛行艇の衝突を見るも未だ青史を彩るべき大規模のものはなく、互に其並に乗じて爆裂彈投下式のものであつた。鐵嶺附近の大會戰に於て死傷せる我各軍は再び充實して諸準備も亦完結したのである。飛行艇に對する若干の嫌惡心は未來の會戰に於ても少からず種々の不安を以て迎へられた。浦鹽方面の突破戦法が一大成功をした事が聽て本戦方面にも喧傳せられ、志氣を鼓舞すること多大であつた。飛行艇使用は敵の集團に對しては全速力を以て衝突するのであつて、疎散なる隊形に對しては我も亦各個に其一つに衝突すべき覺悟が必要となつた。往年騎兵の大襲撃を謳つた時代が變じて今は空中に於ける襲撃法が同一要領に謳はるゝやうな興味ある曙光を見出すに至つたのである。

北滿洲の地も秋の色が仄見えた。叢にすだく蟋蟀の聲は何處の國邊も物哀しく耳を打つのであつた。第一線、後方勤務合して二百萬の生靈は未永き未來の戰運を祈らぬものはなかつた。



此世に於て生靈の爲しつゝある努力と齷齪の大部分は罪惡である、争闘である、殺戮である、破壊である、武装的平和、吾人は其反面に漲溢する劍戟の閃きを見通してはならぬ。其見通さざる點に於て一死報國の赤誠が湧いて來るのである。海上の生靈も陸上の生靈も同じく其劍戟の閃きに依つて、生靈としての爲すべき當然の途を辿るのである。人は劍戟の閃きを不活の劍戟と狭き意味に採るのでは無い。生きて動く劍戟は即ち忠魂義膽の生靈ではないか?! 生靈の閃めき是れを以て敵に當るだけである。生靈の肉には總ての武器材料其れは何れの國のものよりも精銳なるものが備へられてあるのだ。大日本帝國の人は此生靈の光輝を失つてはならぬ。

(五) 平面戦と立體戦

吾人は此戦争に於て立體戦の發現を見た。水面を走る軍艦の戦闘陸上を馳驅する陸軍の戦闘地下を地平面と平行に進む陸軍の地中戦、水中を潜航する水中戦——皆是れ平面の移動に他ならぬのである。過去の戦争は地と水とを離れて行はるゝ事は無かつた。然るに空中を水平に走り上下に翔る飛行艇隊の活動に於ては、戦争は遂に立體物となつた譯である。吾人は一歩進むときは一步の地上権を獲得して其に相當した戦勝の意味を謳歌する事が出来た。けれど空中を飛躍することの出来ない人體が空々漠々とした天空を征服するの必要を見出さうなどゝは思は

なかつた。

制空權! 何等の悲惨なる名詞であらう?! 假令百歩進むも天空が敵の勢力範圍にあらざる

以上吾人は決して安全に濶歩する事は望まれぬのである。吾人の特色は平面戦に於て偉大であつたが、立體戦の成功は前途頗る憂慮すべきものとなつた。然しながら未來の戦争が空中に於て勝敗を決するなどゝ論じたのは餘りに誇大であつた。吾人は依然平面戦と相携へて有力なるものとなつた事を認むる事は出来るが空中戦のみを以て戦争の勝敗を決定する事迄に到つてゐないことを明言し得た。斯の如き誇大な説を爲す人は多くは精銳なる形而上の武器に依つてのみ勝利を獲能ふなどゝ叫ぶ門外漢の淺見であつた。形而上の精巧なる武器も勿論肝要なるべき事は吾人敢て否定しようとはせぬが、腐敗せる日本は未來永劫に敵國よりも精銳なる武器を携帶するの望みは絶對に無いことを豫期せねばならぬ。此缺陷を補ふ爲めには無形の武器即ち忠君愛國の武器を以てせねばならぬ。吾人が屢々絶叫した武器は固より此神祕な武器を指すのであつた。精神の武器は世界萬國の孰れの武器よりも遙に精銳でなくてはならぬ、其處に日本が勝利を呼び寄せ得る唯一の青山があるのである。此武器が一些の鈍りだもあつたならば日本軍隊は敗北すること疑ひなし。形而上の武器が劣等であるだけ其れだけ無形の武器はいよゝ益々精銳でなくてはならぬ。兵力優劣? 露國は一億有餘萬の人口を有してゐる、日本は七千萬の人



口を有してゐる。各人口の一角が肉弾と變ずるも擧國皆兵と爲すも兵員の數に於ては到底露國の敵には非ず！ 兵力劣勢にして武器劣等——戰勝の望みは皆無である。是に於て吾人は無形の武器を精巧ならしむると同時に一人に具備する戰闘力の量を増大して敵と權衡を保たなくてはならぬ。

其れだけの困難なる關所を超越し得る日本軍ならば勝利は決して不可能では無い、況や過去の戰役に於ても常に此實を發揮し得たるに於ておや！

惡魔の搖籃中に生育したる戰士中には、此眞摯不思議な戰闘力を具備してゐない者が多かつた。殊に飛行艇の不完全なるを一目した彼等の念頭には譬へ難き悲觀の萌しが頭を覗けてゐた。恐怖？ さにあらず。彼等の思想が形而上の武器のみに憧憬する事實なり！！

大凡戰場に於て淺薄なる戰士の眼目に映ずる事物にして、其れが敵の有にして而かも我等をして偉大乎を感じしむる程軍隊に取つて有害なものはない。自己の方面に於て徹頭徹尾敵に優るを信する時に志氣が揚がる、殊に日本軍に於て其現象は著しかつた。と共に其反對の結果も亦著しく志氣を挫折した。未だ戰爭を開かぬ前、武装せる飛行機を見て果して克く使用し得らるか否かさへも疑ふ程であつた。半信半疑の裡にあつて實戰に使用せられた我飛行艇隊は、其れでも豫想外の勇敢を發揮して自己の破損と共に敵の破損をも見る事が出来た。けれど

吾人は浦鹽斯德の平地に於て行はれたる空中戰を以て天空に於ける一定の戰闘法であると斷定する譯には行かないのである。然しながら若しも日本軍の飛行艇隊をして數に於て敵と同等たらしめたら如何なる現象を呈したであらうか？ 吾人は世界に於て初めて生れ出た空中戰——立體戰を今少しく大規模で今少しく權衡を保たしめなかつた事を遺憾とするものである。とは言へ折角戰闘見物の爲め從軍した外國武官は必ずや有力なる材料を獲て其れを彼等の祖國へ傳報した事であらう。吾人は極東の大陸上に於て立體戰の序幕をやつた事を寧ろ光榮とし且世界の歴史に永劫に傳へらるゝ事を誇りとするものである。唯悲しい哉日軍の劣勢なりしが爲めに充分なる効果を擧ぐる事を得なかつたことは其れに伴ふ一種の哀傷である。

吾人は淺薄なる戰術眼を以て次の如く言ふ事が能きた。  
『武装せる飛行艇が敵の頭上に走つて陸上の軍隊に危害を加へんとする、敵は之れを妨碍せんとする——其處に立體戰は勃發するのである。此戰闘に於て敵の機體を粉塵することは甚だ困難なるを以て小口径の速射砲或は自動機關銃を備へ付けて乗組の人命を奪はんことに力む。又發動機等には堅固なる覆を附し機體の先頭には鋭利なる衝角を備ふ。』

又此戰闘に参加したる飛行士官がいふた。  
『彼我混戰に陥つた後に敵味方の見判けがつかないのには困りました。』と。